

靈界物語 第五〇卷 眞善美愛 丑の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五〇卷』愛善世界社

2005(平成17)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 和光同塵 わくわうどうぢん

第一章 至善至惡 しぜんしあく（一二九五）

第二章 照魔燈 せうまとう（一二九六）

第三章 高魔腹たかまはら〔一二九七〕

第四章 御意犬ごいけん〔一二九八〕

第二篇 兇黨擡頭きようたうたいとう

第五章 靈肉問答れいにくもんだふ〔一二九九〕

第六章 玉茸たまたけ〔一三〇〇〕

第七章 負傷負傷ふしやうぶしやう〔一三〇一〕

第八章 常世闇とこよやみ〔一三〇二〕

第九章 眞理方便しんりはうべん〔一三〇三〕

第三篇 神意と人情しんい にんじやう

第一〇章 据置貯金すゑおきちよぎん〔一三〇四〕

|      |                             |        |
|------|-----------------------------|--------|
| 第一一章 | 鸚鵡返 <small>あうむがへし</small>   | 〔一三〇五〕 |
| 第一二章 | 敵愾心 <small>てきがいしん</small>   | 〔一三〇六〕 |
| 第一三章 | 盲嫌 <small>まうけん</small>      | 〔一三〇七〕 |
| 第一四章 | 虬の杯 <small>みづち さかづき</small> | 〔一三〇八〕 |

第四篇 神犬しんけんの言靈ことたま

|      |                            |        |
|------|----------------------------|--------|
| 第一五章 | 妖幻坊 <small>えうげんぼう</small>  | 〔一三〇九〕 |
| 第一六章 | 鷹鷲掴 <small>たかわしづかみ</small> | 〔一三一〇〕 |
| 第一七章 | 偽筆 <small>ぎひつ</small>      | 〔一三一〕  |
| 第一八章 | 安國使 <small>あんこくし</small>   | 〔一三一二〕 |
| 第一九章 | 逆語 <small>ぎやくご</small>     | 〔一三一三〕 |
| 第二〇章 | 惡魔拂 <small>あくまばらひ</small>  | 〔一三一四〕 |
| 第二一章 | 犬譚 <small>けんくわ</small>     | 〔一三一五〕 |

序文  
じよぶん

顧みれば、大正十年十月十八日、松雲閣に於て靈界物語と題し口述筆記を始めしより、十六ヶ月目、漸く五十巻を編纂せり。此間種々の故障の爲、着手日數は二百日内外の口述にて本巻に到達せり。而して本日は、大正十二年一月二十三日、此數字を合算すれば三十六となり、みろくに因む。又舊曆にては大正十一年十二月七日、此數字を合算すれば三十となり、三ツの御魂に因みたる吉日なり、又以て一奇と謂ふべし。靈界物語第一巻より第十二巻までを第一輯とし改めて「靈主體從」と題し、第十三巻より第廿四巻迄を「如意寶珠」と題し、第廿五巻より第卅六巻までを第三輯とし「海洋萬里」と題し、第卅七巻より第四十八巻迄を第四輯とし「舍身活躍」と題し、第五輯に當る「眞善美愛」と題せる物語を漸く茲に第二巻迄口述編纂を了りたり。何れも一題目毎に三百六十頁十二冊、計四千三百

二十頁と相成る次第なり。アア瑞月は精神上及び肉體上の大なる束縛を受けたる身ながらも、大神の恩寵と筆録者諸弟の熱烈なる努力とによつて、茲に五十卷の大峠を越えたるは實に人間事とはどうしても思はれないのであります。希はくば大本の信者はいふも更なり、大方具眼の士はこの熱血より迸り出でたる作物を愛讀あつて、宇宙の大精神を了知し、人として世に處すべき指針となし給はむことを。謹言。

大正十二年一月廿三日 舊大正十一年十二月七日

於伊豆湯ヶ島假教主館 王仁識

### 總説

本卷は祠の森の聖場に妖幻坊なる妖怪現はれ來り、三五教の空助時置師神と名乗り、戀と欲とに餘念なき高姫の義理天上自稱日出神の生宮が、兩々相對して聖場を占有し、館主珍彦その他の眞人を排除し、且大神の大神業を破壊せむと、獅

子奮迅の暴逆的活動を開始し、初稚姫の愛善の徳と信眞の光に照らされ、又猛犬スマートに脅嚇され聖場を遁走し、河鹿峠の谷道にて、イク、サールの追手に會し、妖幻坊、高姫對イク、サールの活劇の眞最中、又もやスマートが猛虎の勢にて現はれ來り、イクとサールの危難を救ひ、敵は自ら躓いて途上に顛倒し、悲鳴をあぐる場面まで口述してあります。愛善の徳と信眞の光に充されたる天國の天人界に籍を有したる初稚姫と、狂妄熱烈なる高姫と、肉體的精靈妖幻坊との三巴となつての活躍は、憑靈現象の如何なるものなるかを知るに最も便利なるものと信じます。讀者意を潛めて充分御研究あらむことを希望致します。口述者の瑞月も、また或る精靈の神格を充されたるものの媒介的活動によつて、この大部の書籍を編する事を得たのであります。今後益々御神助を以て完結の域に達せむことを天地の神明に願求する次第であります。

大正十二年一月廿三日 舊十一年十二月七日 於豆州湯ヶ島湯本館

王仁識



第一篇 和光同塵

第一章 至善至惡（一二九五）

本巻物語の主人公たる初稚姫及び高姫の靈魂上の位置及び其情態を略舒して參考に供することとする。

初稚姫は清淨無垢の若き妙齡の娘である。而して別に現代の如く學校教育を受けたのではない。只幼少より母を失ひ、父と共に各地の靈山靈場に參拜し、或は神靈に感じて、三五教の宣傳使と共に種々雑多の神的苦行を経たるため、純粹無垢なる靈魂の光は益々其光輝を増し、玲瓏玉の如く、黑鐵時代に生れながら、其本體即ち内分的生涯は、黄金時代の天的天人と向上して居た。故に宣傳使としてまた地上の天人としても、實に優秀な神格者であつた。大神の神善と神眞とを能く體得し、無限の力を與へられ、神の直接内流を其精靈及び肉身に充せ、其容貌

竝ならびに皮膚ひふの光澤くわつたく、柔軟じうなんさなどは殆ほとんどエンゼルの如ごとくであつた。故ゆゑに初稚はつわかひめ姫おほかみは大神おほかみの許ゆるしある時ときは、一聲いつせい天地てんちを震撼しんかんし、一音いちおん風雨雷霆ふううらいていを叱咤しつたし、地震ぢし雷海嘯かみなりつなみその外ほか風水火ふうすいくわの災わざはひをも自由じいうに鎮定ちんていし得うる神力しんりきを備そなへてゐた。されど初稚はつわかひめ姫あいぜんは愛善いとまの徳全とくまつたく身みに備そなはり、謙讓けんじやうなるを以もつて處世しよせい上の第一だいいちとなしめれば、容易よういに神力しんりきを現あらはす事を好このまなかつた。而しかして姫ひめの精靈せいれいは大神おほかみの直接ちよくせつ神格しんかくの内流ないりうに充みたされ、靈肉れいにく共に一見いつけんして凡人ぼんじんならざるを悟さとり得えらるるのであつた。姫ひめは能よく天人てんにんと語り、或あるひは大神おほかみの御聲みこゑを聞き、眞しんの善ぜんよりする智慧ちゑしやうかく證覺じやうかくを具備ぐびしたる點てんは、三五あななひけつ教けつきつての出藍しゆらんのほまれを恣ほしいままにしてゐた。それ故ゆゑ八岐大蛇やまたをろちの跋扈ばつこする月つきの御國みくにへ神軍しんぐんとして出征しゆつせいするにも、只ただ一人ひとりの從者ともびともつれず、眞しんに神かみを親おやとし主人あるじとし、師匠ししやうとし、愛あい善ぜんの徳とくと信眞しんしんの徳とくを杖つゑとなし或あるひは糧かてとなし、天上てんじやう天下てんかに恐おそるものなく、猛獸まうじう毒蛇じやの荒あれ狂くるふ深山しんざん幽谷いうこく曠野くわつやをも、天國てんこくの花園はなぞのを過すぐるが如ごとき心地ここちし、目めに觸ふるもの、身みに接近せつじんするもの、悉ことごとく之これを親したしき友ともとなし、且かつ此等これらの同士どうしとなつて和合わがふ歸順きじゆん悅服えつぷく等の神力しんりきを發揮はつぱいしつゝ進むすすことを得えたのである。故ゆゑに如何いかなる現界げんかい的てき智者ちや學者がくしやに會あひて談話だんわを交まじふる時ときも、一度いちどとして相手方あひてがたに嫌惡けんをの情じやうを起おこさしめたる

事なく、其説く所は何れも靈的神的にして、愛と信とに充されざるはなく、草野を風の行過ぎるが如く風靡し、歸順し、和合せしめねばおかなかつた。天稟の美貌と智慧證覺は何れも愛善の徳と眞善の光なる大神より來るが故に、姫が面前に來る者は、何れも歡喜悅服せざるはなかつたのである。且又理性的にしてものに偏せず、中庸、中和、大中などの眞理を超越してゐた。

抑も此理性は神愛と神眞の和合より來る所の圓滿なる情動によつて獲得し、此情動よりして眞理に透徹するものである。さて眞理には三つの階級がある。而して人間は此三階級の眞理にをらなければ、到底神人合一の境に入る事は不可能である。法律、政治の大本を過たず能く現界に處し、最善を盡し得るを稱して、低級の眞理に居るものと言ひ、又君臣夫婦父子兄弟朋友竝に社會に對し、五倫五常の完全なる實を擧げ得る時は、これを中程の眞理に居る者といふのである。併しながら如何に法律を解し政治を説き、或は五倫五常を詳細に説示し了得すると雖も、之を實踐躬行し得ざる者は所謂偽善者にして、無智の賤人にも劣るものと靈界に於て定めらるるのである。又愛の善と信の眞に居り、大神の直接内流を受け、

神と和合し、外的觀念を去り、萬事內的に住し得るものを稱して最高の眞理に居る者と云ふのである。故に現代に於て聖人君子と稱へられ或は智者識者と稱せられ、高位高官と崇めらるる人物と雖も、最高の眞理に居らざる者は、靈界に於ては實に賤しく醜く、且中有界又は地獄界に群居せざるを得ざる者である。靈界に行つて現界に時めく智者學者又は有力者といはるる者の精靈に出會し、其情況を見れば、何れも魯鈍癡呆の相を現はし、身體の動作全く不正にして四肢戦き慄ひ、少しの風にも吹き散りさうになつてゐるものである。是凡てが理性的ならざるが故である。現代の人間が理性的とか理智的とか、物知り顔に云つてゐる其言説や又は博士學士等の著書を見るも、一として理性的なるものはない。何れも自然界を基礎とせる不完全なる先賢先哲と言はれたる學者の所説や教義を基礎とし、古今東西の書籍をあさり、之を記憶に存し、其記憶を基として種々の自然的知識を發育せしめたるものである。故に只記憶のみにして、決して理性的知識ではない。現代の總ての學者は主神大神の直接又は間接の内流を受入るる事能はず、何れも地獄界より來る自愛及び世間愛に基く詐りの知識に依つて薰陶されたるものなれ

ば、彼等は靈體分離の關門を経て精靈界に至る時は、生前に於る虚偽的知識や學問の記憶は全部剥奪され、残るは只恐怖と悲哀と暗黒とのみである。凡て自愛より出づる學識智能は何れも暗黒面に向つてゐるが故に、神のまします天界の光明に日に夜に遠ざかりゐたれば、精靈界に入りし時は靈的及び神的生涯の準備一もなく、否却つて魯鈍無智の人間に劣ること數等である。魯鈍無智なる者は、常に臆氣ながらも靈界を信じ且つ恐るるが故に、驕慢の心なく、心中常に從順の徳に居りしが故に、靈界に入りし後は神の光明に浴し、神の愛を受くるものである。又現界に在りては、到底人間の其真相は分らないものである。されど幼稚姫の如く肉體其儘にて天人の列に加はりたる神人は、よく其人の面貌及び言語動作に一度觸るれば、其生涯を知り、其人格の如何をも洞破し得るのである。如何に現代人が法律をよく守り、或は大政治家と賞められ、智者仁者と云はるる事あるとも、肉體の表衣に包まれ居るを以て、暗冥なる人間はこれが真相を悟り得ることはない。肉體人は其交際に際し、心に思はざる所を言ふことあり、或は思はざる所、欲せざる所を爲さねばならぬことがある。怒るべき時に怒らず、或は少々

無理なことでも、何とかして表面を装ひ、世人をして却つて之を聖者仁者と思はしめてゐる事が多い。又肉體人は如何なる偽善者も虚飾も判別するの力なければ、賢者と看做し、聖人と看做して、大いに賞揚することは澤山な例がある。故に瑞の御靈の神諭にも……人の見て善となす所、必ずしも善ならず、人の見て悪となす所、必ずしも悪ならず、善人と云ひ悪人と云ふも、只頑迷無智なる盲目世間の目に映じたる幻像に外ならない……と示してあるのは此理由である。瑞月嘗つて高熊山に修業の折、神の許しを受けて靈界を見聞したる時、わが記憶に残れる古人又は現代に肉體を有せる英雄豪傑、智者賢者といはるる人々の精靈に會ひ、其状態を見聞して意外の感にうたれたことが屢々あつた。彼等の總ては自愛と世間愛に在る中惑溺し、自尊心強く且神の存在を認めざりし者のみなれば、靈界に在りては實に弱き者、貧しき者、賤しき者として遇せられつつあつたのである。之を思へば現代に於ける政治家又は智者學者などの身の上を思ふにつけ、實に憐愍の情に堪へない思ひがするのである。如何にもして大神の愛善の徳と信眞の光に、彼等迷へる憐れな地獄の住人を、せめて精靈界にまで救ひ上げ、無限の永苦を免

れしめむと焦慮すれども、彼等の靈性は其内分に於て神に向つて閉され、脚底の地獄に向つて開かれれば、之を光明に導くは容易の業でない。又如何なる神人の愛と智に充てる大聲叱呼の福音も、靈的盲目者、聾者となり果てたるを以て、如何なる雷鳴の轟きも警鐘亂打の響も、恬として鼓膜に感じないのである。吁憐れむべき哉、虚偽と罪惡に充てる地獄道の蒼生よ。ここに初稚姫の神靈は再び大神の意思を奉戴し、地上に降臨し、大豫言者となつて綾の聖地に現はれ、其純朴無垢なる記憶と想念を通じて、天來の福音を或は筆に或は口に傳達し、地上の地獄を化して五六七の天國に順化せしめむと計らせ給ふこと、殆ど三十年に及んだ。されど頑迷不靈の有苗的人間は之を恐れ忌むこと甚だしく、恰も仇敵の如くに嫉視し、憎惡するに至つたのである。ああ斯くも尊き大神の遣はし給ふ聖靈又は豫言者の言を無視し、輕侮し、益々虚偽罪惡を改めざるに於ては、百の天人は大神の命を奉じ、如何なる快擧に出で給ふやも計り難いのである。

次に高姫の靈界上の地位に就いて少しく述ぶる必要がある。宇宙には天界、精靈界、地獄界の三界あることは屢々述べた所である。而して精靈界は靈界現界の

又中間に介在せりと云つてもいい位なものである。故に精靈界には自然的即ち肉體的精靈なるものが團體を作つて、現界人を邪道に導かむとするものある事を知らねばならぬ。肉體的精靈とは、色々の種類あれども、其形は人間に似て人間にあらざるあり、或は天狗あり、狐狸あり、大蛇あり、一種の妖怪ありて、暗黒なる現界に跋扈跳梁しつゝあり。此等は地獄界にも非ず、一種の妖怪界又は兇黨界と稱し、人間に譬ふれば、所謂不浪の徒である。彼等は人間の山窩の群の如く、山の入口や川の堤や池の畔、墓場の附近等に群居し、暗冥にして頑固なる妄想家の虚を窺ひ、其人間が抱持せる欲望に附け入つて虚隙を索めて入り来るものである。此肉體的精靈も亦人間の想念と和合せずして其體中に侵入し來り、其諸感官を占有し、其口舌を用ひて語り、其手足を以て動作するものである。而して此等の精靈は其憑依せる人間の物を以てすべて吾物とのみ思ふてゐる。或時は人間の記憶と想念に入つて大神と自稱し、或は豫言者をまね、遂に自ら眞の豫言者と信ずるに至るものである。されど此等の精靈は少しも先見の明なく、一息先の事は探知し得ないものである。何故なれば其心性は無明暗黒の境域に居るが故である。



憑依された人間が、例へば開祖の神諭を読み耽り、之を記憶に止め想念中に蓄へおく時は、侵入し來りし惡靈即ち妖魅は、之を基礎として種々の豫言的言辭を弄し、且又筆先などと稱して、似たり八合なことを書き示し、頑迷無智なる世人を籠絡し、遂に邪道に引き入れむとするものである。開祖の神諭に……先の見えぬ神は誠の神でないぞよ……と示されたるは此間の消息を洩らされたものである。又熱狂なる人間は吾記憶を基礎として、其想念を働かせて入り來りし精靈の吾記憶に反けることを口走り、或は書き示す時は、忽ち審神的態度となり……汝は大神の眞似を致す邪神にはあらざるか、サ早く吾肉體を去れ……などと反抗的態度に出づるものもある。併し乍ら遂には其惡靈の爲に説伏せられ、或はいろいろの肉體上に苦痛を與へられ、遂にその妖魅の言に感服するに至るものである。サア斯うなつた時は、最早上げも下しも出來なくなつて、如何なる神の光明も説示も承認するの力なく、只單に……われは天下唯一の豫言者なり、無上の神人なり、吾なくば此蒼生は如何せむ……と狂的態度に出づるものである。此物語の主人公たる高姫は即ち此好適例である。故に彼れ高姫は自己の記憶と想念と、憑靈の言

葉の外には一切を否定し、且熱狂的に數多の人間を吾説に悦服せしめむと焦慮するのである。其熱誠は火の如く暴風の如く又洪水の如し。如何なる神人も有徳者も之を説得し歸順せしめ、善靈に歸正せしむることは天下の難事である。故に高姫は一旦改心の境に入りし如く見えただれども、再びつきまとへる兇靈は彼が肉體の虚隙を見すまし、又もや潮の如く體内に侵入し來り、大狂態を演ずるに至つたのである。

斯かる狂的憑靈者の辨舌と行爲は最も執拗にして、晝夜間斷なくつき纏ひ、吾所説に歸服せしめねば止まない底の勇猛心を抱持してゐる。斯かる兇靈の憑依せる僞豫言者に魅入られたる人間は、如何なる善人と雖も、稍常識ありと稱へられてゐる紳士でも、又奸智に長けたる人間でも、思索力を相當に有する人物でも、遂には其術中に巻込まれて了ふものである。かかる例は三十五萬年前の神代のみではない、現に大本の中に於ても斯かる標本が示されてある。これも大本の神示に依れば、神の御心にして、善と惡との立別けを示し、信仰の試金石と現はし給ふものたることを感謝せなくてはならぬ。一旦迷はされたる精靈や人間は、容易

に目の醒めるものでない。併しながら斯の如き渦中に陥る人間は、靈相應の理によつて、已むを得ずここに没入するのである。されど神は飽くまでも至仁至愛にましますが故に、彌勒胎藏の神鍵を以て寶庫を開き、天國の光明なる智慧證覺を授け、愛善の徳に包んで、之をせめて中有界までなりと救ひ上げ、ここに靈的教育を施し、一人にても多く天國の生涯を送らしめむとなし給ひ、仁愛に富める聖靈を充して、豫言者に來り、口舌を以て天國の福音を宣り傳へ給ふこととなつたのである。吁されど頑迷不靈の妖怪、人獸合一の境域に墜落せる精靈及び人間は、天國に救ふこと恰も針の穴へ駱駝を通すよりも難きを熟々感ずる次第である。大本の神諭にも……神と人民とに氣をつけるぞよ……とあるは即ち精靈と肉體人とに對しての御言葉である。吁如何にせむ、迷へる精靈よ、人間よ、殊に肉體的兇靈に其身魂を占領されたる妖怪的偽豫言者の身魂をや。

序に祠の森に於て空助と現はれたる妖怪は、兇惡なる自然的精靈即ち形體的兇靈にして高姫の心性に相似し、接近しやすき便宜ありしを以て、互に相慕ひ相求め、風車の如く、廻り燈籠の如く、終生逐ひまはりなどして狂態を演出し、現界

は云ふに及ばず靈界の惡魔となりて神業の妨害をなし、遂には神律に照され、神怒に觸れ、根底の國の最底に投下さるるまで其狂的暴動を止めないものである。吁憐れむべきかな、肉體的兇靈よ、其機關となりし人間の肉體よ、精靈よ。思つても肌に乗を生ずるやうである。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 松村眞澄録)

## 第二章 照魔燈(一一二九六)

高天原の最奥に於ける靈國及び天國の天人は、すべて愛の善徳を完備し、信の眞善を成就し、智慧證覺に充ち居るを以て、中間天國以下の天人の如く、決して信を説かず、又信の何たるかも知らないのである。又神の眞に就いて論究せないのである。何故ならば、斯かる靈的及び天的最高天人は、大神の神格に充たされ、愛善信眞これ天人の本體なるが故である。故に他界の天人の如く、これは果して

善なりや、悪なりや、などと言つて眞理を争はない。只争ふものは中間及び下層  
天界の天人の内分の度の低いものの所爲である。又最奥の天人は視覺によらず、  
必ず其聽覺によつて、即ち宇宙に瀰漫せるアオウエイの五大父音の音響如何によ  
つて、其證覺をして益々圓滿ならしむるものである。大本神諭に「生れ赤子の心  
にならねば、神の眞は分りは致さぬぞよ……」とお示しになつてゐるが、すべて  
赤子の心は清淨無垢にして水晶の如きものであるから、假令智慧證覺は劣ると雖  
も、直ちに其清淨と無垢とは、最奥天界に和合し得るからである。又社會的羈絆  
を脱し、すべての物欲を棄て、悠悠として老後を楽しみ、罪惡に遠ざかり、天命  
を楽しむ所の老人を以て、證覺ありて無垢なる者たることを現はし給ふのである。  
大本開祖が世間的生涯を終り、夫を見送り、無垢の生涯に入り給うた時、始めて  
神は豫言者として、これに神格の充されたる精靈を降し給ひ、天國の福音を普く  
地上に宣傳し給うたのは、實に清淨無垢の身魂に復活し、精靈をして天國の籍に  
おかせ給うたからである。故に開祖の如きは、生前に於て已に靈的復活をせられ  
たのである。此復活を稱して靈的人格の再生といふのである。大神は人間をして

其齡進むに従ひ、之に對して善と眞とを流入し給ふものである。先づ人間を導いて善と眞との知識に入らしめ、これより進んで不動不滅の智慧に入り、最後に其智慧より佛者の所謂阿羅耶識（八識）即ち證覺に進ませ給ふものである。之を佛教にては、阿耨多羅、三藐三菩提心（無上證覺）といふのである。併しながら現代の人間は、其齡進むに従つて、益々奸智に長け、表面は樂隱居の如く世捨人の如く、或は聖人君子の如く装ふと雖も、その實益々不良老年の域に進むものが大多數である。優勝劣敗、弱肉強食を以て社會の眞理と看做してゐる現代に立ち、多數の黨與を率ゐて政治界又は實業界に跋扈跳梁し、益々權謀術數を逞しうし、僅に其地位を保ち、世間的權勢を掌握して無上の功名と看做してゐる人物の如きは、實に靈界より之を見る時は憐れむべき盲者である。斯の如き現界に於ける權力者よりも、無智にして其日の勞働に勤しみ、現代人の無道の權力に壓倒され、孜孜として之に盲従し、不遇の生活を生涯送りし人間が、靈界に至つて神の恩寵に浴し、其靈魂は智慧相應の光を放ち、善と眞との徳に包まれて、生前の位地を轉倒してゐる者が澤山にあるのである。故に靈的觀察よりすれば、權勢ある者、

富める者、智者學者といはるる者よりも、貧しき者、卑しき者、力弱き者、現界に於ていと小さき者として、世人の脚下に踏み躪られたる人間が、却つて愛善の徳に住し、信眞の光に輝いて、天國の團體に圓滿なる生涯を送るものである。故に神には一片の依怙もなく偏頗もない事を信じ、只管神を愛し神に従ひ、正しき豫言者の教に信從せば、生前に於ても、假令物質上の満足は得られずとも、其内分に受くる歡喜と悅樂とは、到底現界の富者や權力者や智者學者の窺知し得る所ではないのである。此物語の主人公たる初稚姫は再び天の命を受け、地上に降誕して大本開祖となり、世間的務めを完成し、八人の子女を生み夫々神界の内の事業に奉仕せしむべく、知らず知らずの間に其任を果し、微賤に下りて、溢るる許りの仁愛と透徹したる信の智を發揮して、暗黒無道の地獄界を照破する神業に奉仕し、其任務を了へて、後事を瑞靈に充されたる豫言者に托し、茲に目出度く昇天復活されたのである。故に開祖は生前より其容貌恰も少女の如く、其聲音は優雅美妙にして、又少女の如く、玲瓏玉の如き顔を抱持し給ひ、開祖に接近する者は、何時とはなしに其圓滿なる靈容に感化され、靈光に照され、善人は之を信

從し尊敬し、惡人は之を嫌忌し恐怖したのである。開祖の前身たる初稚姫も亦神代に於ける神格者にして、大豫言者であつた。その容貌及び全身より金色の光明を放射し、惡魔をして容易に近づき得ざらしめたのである。されど初稚姫は、其靈徳と靈光を深く秘し給ひ、和光同塵の態度を以て普く萬民を教化し天國に救はむため、ワザと其神相を隠し給ひて、靈的及び自然的活動を續け給うたのである。開祖は常に云はれた：：：出口直が正體を現はしたなれば、人民は眼くらみ、到底側へは寄りつくことは出来ない、故にワザとに世におちぶらし、今まで衆生濟度の爲に化してあつたのだ：：：と物語られた事は屢々である。此時側に親しく侍してゐた役員共は、開祖の平素の人格には敬服してゐたが、併し其お言葉の餘りに高調的なるに對し、開祖が慢心をされたものとのみ思つてゐた者も澤山にあつたのである。神は必ず順序を守らせ給ひ、相應の理に依りて和合の徳を表はし給ふが故に、其對者に向つて餘り懸隔なき様に現はれ給ふのである。故に對者の徳と智慧の如何によつて、神又は開祖を見る所の目に非常の差等があるのは、已むを得ないのである。神は瑞月を呼んで大化物と豫言者を通じて宣らせ給うた。現代



人は大化物の名を聞いて、大悪人の代名詞の如く或は權謀術數家の別稱の如く、又巧言令色、表に善を飾り虚偽を行ひ、世人を誑惑する悪人と認むる者も少くないのである。併し神格に充されたる者を、頑迷不靈の地獄界に籍を於ける人間の目より見るときは、忽ち眼眩み頭痛み、息苦しくなり、癡狂癡呆と忽ち變じて、恐怖心に驅られ、その真相を看取することは出来ないものである。故にかかる人間の地位に立ちて豫言者を仰ぎ見る時は、大怪物とより見ることが出来ないのである。吁斯の如き頑迷の徒をして、神の光明に浴せしめ、愛善の徳に任せしめて、永遠無窮の天國の生涯を生きながらに送らしめむとするは、實に最大難事である。大正五年の事であつた。口述者は役員室に在つて神諭を繙く折しも、慌しく入り來りしは開祖の娘なる高島久子であつた。彼は前節に述べたる如き肉體的兇靈に心身を占領されて、吾居間に走り入りて、恭敬禮拜し言ふ。『瑞の御靈様、一大事が突發致しました。一厘の祕密をお知らせ申します』と言ふより早く、吾耳の側に口をよせ、齒のぬけた口から、臭い息と唾を、吾顔面にふきかけながら、下らぬ不合理に充ちたことを喋々と辨じ立てた。そこで瑞月は儼然として、『誠の

道に秘密のあるべき道理なし、秘密の秘は必ず示すといふことである。決して隠蔽すべきものでない。耳もとに囁く如きは神人のなすべき所でない。これは體主靈從的人獸の敢へてする行爲である」と云ふや否や、高島久子の精靈は大いに怒つて、わが耳たぶを左の手にて引張り、右の手を以てわが頬をピシヤピシヤと叩きつけ、「義理天上日出神の秘密の忠告を聞かねば、地の高天原は大騒動が起りま

すぞ。何うなつても日出神は知らぬぞよ」とわめき立て、狂ひまはつた。そこで瑞月は兇靈の憑依せるものなることを本人に懇々と諭してみたが、もはや兇靈に靈肉全く占領された彼女には何の效能もなかつた、のみならず大いに怒つて、吾喉元に飛びかかり、咬みつかむとした。そこで瑞月は已むを得ず、右の人指を前に向けて「ウン」と一聲、神に祈つて、其面體を靈光に照すや否や、忽ちパタリと倒れて了つた。そこで瑞月は直に神に彼が爲に謝罪をなし、お許しを請うた。

彼女はムクムクと立上り、口を極めて「變性女子の糞奴、糞先生の奴先生、小松林の惡魔奴」と喚き立てながら、長い廊下を韋駄天走りに開祖の居間に侵入した。忽ち久子に憑依せる兇靈は、開祖の容貌を拜するや、アツと仰向けに倒れ、キヤ

アキヤアと喚きながら、長廊下を毬の如くころげて、再びわが居間に逃げ歸り來り、奴開祖の糞開祖奴、これから俺が誠の良の金神ぢや、變性男子も女子も此處を出て行け、これから地の高天原は、高島久子が良の金神變性男子と現はれて、日出神を地に致し、大廣木正宗殿の靈を御用に使うて、神政成就の神業に奉仕するから、此方の申す事が耳に入らぬ奴は、一人も残らず出てゆけ。金勝要神の身體は我が強いぞよ。木花咲耶姫の生宮も譯が分らぬぞよ。これから此高島久子の體を借つて、誠の事を知らすぞよ、などと狂態を演じ、身體を頻りに震動させて、猛惡の相を現はし、座敷の中央に仁王立ちとなつて睨めつけてゐた。そこへ開祖は梅の杖をつきながら、障子をあけて一寸覗かれると、又もやキヤツと叫んで其場に顛倒し、毬のやうになつて表へ驅け出して了つた。後に至つて高島久子に聞けば、彼は云ふ……開祖の居間の障子を開くや否や、開祖の全肉體は金色燦爛たる光明にみち、そのお姿を熟視する能はず、忽ち恐ろしくなつて、妾の守護神が一生懸命に驅け出しました……と答へたのである。又彼女が自筆の筆先にも此事を明記してゐる。それから久子は表へまはり、金龍殿に侵入した。そこには數多

の役員や修業者が幽齋の最中であつた。久子は矢庭に暴れ出していふ……汝等盲  
役員、幽齋の修業などは以ての外だ、この生宮の申す事を聞け……と呶鳴りな  
がら、修業に来てゐた河井芳男といふ青年を引捉へ、殿中に於て馬乗となり、其  
青年の首にジャウ ジャウ ジャウとぬくい小便をたれかけ……汝の如き者は之  
にて結構だ……と喚き立て、狂態を演じてゐた。この事も高島久子の精霊が書い  
た筆先に自慢さうに記してある。すべて兇黨界の悪霊は順序を辨へず又善悪美醜  
の區別がつかないから、神聖なる金龍殿内に於て、人の首に小便をかけ、得意と  
なつてゐるのである。而して彼女はいふ……わが守護神は實に偉大なものだ、あ  
の様な聖き御殿に於て、外の者が小便を【こかう】ものなら、忽ち守護神も肉體  
も神罰が當るのであるが、何をいつても神格が高いから、あの通りチツとも罰が  
當らなかつたのだ……と誇つてゐるのは實に濟度し難き難物である。丁度猫や鼠  
が大神の鎮座まします神聖なる扉の中に巢をくみ、或は糞尿をたれても、神は畜  
生として看過し給ひ、之を懲め給はざると同様の理である事を知らない癡狂癡呆  
者である。自愛心強く世間愛のみを以て唯一の善事と思惟しゐたる人間は、却つ

て斯かる奇矯なる行爲を以て、神祕の行爲となし、之を隨喜渴仰していふ……全  
くあの行ひは人間ではない、人間心で、何うして殿内に於て、而も人間の首に跨  
がり、小便がかけられようか、全く神様の證據である……と、斯う云つて感心す  
るのである。彼等の云ふ如く決して人間ではない。併しながら神だと思つたら大  
變な間違である。スツカリ肉體的兇靈、惡魔が彼女の全身を支配して行つた所の  
狂態であるのである。

其後かれ惡靈は久子の肉體に對し、いろいろと幻覺を示し、益々誑惑の淵に陥  
れ、或は一ヶ月間の斷食を與へ、地獄の有様を眼前に髣髴せしめ……汝わが言を  
用ゐざる時は、斯の如き無間地獄に陥落すべし。又わが言を信從し、わが頤使に  
從つて活動する時は、汝をして將來斯の如き結構なる位地につかしむべし……と、  
或はたらし或は威し、漸くにして開祖の身内たる肉體を、わが自由に驅使する事  
を得たのである。彼等が惡業を遂行せむとすれば、現界人の淺薄なる識見より見  
て、開祖の血統と生れし人間なれば、大丈夫、決して惡神の憑依すべきものでな  
いと信用させ得るの便宜があるからである。かれ兇靈は無智なる久子の靈肉を完

全に占領した上、地の高天原の靈光にみたたまらず、二三の迷へる信者を引連れ、  
一目散に八木へさして逃げ歸り、ここに久子の記憶と信仰を基礎として、其想念  
中に深く入り込み、兇黨界の團體をして益々大ならしめ、大神の神業を極力妨害  
せむと企みつつあるのである。さりながら久子其人は元來開祖を思ふ事最も深く  
且無智にして比較的其心も清ければ、遠の兇靈も開祖の神諭を非難することを得  
ず、且又嚴の御靈、瑞の御靈を極力排斥し、誹謗しては其目的を完成し得ざるを  
知るが故に、表面に嚴瑞二靈を尊敬し信従する如く装ひ、先づ久子を誑惑し其口  
と手を以て世人を魔道に引入れむと企みつつあるのである。之は決して瑞月が卑  
しき心より述べるのではない。大神の御子たる可憐なる精靈や人間をして、一人  
なりとも邪道に陥らざらしめむが爲の慈愛心に外ならぬのである。かれ精靈は久  
子の肉體を綾部の停車場に仰向けに倒し、陰部を曝して大呼して云ふ……われは  
地の高天原の變性男子出口直の肉體をかりて生れた日出神の生宮であるぞよ。皆  
の者、これを見て、大本の教を悟れよ……と呶鳴り立てた。精靈が久子に斯かる  
衆人環視の前にて狂態を演ぜしめた其底意は、要するに神の名を冒瀆し、世人を

して大本を信用せしめざらむが爲の悪計であつた。されど暗愚なる信者は、そんな所に少しも注意せずしていふ……ああ吾々が改心が足らぬ故に神様が變性男子の系統の肉宮をかつて、お戒め下さつたのであらう、お前達の心は此通り醜いのだ、お前達が神界より罰せられ、地獄の釜のドン底へ落されるのだが、高島久子に千座の置戸を負はして助けてやつて居るぞよ、との深き思召であらう……などと妙な所へ曲解して益々随喜渴仰し、精靈の誑惑に乗せられて、遠近の神社を調査するといつて、或は其費用を獻じ、或は随伴してゐる者も澤山現はれて來たのは、實に神界の爲悲しむべきことである。されど神は決して斯の如き兇靈に汚され給ふものでもなく、又如何に妨害せむとするも聊かの痛痒も感じ給はないのである。只々可憐なる神の御子が彼等兇靈に心身を誑惑され邪神界に引入られ、無間地獄に陥落しゆくを悲しみ給ふのみである。かかる仁慈無限の大神の御心も知らず、男子が何うだとか、女子の言行がなんだとか云つて、その光明に反き、醜穢極まる地獄に轉移するは、實に仁慈の目より見て忍び難き所である。かれ精靈は久子を又もや八木の停車場に連れ行き、大聲叱呼して云ふ……此女は元を糺

せば、丹波國何鹿の郡綾部町、本宮新宮坪の内、變性男子の身魂出口直の體をか  
り、出口政五郎といふ父を持ち、若い時から男女と呼ばれたる、ヤンチヤ娘の出  
口久子、今は神の因縁に依つて、八木の高島寅之助が妻となり、あの山の、山の  
ほでらのあばらや住居、今はおちぶれて居れども、結構な身魂が世におとしてあ  
るぞよ。侮りて居りたものは、アフンと致してあいた口がすばまらぬぞよ。今に  
天地がかへるぞよ。欲を致して澤山の金をためて居りても、其寶は持切には出來  
ぬ寶であるぞよ。此神の申した事には一分一厘間違ひはないぞよ。先をみてゐて  
下されよ、と前をまくつて大音聲……と自ら呼ばはり、停車場に集まる人々を驚  
かせ、之を鎮定せむと入り來りし長左といふ男の腕にかぶりつき、狂態を演じ、  
大本の教を破壊せむと企んだ事もあつたのである。兇靈は此筆法を以て、或時は  
變性男子を極力賞讚し、また對者の心の中に男子女子を否むと認むる時は、聲を  
秘そめて切りに誹謗し、吾藥籠中のものとなさむと企むものである。  
さて、初稚姫と高姫との今後の活動は之に類するもの多ければ、卷頭に引證す  
ることとしたのである。



追伸靈界物語の讀者の中には凡て、斯様であります……とか、斯う考へます……  
とかいふ謙讓の言葉がなく、かうである……どうである……などと斷定的に、且  
高壓的に口述してあるのは、所謂口述者が慢心した結果、かかる不遜の言辭を弄  
するのだと非難する人が間々あるさうです。併しながら「あります」と云へば活  
字を四字用ひなくてはなりません。『ある』といへば二字で事がすみます。それ  
故にかかる洪瀚な物語には一字なりとも冗言を省き、可成數多の意味を讀者に知  
らさむが爲の忠實なる意思より出でたのであります。而して口述者自身は只神格  
にみたされたる聖靈に靈と體を任せきつてあるのでありますから、口述者が之を  
改めようと致しましても、肝腎の局に當る聖靈が聞かなければ是非ない事であり  
ます。一寸茲に一言斷つておく次第であります。

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 松村眞澄録)

初稚姫は祠の森の神殿に参拜し、長途の遠征を守らせ給へと祈願をこらし、再び高姫の居間へ引返した。高姫は遠く従うて神殿近く進み、初稚姫の後姿を打眺め、何處ともなしに其神格の完備せるに打驚き舌をまいた。そして高姫は其神格に感じ、心の底より初稚姫を神の如く尊敬した。併し乍ら何處ともなく恐怖心に驅られ、且其神格の偉大なるに稍嫉妬の念を兆したのである。今まで初稚姫の大神格に壓倒され、暫し高姫の身體内に潛みて沈黙を守つて居た金毛九尾の悪狐は、高姫が少しく嫉妬心の兆したのを幸ひ、其虚に入り忽ち囁いて云ふ。

「吾は汝の略知る如く、神代に於て常世姫命に憑依し罪惡の限りを盡した金毛九尾白面の悪狐である。併しながら時節來りてミロクの大神、地上に降臨し給ひし上は、吾等は何時迄も惡を續ける譯には行かぬ。吾は惡の張本人なれば世の一切の惡神の企みは皆知つてゐる。惡に強ければ善にも強い。吾は金毛九尾白面の悪狐だ。そして汝は常世姫命の身魂の再來だ。もう斯うなる上は一切萬事を打ち明けて、惡の企みを瑞の御靈の大神にお知らせ申さねばならぬ。就いてはあの初稚姫は稚櫻姫命の再來なれば、到底汝等の匹敵すべき神人ではない。寧ろ吾より

トコトン改心を致すべければ、汝も彼の初稚姫を師と仰ぎ、共に神業に参加すべし。

と甘く高姫を誑惑してしまつた。高姫は兇靈の言を深く信じて初稚姫に對する態度を一變した。初稚姫は神殿の拜禮を終り、階段を下りながら心私かに思ふやう、  
「彼高姫には金毛九尾の惡狐の靈憑依せり。而して彼惡靈は形體を有するものなれば、吾眞相を現はさば忽ち彼が肉體を亡ぼすか、但は遁走して又もや相應の肉體に住居を構へ世を惑亂するに至らむ。如かず吾は和光同塵の態度を極力維持し、彼の惡靈を高姫の肉體に長く殘留せしめ、彼が根本より改心すれば重疊なれども、萬一改心せずとも高姫の肉體中に秘め置かば、彼精靈は外に出づる虞なし。要するに高姫の肉體は天下を亂す惡靈をつなぐ處の牢獄と見ればいい。もとより徹底的兇靈なれば、神の光明に照されなば、兇靈は忽ち自暴自棄となり、益々神業の妨害をなすべし。如かず、神慮に背くかは知らざれども、暫く吾は猫を被つて彼と交際し、何時とはなしに高姫と精靈とを天國に救ひやらむ。」  
と決心し、大神に念じながら素知らぬ顔にて高姫の居間に歸つて來た。精靈は高

姫の口舌を使用して、いとやさしげに言葉を飾つて云ふやう、  
「變性男子の御身魂初稚姫様、よくも御降臨下さいました。私は三五教の宣傳使、御存じの高姫でムります。大神様の御都合により悪神の張本金毛九尾の悪狐が私の肉體に潛み入り、私の眞心に感化されて漸く改心を致しまして、今迄の悪をスツクリ白状致しました。就いては凡ての悪神の企みは何も彼も存じて居ると申して居りますから、私が守護神と共に此祠の森に大門を造り、凡ての人民の因縁をよく調べ改心をさせた上、齋苑の館へ送る考へでムります。何卒此事をお許し下さいます様に、變性男子の御靈様、お願い申します。そして一方には變性男子の系統なる義理天上日出神が、嚴の御靈の御命令によりまして世界中を調べに歩き、世の初まりの根本の成り立ちから、人民の大先祖の因縁、大黒主の身魂は如何なる因縁があるか、龍宮の乙姫のお働きは如何なるものかと云ふ事を知らしみたいのでムります。今の三五教には宣傳使は澤山ムりますが、皆智慧、學で神界の事を考へようと致すのでムりますから何も分りませぬ。貴女は變性男子の生粹の大和魂の善の神様でムりますから、何も彼も三千世界の事は御存じでムります

が、外の守護神や宣傳使や信者はサツパリ駄目でムります。それ故此處に大門を拵へ、私が一々因縁をあらため、齋苑の館へ參拜さす御役にして下さいませぬかと兇靈はうまく高姫に化けて蟲のよい事を頼みかけた。初稚姫は彼が奸計を殘らず看破した。されど前述の如く初稚姫は此惡靈を審判する事を避けられたのである。

「貴女は信心堅固にして靈界によくお通じ遊ばした方と見えますな。妾は賤しき空助の娘と生れ、まだ年も若く、社會的の經驗さへも積んでゐない愚者でムりますから、到底靈界の消息等は分りませぬ。就いては貴女に對し左様の事をお許し申すなどとは以ての外の事でムります。何れ神様が貴女の御神力をお認め遊ばしたならば、屹度瑞の御靈の大神様からお許しがムりませう。妾には左様な權限は少しもムりませぬから、左様な事を仰有らない様にお願ひ致します。何卒至らぬ妾、神徳高き貴女様より御教授を御願ひ致したいものでムります」

と一切の光明を包み、普通人の如くなつて了つた。高姫は二タリと打笑ひ、

「アー、さうだらうさうだらう、それが正直の處だ。まだ年も若い癖に宣傳使に

歩かすとは、瑞の御靈様も餘程物好きな珍らし物喰ひだな。どれどれ此高姫がここで根本の根本の因縁を説いて聞かしますから十分修行をなさいませ。それでなければ、譯も分らずに宣傳に歩いたり、大黒主を言向和すなどは、以ての外は無謀のやり方でムりますからな」

「何分、至らぬ妾、老練な貴女様の御薫陶をお願ひしたいものでムります」

「ハイ、よしよし、お前は水晶魂だ。本當に素直な可愛い娘だな。これから此小母さまの云ふ事を聞くのだよ。否小母さまではない、絶つてもきれぬ母子だから、そのつもりでつき合つて下さいねー」

初稚姫は心に打笑ひながら故意と空惚けて、

「小母様、今貴女は妾ときつてもきれぬ母子だと仰有いましたが、それは身魂の母子でムりますか。チツとも愚鈍の妾には合點が参りませぬワ」

「身魂の母子は申すに及ばぬ、お前さまは空助さまの大切の娘だらう。其空助さまは此度神様の因縁によつて常世姫命の改心した善の折の生粹の肉宮の此高姫の夫とおなり遊ばしたのだよ。空助様だつて、此高姫だつて、よい年をしてから若

いものか何ぞの様に夫婦になつたり、そんな見つともない事はしたくはない。胸  
に焼鐵をあてる様に思つてゐるのだが、これも神様のため、萬民を救ふため、千  
座の置戸を負うて御神業に参加してゐるのだよ。譯の分らぬ人民がいると申す  
であらうなれど、人民の申す事に心を悩まして居りたらミロク神政の御用が勤ま  
りませぬ。譯知らぬ人民は、空助、高姫の結婚を何となつと申して笑へば笑へ、  
誹らば誹れ、神のお仕組一厘の祕密が如何して一寸先も見えない人民に分るもの  
か、と云ふ磐石の如き決心を以てここに夫婦の約束を結んだのだから、初稚さま、  
貴女もそのお積りで、私を母と思つて下さいや。私も貴女を大切の大切の御子と  
致して敬ひますから、母となり子となるのも昔の昔のさる昔、も一つ昔のまだ昔  
の天地開闢の初めから大神様より定められた因縁ぢやによつて、何卒その覺悟で  
ゐて下され。何事にも素直なお賢いお前さまだから、此高姫の生宮の申す事、よ  
く呑込めたでせうなア」  
初稚姫は空助の本物でなく、獅子と虎との中間動物なる兇靈に騙されてゐる事  
はよく看破して居た。されど故意と空惚けて、

「高姫さま、私の父が何時そんな事を貴女と約束致しましたのですか、私今が初耳ですわ。まアまア不思議な御縁でムりますこと。さうしてお父さまは何處へ行かれましたの」

「一寸此森の中へ散歩にお出でになつたと見えます。空助様は森の散歩が大變にお好きだと見えましてね。お前さまが此處へ訪ねて來られた事をお聞きになつたら、嘸喜ばれるでせう」

「はて、妙な事だわ。妾のお父さまは齋苑の館の總務を勤めて居らつしやるのだから、ここへお越し遊ばす道理はありませんがな」

「これ初ちやま、お前の、さう疑ふのも尤もだ。實の處は空助さまは、あの我が強い東野別の東助さまと云ふ副教主との間に事務上の衝突が起り、それがために齋苑の館を追ひ出されなされたのですよ。東助の野郎、正直一途の英雄豪傑、三羽鳥の御一人なる空助さまを追ひ出すとは以ての外悪人ぢやありませんか。あの東助はやがて今迄目の上の瘤の様に困つてみた空助さまを首尾よく追ひ出し、齋苑の館の全權を掌握し、終には八島主の教主さまをおつ放り出し、自分が其後



釜がまにすわると云いふ野心やしんを抱いだいてをるのですよ。それでお前まへと私わしが此處ここで一肌脱ひとだぬいで、齋苑いその館やかたへ参まゐる信者しんじやを小口こぐちから蝨殺しらみころしに調しらべ、齋苑いその館やかたへやらぬ様やうにせねばなりません。私わしがここで空助もくすけさまと大門開おほもんびらきをしたのは、空助もくすけさまや八島主やしまぬしの教けう主しゆがお困こまりになつた時とき、お助け申たますやうにチヤンと仕組しくみをしてゐるのだから、お前まへさまも何處どこへも行ゆかず、此處ここに居をつて親子三人御用おやこさんごようを致いたさうぢやありませんか。それは又また不思議しぎな事ことを承うけたまはります。東助とうすけ様はそんなお方かたぢやない様やうに思おもひます  
がな」

「それが善ぜんの假面かめんを被かぶつてゐる惡魔あくまですよ。屹度きつと惡人あくにんは惡相あくさうを以もつて現あらはれるものぢやありません。所在あらゆる虚偽きよぎと偽善ぎぜんを以もつて人民じんみんを詐いつはり、虚榮きよえい的てき權威けんゐに甘あまんじてゐるものですよ。これ初稚はつわかさま、油斷ゆだんしてはなりません。此高このたか姫ひめは海千川うみせん千山かみせん千せんの修業しゆげふをした善ぜんにも強つよい、惡あくにも強つよい、そして惡あくの企たくみは何なにも彼かも看破かんぱしてゐるのだから、一分一厘いちぶいちりん間違まちがひはありませんよ」

「あの東助とうすけさまは小母をばさまの若わかい時ときのお馴染なじみだつたさうですな。そんなに惡口わるくちを云いふものぢやありませんよ。父ちちの空助もくすけに比くらべれば、幾層いくそう倍ばい人格じんかくが上うへだか知しれぬぢ

やありませぬか」

「ヤツパリ子供だな。然し子供は正直ぢや。何と云つても水晶魂だから心に罪がないので、表面から良く見える人を信用なさるのだ。そこが本當に尊い處だよ。

然し高姫の云ふ事はチツとも違ひませぬぞや」

「さうでムりますかな。一遍父に會つてみたいものです。もし小母さま、長上をお使ひ申して眞に濟みませぬが、一度お父さまに會ひたうムりますから、探して來て下さいませ」

「アアさうだろさうだろ、無理もない。親子の情と云ふものは本當に尊いものだ。吾身を捨てる藪はあつても吾子を捨てる藪はないと云ふ事だが、空助さまも何も彼も天眼通で知つて居りながら、こんな可愛い娘が來て居るのに、そしらぬ顔して森に散歩してゐなされるとは本當に水臭い方だな。子の心、親知らずだ。然し初稚さま、此高姫は斯う見えても本當にやさしいものですよ。空助さまに比べて幾百倍も可愛がつてやりますから、何卒私を本當の母だと思つて下さいや」

「ハイ、御親切有難うムります」

と俯向うつむいて見みせた。

「これ初はつ稚わかさま、一寸待まちつてゐて下ください。お父とうさまのあとを探さがして今直いますぐに屹度連きつとつれて参まゐりますから」

と云いひながら羽はばたきしつ々いそいそとして森林しんりんの方ほうに行く。高姫たかひめは森もりの茂しげみに隠かくれて後あとふり返り舌かへをニユツと出だし、いやらしい笑えみを漏もらしながら獨言ひとりごと、

「何なんと云いつてもヤツパリ子供こどもだな。然しかしながらあの娘こは何處どこともなしに氣高けだかい處ところもあり、中々なかなかシヤンとした事ことを云いふ。あれをうまくチヨロまかし自分じぶんの子ことして

置おけば、三五教あななひけつは吾手わがてに握にぎつた様やうなものだ。何なんと都合つがふのいい事ことになつたものだな。これから一ひとつでも、うまい物ものがあつたら、あの娘こに呉くれてやり、そして十分じふぶん懐なつか

して置おかねばならぬ。然しかし都合つがふのいい事ことには空助もくすけさまが私わたしの夫をとこだから、切きつても切きれぬ仲なかだ。ああ有難ありがたうムります、八岐やまたの大蛇をろちさま様、金毛九尾きんまうきうびの大蛇おほかみさま様」

と口くちの中なかから囁ささやいた。高姫たかひめは此聲このこゑに驚おどろいて目めを怒いからし、臍へその邊あたりを握にぎり拳こぶしでトントと打うちながら、

「こりや、金毛九尾きんまうきうびの惡狐奴あくこめ、何なんと云いふ事ことを申まをすのだ。左様さやうな事ことを申まをすと、もう

此高姫は肉體を借さぬぞや。空助さまや初稚姫の傍で、そんな事でも云うて見よれ。此高姫は立場がないぢやないか。改心致したと云うたぢやないか

腹の中から、

「ここは誰も居ないから一寸云つて見たのだから、さう怒るものぢやない。メツ夕に人の居る處で正體は現はさぬから安心しておくれ」

「よし、屹度守るか、うつかりした事を申すと常世姫の生宮が承知しませぬぞや。これから八岐大蛇や金毛九尾はスツカリ改心致して、あとへ日出神の義理天上が這入つてゐると何處までも主張するのだよ。よいか、分つたか。馬鹿な守護神だな」

腹の中から、

「何とまア、私の強い、向ふ息のきつい肉體だな、アハハハハ」

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 北村隆光録)

## 第四章 御意犬（一二九八）

初稚姫は高姫の往つた後で、小さい聲で、ホホホホと吹き出さずには居られなかつた。さうして自分の笑ひ聲に驚いて小聲で獨言、

「高姫さまも氣の毒なものだなア。さうして金毛九尾の惡狐奴、又もや祠の森に頑張り、齋苑の館の御神業を妨害し、數多の精靈や人民を迷はさうと思つてゐる。其遣方の奸黠さ、憎らしさよ。高姫さまは熱心な人だけれど、常識が足りないから、いつも狂妄に陥り易く、あの通り惡魔の擒となつて了つたのだなア、どうぞして助けて上げたいけれど、一つ目を醒まさなければ、到底復活の見込はない。肉體をもつて居る獅子、虎兩性の妖魅に誑惑され、父の空助と思つて居るのはほんに氣の毒なものだ。高姫さまに憑依して居る金毛九尾の惡狐は、高姫の肉體を通してでなければ現界を見る事が出来ないのだから、あのやうな怪物にだまされて居るのだ。憑靈自身も高姫も、其怪物たる事を知らない。高姫自身は兇靈は認めて居るが、あの怪物の方からは、高姫に憑依して居る金毛九尾の正體は見る事

は得ないのだ。つまり妖怪と妖怪とが高姫さまの肉體を隔てて暗中模索的妄動をやつて居るのだ。併しこれが大神様の水も漏らさぬ御注意の點である。空助さまに化けた怪物と高姫身内の惡狐とが互に素性を知り合ひ、又其姿を認め得たならば、内外相應じて高姫を愈惡化せしめ、如何なる害毒を天下に流すか知れたものぢやない。ああ有難い神様の思召し「

と感涙に咽んで居る。スマートは初稚姫の膝に頭を横たへ、初稚姫の獨言を了解するものの如くであつた。

「これスマートや、お前は行儀の悪い、なぜきちんとお坐りなさらぬのだい」

スマートは耳をペロペロと動かしながら、まだ起きようともしない。

「ああさうさう、スマートや耐へてお呉れ。お前さまは足を怪我したのだな、坐りなさいと云つたつて坐れないのは無理はない。これは私が悪かつた、許してお呉れ」

とやさしく頭を撫でてやる。スマートは嬉しさうに尾をふつて感謝の意を表すものの如くであつた。

スマートは「ムツク」と起き、體をプリプリと振りながら、形相凄じく前の足を立てて何物にか飛びつくやうな勢を示した。さうしてウーウーウと小聲で唸つて居る。初稚姫はスマートを撫でながら聲も優しく、

「これスマートや、何が来たのか知らないが、お前は必ず「イキリ」立つてはいけませんよ。私が命令をするまで、どんなものが来ても、決して唸つたり飛びついたりする事はなりませんぞや。私だつて何も彼もよく知つてゐるのだけれど、これには少し譯があるのだから、何卒おとなしうして居てお呉れや」と諭せば、スマートは首を垂れ尾をふつて承諾の旨を表示した。

「ほんに畜生ながら賢いものだなア。お前は私の家来だよ。私と何處までも一緒について來るのだ。さうして立派な御神業を完成した上は、再び人間と生れ變り、立派な宣傳使となつて世界萬民を導き、天國に安樂な生活を送らして頂くやうに忠實に務めるのだよ。ほんにお前は何處ともなしに變つた犬だ。勇猛にして且柔順な理想的なお前は犬だ」

と頻に頭や首を撫で可愛がつて居る。スマートは漸くにして足をかがめ、疊に顯

をすりつけ、目を塞いで柔順な態度を示して居る。

「あの空助と化相した怪物を、スマートがよく看破し、最前も追っ駆けていつて格闘の末、こんな傷を負って来たのだな、ほんに勇敢なスマートだ」

と激賞して居る折もあれ、例の高姫は静々と歸つて来た。

「アアお母さま、御苦勞様でムいました。父は居られましたかな」

「ハア、やつとの事でお目にかかつて来ましたよ。空助さまは森林を逍遙なさる

際、藤葛に足を引掛け、岩石に眉間を打ちつけ、大變な傷をなさつて、谷川で傷

を洗つて居られました」

之を聞くよりスマートは又もや【ムツク】と頭を上げ、ウーウと唸りかけた。

初稚姫は慌てて頭を撫でながら、

「これスマート、おとなしくするのだよ。主人の云ふ事を聞きなさいや」

と静になだめながら、

「はてな、怪物はこのスマートに眉間を噛まれたのだな」

と鋭敏の頭腦に直覺した。されど素知らぬ體を装ひ、言葉柔しく満面に笑を湛へ



ながら、

「あのお母さま、お父さまは本當にお危ない事をなさいましたなア。大した事は  
△いませぬか。私、心配でなりませぬわ。そして直に歸つて下さるのですか」

「別に大したお怪我でもありませんが、中々我が強いお方で、お前さまがお出で  
だと云つても、容易にお動き遊ばさぬのですよ」

「父は私の事を何と云つて居ましたか、定めて怒つたでせうなア」

「何、初さま、自分の娘が来て居るのに怒る人がありますか。そんな事怒るやう  
な方だつたら人間ぢやありませんわ」

「それでも私の父はハルナの都の御用が濟むまで、どんな事があつても面會は致  
さぬと、それはそれは厳しう申して居ましたよ」

「そこが空助の空助さまたる所だ。ほんとにお偉い方ですよ。母の愛は舐犢の愛、  
父の愛は秋霜の愛と云つて、云ふに云はれぬ所があるのです。何程厳しく仰有つ  
ても、本當の心の中は母親の愛に優る千萬無量の涙を湛へてゐるのだからな、併  
しこの高姫は切つても切れぬ身靈の親子でもあり、肉體上の義理の親子でもあり

ますから、其愛の分量は、到底生みの母の及ぶ所ではありませぬ。どうぞ打ちつけて此母の云ふ事を守つて下されや」

「ハイ承知致しました。何分にも宜敷くお願い申します」

「早速ながら初稚さま、私の云ふ事を聞いて貰へますまいかなア」

「これは又改まつてのお言葉、私のやうなものにお頼みとは、どんな事でムいませぬか」

「實の所は、お前の折角可愛がつてムるこの犬を、いなして貰ひたいのだ。空助さまは犬が大變お嫌ひだから、「この神聖の館にそんな四つ足を入れることはならぬ。聖場が汚れるから、いなして呉れ、さうでなければ私は此處には居ない」と、それはそれは堅う堅う仰有るのだよ」

初稚姫はそれと感づきながら、態と空惚けて、

「何と不思議な事でムいますなア、私の父は特別犬が好きなのでムいますが、齋苑の館でも、往き復り、犬を離れた事はないのでムいますよ。それに心機一轉遊ばすとは不思議ぢやムいませぬか。それ程この犬が怖い、イヤ嫌ひなのでムいま

せうかなア」

「何と云つても此處は神聖なお仕組の場所、汚れた四足を置いておくと大神様のお氣障りになるから、空助が神様に對し謹慎の意を表し、犬をいなせと仰有つたのですよ」

「それでも産土山の聖場には澤山に犬が飼つてゐます。御本山でさへもあれだけ澤山の犬が居るのに、何故此處には一匹も置く事が出来ないのでせう。私この犬が唯一のお友達でもあり力でもあるのですからなア」

「初稚さま、お前さまはこの犬を離すのが嫌と仰有るのですか。産土山に澤山の犬が居るのは、素盞鳴尊様や八島主さまや東助や役員の方の御靈が曇つて居るのだから、結構な聖地に四つ足がうるついで居るのだ。又狐の靈や豆狸が入り込まないやうに犬が置いてあるのだ。御神徳さへあれば犬の力を借らなくても、狐や狸や大蛇や蟻の靈が出て来るものぢやありませんか。産土山に犬が置いてあるのを見て、御神徳がないのが分るぢやありませんか」

初稚姫は、高姫の暴言に呆れながら、さあらぬ態にて柔しく空惚けて、

「左様でムいますかなア、御神徳と云ふものは尊いものでムいますなア」と相槌を打つて居る。

「遠は空助さまの娘だけあつて、何につけても悟りがよいわい。ほんに水晶の御靈だ。さう早く「もの」が分つた以上は、此犬を齋苑の館へおつ歸して下さるだらうねえ」

スマートは二人の問答を聞いて不安に堪へ兼ねたやうな形相をしながら、又ウーウーと小さく唸り出した。初稚姫はスマートの頭を撫でながら、耳許に口を寄せ何事か小聲に囁いた。スマートは柔順に頭を下げ目を塞いで仕舞つた。

「サア、お父さまの云ひつけだから、どうぞ早くいなして下さい。それが親に對する一番の孝行だ。そして神様に對する麻柱の大道だから、きつと柔順にかへして下さるだらうねえ」

初稚姫は打ち首肯き、

「お母さまやお父さまのお言葉、背いてなりませうか。大事の大事のスマートでムいますけれど、御兩親の仰とあれば、背く譯には往きませぬ。アア残念ながら

スマートに別れませう」

「何とまあ柔順なよい娘だこと。ほんたうに空助さまは、どうしてこんな立派な娘をお持ちなさつたのだらう。八島主さまが宣傳使になさつたのも無理はないわい」

と初稚姫を無性矢鱈に褒めちぎつて居る。

「お母さま、犬位いなしたつて、さう褒めて貰ふやうな事がムいませうか。どうぞお氣遣ひ下さいますな。併し畜生とはいへ折角此處まで連れて來たのですから、門口か又は一二町許り送つてやりまして、そこで篤り云ひ聞かせ、再びここへ歸つて來ないやうに申し聞かせます」

「オホホホ、何とまあ御叮嚀な御子だこと、門口から追ひ出せばよいものを、御主人か何ぞのやうに、お前さまが送つてやるとは、些と分に過ぎはしませぬか、オイ畜生、お前は冥加に盡きるぞや、私の娘に送つて貰ふなぞとは果報者だ。併し乍ら此高姫も何だか此犬が怖ろしい、イヤイヤ怖い嫌ひなやうな氣がして居たのよ、アアこれでやつと安心した。金毛九尾も……」

と口から云ひかけてグツと口をつまへ、自分の腹をギューギューと揉みながら、

「こりや、氣をつけぬか」

と吾と吾身をきめつけて居る。初稚姫は又空惚けて、

「お母さま、「氣をつけぬか」と仰有いました、何か不都合がムいますか。何

卒至らぬものでムいますから、御注意を下さいませ」

「エエ、イヤ何でもありません、つひ一寸何です……此聖地は何彼につけて神聖

な所だから、萬事氣をつけねばならぬと云つたのですよ」

「ハイ有難うムいます。一寸其處まで犬を送つて参ります。お母さま、此處に待

つて居て下さい。やがてお父さまも歸つて下さるでせう」

と言葉を残し、スマートを伴ひ一二町ばかり坂の彼方に進み、山の裾に隠れて館

の見えない地點までスマートを伴ひ行き、頭や首背を撫でながら、

「これスマートや、お前は偉いものだなア、空助に化けて居る怪物や、高姫の身

内に潜んで居る悪い狐がお前を大變怖がつて居る。それだからあのやうに二人が

私に「お前をいなして呉れ」と迫るのだよ。併し私はお前と主従の約束を結んだ

以上は、假令半時の間だつて離れるのは嫌だよ。お前だつてさうだらう。併し今の場合どうする譯にも往かないから、一旦お前は歸んだ事にして、日が暮れたらそつと私の居間の床下に隠れて居て下さい。御飯をソツとお前の腹の減らないやうに上げるから」

と懇々と諭せば、スマートは尾をふり首を數回も縦にゆりながら「萬事承知致しました」と云ふ心意氣を表情に示して居る。

「分つたかな、アアそれで私も安心した。きつと私が此處に居る間は姿を見せないやうにして下さい。併し又、夜分には戀しいお前さまと抱合つて遊びませう。お前さまは雌犬だから、私と抱擁したつてキツスをしたつて、構ひはしないわ

ネー、ホホホ」

と笑ひながら別れて館に歸つて來た。スマートは日の暮るるを待ち兼ね、ソツと初稚姫の居間の床下に身を忍ばせ、主人の言ひつけをよく守り、且初稚姫の保護の任に當る事となつた。

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 加藤明子録)

第二篇 兇黨擡頭

第五章 靈肉問答（一二九九）

高姫は初稚姫のスマートを送つて出た後に只一人、腹中の兇靈に打向ひ、握り拳を固めながら、懷をパツと開き、布袋つ腹を現はし、兩方の手で臍のあたりを掴んだり擲つたりしながら、稍聲低になつて、

「コリヤ、其方はあれ丈注意を與へておくのに、なぜ初稚姫の前で、あんな不意な事をいふのだ。サア、高姫が承知致さぬ。一時も早く、トツトと出てくれ。」

「エー何と云つてもモウ許さぬのだ。汚ららしい、コリヤ、痰唾をはつけてやらうか」

と云ひながら、自分の臍のあたりに向つて、靑洩をツンとかんでこれをかけ、又々唾をピューピューと頻りに吐きかけてゐる。



「アハハハハ、どれだけお前まへが痰唾たんつばを吐はきかけようが、腹はらを捻ねぢようが、チツともおれは痛いたくはない。つまりお前まへの腹はらをお前まへが痛いため、お前まへの唾つばをお前まへの腹はらにかけただけのものだ。そんな他愛たあいもない馬鹿ばかを盡つくすよりも、日出ひの神義理のかみぎりてんじやう天上てんじやうの申まをすことを神妙しんめうに服従ふくじゆうするがお前まへの身みの爲ためだぞ。グヅグヅ申まをすと腹はらの中で暴あばれさがし、盲腸まひぢゆうを破やぶつてやらうか、コラどうぞやや」

「アイタタタ、コリヤコリヤそんな無茶むぢやな事ことを致いたすものでないぞ。結構けつこうな結構けつこうな常世とこよひめ姫ひめの御肉體おにくたいだ。左様さやうな不都合ふつがふを致いたすと、大神おほかみさま様に御届おとどけ致いたすが、それでも苦くるしくないかや」

「や、そいつア一寸ちよつとこま困こまる、何なにを云いうても我がの強つよい肉體にくたいだから、思おもふやうに使つかへないので神かみも聊いささか迷惑めいわくを致いたして居をるぞよ。チツと柔順おとなしくなつて御用ごようを聞きいて下くだされよや」

「何を吐ぬかしやがるのだ。又またしても又またしてもしようもない事ことを吐ぬかして、人ひとに悟さとられたら何なんとするのだ。本當ほんたうに馬鹿ばかだな。これから此方このほうが嚴きびしく審神さにはを致いたすから、一言ひとでも變へんな事ことを申まをしたら、此生宮このいきみやが承知しょうち致いたさぬぞやや」

「イヤ、肉體の言ふのも尤もだ、キツト心得るから、どうぞ仲ようしてくれ。何と云つても密着不離の關係になつてゐるのだから、お前の肉體のある間は、離れようといつたつて離れる譯にも行かず、お前も亦俺を追ひ出さうとすれば、命をすてる覺悟でなくちや駄目だぞ。すぐに盲腸でも十二指腸でも、空腸、回腸、直腸、結腸の嫌ひなく、捻ぢて捻ぢて捩ぢ廻し、肉體の命を取るのだから、つまりお前は俺を大事にし、俺はお前の肉體を唯一の機關とせなくちや、惡の目的が成就せぬのだからなア」

「コリヤ、又左様なことを申す。この高姫は稚櫻姫命の身魂の系統、常世姫命の再來だ。惡といふ事は微塵でもしたくない、大嫌ひなのだ。其方は惡を改めて善に立復つたと申したでないか。どうしても此方の肉體を使うて惡を致し、變性男子様の御神業を妨げ致すのなれば、此高姫は假令其方に腸をむしられて國替をしても、チツとも構はぬのだ。サアどうだ、返答致せ」

と審神者氣分になつて呶鳴つてゐる。

「ヤア高姫様、眞に申し違ひを致しました。つひ惡を憎むの餘り善と惡とを取違

へまして、あんな不都合なことを申しました。今後はキツと心得ますから、どうぞ霊肉和合して下さいませ」

「ウンよしッ、それに間違ひなくば許してやらう。此上一言でも金毛九尾だの大蛇だのと申したら了簡致さぬぞや」

「それなら、何といひませうかな、義理天上日出神と名乗りませうか」

「おそれおほ怖い事を申すな。義理天上様は變性男子様の系統の御身魂ぢや。其方はヤツパリ、ユラリ彦命と申したがよからうぞ」

「コレ高姫さま、さうイロイロと澤山の名を言つちや、娑婆の亡者が本當に致しませぬぞや」

「コリヤ、何と云ふことを申す。人間は結構な神の生宮だ。天が下に神様のお守りを受けないものは一人もないぞや。言はば結構な天の神様の直々の、人間は御子だ。何を以て娑婆亡者などと申すのか、なぜ善言美詞の言靈を使はぬ。ヤツパそのほうり其方はまだ本當の改心が出来て居らぬと見えるなア。改心致さな致すやうにして改心を致さして見せうぞや」

高姫さま、一旦入の入つた瀬戸物は何程甘く焼つぎをしても、其疵は元の通りになほらないと同様に、元來が身魂にヒビが入つてゐるのだから、本當の善に還る事は辛うて出来ませぬぞや。お前さまの肉體だつて、ヤツパリさうぢやないか。入が入つて居ればこそ、此方が這入れたのだ。お前さまは立派な大和魂の生粹だと思つてゐるだらうが、此金毛九尾から見れば、大和魂どころか山子だましの身魂だよ。相應の理によつて、破鍋にトチ蓋式に自然に結ばれた因縁だから、何程もがいても何うしても、此惡縁は切ることには出来ませぬぞや、お前さまも是非なき事と斷念して、吾身の因縁を怨めるより仕方がないぢやありませんか。靈肉不二の關係を持つてゐる肉體と此方とが、何時もこれだけ衝突をして居つては互の迷惑……否大損害ですよ。チツとはお前さまも大目に見て貰はなくちや、わしたつて、さう苛められてばかり居つても、立つ瀬がないぢやないか」

「今迄なれば少々のことは大目にみておくが、お前も知つて居るだらう、齋苑館にムつた三五教の三羽鳥空助様がお出でになり、此肉體の夫となられ、又立派な娘の初稚姫が此處へ私の子となつて來たのだから、餘程心得て貰はなくては、今

迄とは違ひますぞや。今迄は此高姫も殆ど獨身同様であつた。大將軍様の肉宮はあの通りお人よしだから、どうでもよい様なものだつたが、今度は摩利支天様の肉宮が、此肉體の夫とお成り遊ばしたのだから、お前さまの自由ばかりになつてゐる譯には行かぬから、其積りで居つて下されや」

「それは肉體のすることだから敢へて干渉はしないが、併しながら、初稚姫といふ女は何だか蟲の好かぬ女だ。お前も物好きな、他人の子を吾子にせなくてもよいぢやないか」

「馬鹿だなア、あの初稚姫は本當に掘出し物だよ。柔順で賢明で而して人には信用があるなり、あんな娘を使はずに、どうして神業が完全に出來るのだ。お前も改心して五六七神政成就の爲に活動するならば、これ程大慶の事はないぢやないか。變性男子様が永らくの間御苦勞御艱難遊ばして、此處まで麻柱の道をお開き遊ばし、又都合によつてウライナイ教も御開き遊ばしたのだから、惡が微塵でもあつたら、此事は成就致しませぬぞや」

「それでも、お前、三五教をやめてウライナイ教を立てようと、昨日もいつたぢや

ないか。どちらを立てて行くのだ。それからきめて貰はなくちや、此方も困るぢやないか」

「變性男子のお筆には……三五教ばかりでないぞよ。此神はまだ外にも仕組が致してあるぞよ。ウツカリ致して居ると、結構な神徳を外へ取られて了ふぞよ……とお示しになつて居るだろ、此頃の齋苑館の役員共の行り方と云つたら、サツパリ變性女子の教ばかり致して、男子様の御苦勞を水の泡に致さうとするによつて、お筆に書いてある通り、系統の身魂の此方が、已むを得ずしてウラナイ教を立てるのだ、併しながら秘密は何處までも秘密だから、表はヤツパリ三五教を標榜し、其内實はウラナイ教を立てるのだよ。よいか、合點がいただらうなア」

「コレ肉體さま、ソリヤ二股膏藥といふものではないかなア。いつも惡は嫌だ嫌だと云ふ癖に、なぜ其様な謀反を起すのだい。善一つを立てぬくのなれば、お前が舍身的活動をして三五教の過つてゐる行方を改良さして、一つの道でやつて行つたらいいぢやないか。さうするとヤツパリ肉體も善を表に標榜し、自我を立て通す爲に結局惡を企んでゐるのだなア。サウすりや何も、わしのすることや言ふ

ことをゴテゴテいふには及ばぬぢやないか。同じ穴の狼だ。怪狼同狐の閒柄ぢやないか。お前が善か、俺が悪か、衡にかけたら何方が上るやら、僅かに五十歩と五十一歩との違ひだらう。どうぞや肉體、これでも返答がムるかな、ウツフツフ  
「コリヤ、喧しいワイ。そこは、それ、神の奥には奥があり、其又奥には奥があるのだ。切れてバラバラ扇の要……といふ謎を、お前は知らぬのか……十五夜に片われ月があるものか、雲にかくれてここに半分……だ」  
「ハツハハ、イヤ、チツとばかり了解した。……此腹の黒き尉殿が一旦改心の坂を通り越し、又もや慢心と申す元の屋敷にお直り候……だな、イツヒツヒ。それならさうと、なぜ初めから云つてくれないのだ。コツチにも方針があるのだから……俺も昔から金毛九尾といつて、随分悪は盡して來たのだが、腹の黒い人間の腹中は、自分が現在這入つて居りながら、分らぬものだ。いかにも人間といふものは重寶なものだなア。偽善を徹底的に遂行するには、本當に重寶な唯一無二のカラクリだ、イツヒヒ。それを聞いて此金毛九尾もスツカリと安心を致したぞや。サア始めてお前が打ち解けてくれたのだから、今日位心地よいことはないワ、

のう大蛇よ、猿よ、狸よ、蟆よ、豆よ、本當に岩戸が開けたやうな氣分がするぢやないか」

腹の中から違つた聲で、

「ウン　ウン　ウン　ウン、さうさう、これでこそ、私たちも安心だ。流石は金毛九尾さまだけあつて、よくマア肉體と、其處まで談判して下さつた。ああ有難

い有難い」

腹中より又もや以前の聲で、

「さうだから、此金毛九尾さまに従へと云ふのだ。これから高姫の肉體をかつて、三千世界を自由自在に致すのだ。それに就いては先づ第一に三五教を崩壊し、ウライナイ教を立てて善の假面を被り、現界の人間を片つ端から兇黨界に引張り込で了ふのだ。最早肉體が心を打ち開けた以上は、何と云つても宣り直しはささない。若しも最前の言葉に肉體が反きよつたら、お前たちはおれの命令一下と共に、そこら中を引張りまはし苦めてやるのだよ」

「コラ、そんな無茶な相談を致すといふことがあるか、表は表、裏は裏だ。さう



お前のやうに露骨に云つちや、肝腎の大望が成就せぬぢやないか」

何、お前の耳に内部から傳はるだけのもので、決して外部へは洩れる氣遣ひはない。お前さへ喋らなかつたら、それでいいのだ」

ソリヤさうだな、それならマア、十分にお前も千騎一騎の活動を致すがよいぞや。この高姫も乗りかけた舟だ、何處までも初心を貫徹せなくちやおかないのだからな。ドレドレ、モウ初稚が歸つて來る時分だ。思はず守護神と談判をして居つたものだから、つひ時の經つのも忘れてゐた。併し初稚姫が聞いてゐやせなんだか知らぬて、何だか氣掛りでならないワ」

といひながら、サツと障子をあけて長廊下を眺めた。初稚姫は芒の枯れた穂をつかみ握りながら、他愛もなく遊び戯れ、廊下に一本一本さして遊んでゐる。その無邪氣な光景を眺めて、高姫はホツと一息し、

何とマア無邪氣な娘だこと、枯尾花を板の間の隙間に立て竝べて遊んでゐるのだもの。大きな圖體をしながら、そして十七にもなりながら、未通こい娘だなア。本當に水晶魂だ。この高姫がうまく仕込んでやれば、完全に改悪して立派なウラ

ナイ教けうの宣傳使せんてんしになるだらう。何なんと云いつても空助くすけさまと云いふ父親てておやを掌中しやうちうに握にぎつてゐるのだから大丈夫だいぢやうぶだ。東助とうすけさまに肱鐵ひざてつをかまされ、大勢おほせいの前まへで恥はぢをかかされて、悔くやし残念ざんねんさをこぼつて、此處ここまで來きて見みれば、こんな都合つがふの好いいこと出で來きて來きた。ああ、人間にんげん萬事ばんじ塞翁さいおうの馬うまの糞くそとやら、苦くるしい後あとには樂たのしみがあり、樂たのしみの後あとには苦くるしみが來くるぞよ、改心かいしんなされよ……と男子なんし様さまのお筆先ふでさきにチヤンと出でて居ゐる。高姫たかひめもまだ天運てんうんが盡つきないと……あ……見みえるワイ、エツへへへ、變性へんじやうな男子なんし様さま、大國おほくに治立ちはり命のみこと様さま、守まもり給たまへ幸さきはへ給たまへ」

「オツホツホホ、オイ肉體にくたい、大變たいへんな元氣げんきだなア、甘うまく行ゆきさうだのう。吾々われわれ一いち團體だんたいの兇靈きようれい連中れんちゆうも満まん足ぞくしてゐる。どうだ、チツと歌うたでもうたつたら面白おもしろからうに……」のう」

「コリヤ、何なんと云いふ不心得ふこころえなことをいふか。世界せかいは暗雲やみくもになり、殆ほとんど泥海どろうみのやうになつてゐるのに、そんな陽氣やうきなこと、どうして誠まことが貫つらぬけるか。變性へんじやうな男子なんし様さまのお筆先ふでさきを何なんと心得こころえてゐる、チツと改心かいしんしたがよからうぞ」

「アハハハハ、善惡ぜんあく不二ふじ、正邪せいじや一如いちによといふ甘うまい筆法ひつぱふだなア。一枚いちまいの紙かみにも裏表うらおもての

あるものだから………」

「シーツ、今そこへ初稚姫が出て来るぢやないか、チツと心得ないか」

「聲がせないと、チツとも姿が見えぬものだから、これはエライ不調法を致しました。オオ怖はオオ怖は、肉體の權幕には俺も往生致したワイ」

初稚姫は何氣なき態を装ひ、ニコニコしながら出で來り、

「お母アさま、とうとうスマートをぼつ歸して來ましたよ。妙な犬でしてね、何程追っかけても後へ歸つて來て仕方がありませんので、私も困りましたよ」

「ああさうだるさうだる、あれ丈お前につき纏うて居つたのだから、離れともなかつただらう。何と云つても畜生だから人間の云ふこた分らず、嘸お骨折だつた。併しまアよう歸にましたなア」

「ハイ、仕方がないので、石を拾つて五つ六つ頭にかちつけてやりましたの。そしたら頭が二つにポカンと割れて大變な血を出し、厭らしい聲を出して逃げて歸りましたの」

「それは本當に、氣味のよいこと………ウン、オツトドツコイ、氣味の悪いことだ

つたね。大變にお前を恨んで居つただらうなア」

「何程ウラナイ教だとして、怨みも致しますまい、ホホホ」

「や、初稚さま、お前は今ウラナイ教と言ひましたね、誰にそんなことをお聞きになつたのだえ」

「お母アさま、表はね、三五教で、其内實は、お母アさまのお開き遊ばしたウラナイ教の方が良いぢやありませんか。私、ウラナイ教が大好きですよ」

「オホホホホ、ヤツパリお前は私の大事の子だ、何と賢い者だなア。これでこそ三五教崩壊の……ウン……トコドツコイ、法界の危急を完全に救済することが出来ませうぞや」

「さうですなア。誠さへ立てば、名は何うでもいいぢやありませんか」

高姫は首を頻りにシヤクリながら、笑を満面に湛へて、

「コレ初稚さま、お母アさまは、これからお父さまをお迎へ申してくるから、お前さまは暫く事務所へでも行つて遊んで来て下さい。こんな所に一人置いてくのも氣の毒だからなア」

「お母アさま、そんなに永く時間がかかるとはですか」

「さう永くもかからない積だが、何と云つてもあの通り、云ひかけたら後へ引かぬ空助さまだから、犬を歸なしたことから、其外お前さまの腹の底を、トツクリと御得心なさるやうに申上げねばならぬから、チツとばかり暇が要るかも知れませぬからなア」

「お母アさま、私もお供致しませうか」

「イヤイヤそれには及びませぬ。又空助様に、どんな御意見があるか知れませぬから、却つてお前さまが側にゐない方が、雙方の爲に都合がいいかも知れませぬ。一寸其處まで行つて参ります」

とイソイソとして出でて行く。後見送つて初稚姫はニツコと笑ひ、イソイソとして珍彦の居間を訪ね、同年輩の楓姫とあどけなき話を交換しながら時を移してゐる。

（大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 松村眞澄録）

第六章 玉茸（一三〇〇）

高姫は祠の森を隈なく探ね廻つた。漸く草むらの中にウンウンと呻きながら眠つてゐる空助の姿を眺め、

「これ、空助さま、サア歸りませう。こんな處に横たはつてゐてお風邪を召したら大變ですよ。サア私と一緒に歸らうぢやありませぬか」

「さう八釜しう云つてくれな。俺はチツとばかり頭が痛いんだから、自然のお土に親しんで暫らく此處で休んで歸るから、お前は彼方へ行つて休んだが宜からうぞ」

「これ空助さま、何と云ふ水臭い事を仰有るのだい。二世を契つた夫婦の仲ぢやありませぬか。夫の難儀は妻の難儀、妻の喜びは夫の喜び、何處までも苦樂を共にしようと思つた仲ぢやありませぬか。そんな遠慮はチツとも要りませぬ。さア何卒、私が介抱して上げませう」

「いや何卒構うてくれな、私の體に何卒觸らない様にして呉れ、頼みだから……」

「これ此方の人、お前さまは私が嫌になつたのだな。女房が夫の體に觸れない道理が何處にありますか。夫の病氣を素知らぬ顔して、女房の身として之が放任して居れますか。此高姫は一旦お前さまと夫婦の約束をした上は、假令此肉體が粉にならうと、何處までも貞節を盡さねばなりません。そんな水臭い事を仰有るものぢやムリませぬぞや」

「ヤ、決して俺が斯う云つたとて、氣を悪うしておくれな。又お前が決して嫌だと云ふのでも何でもない。さア何卒早く館へ歸つて、萬事萬端氣を付けてくれ」  
「それだと云つて、之を見捨てて何ぼ氣強い私でも歸られませうか。何なら罹重身倒でも探して來ませうか」

「いや、何にも要らない。そんな結構な物を頂くと、却つて神罰が當るかも知れない。私がかうして怪我をしたのも、全く神様の見せしめだ。神様がお許し下さらば、屹度直して下さるだらう。何程人間が藻掻いた處で仕方がないからのう」  
「それなら天津祝詞を奏上して上げませうか」

「いや、それには及ばぬ。斯うなり行くのも神様の御都合だ。祝詞なんか奏上して

は、却つて畏れ多い。何卒頼みだから、館へ歸つてお前は御用をしてくれ。それが何よりの功德だ。さうすれば、私の怪我もすぐ癒るだらう』

「それなら、鎮魂をして上げませうか。……一二三四……」

と云ひかけると、空助は慌てて押し止め、苦しうな聲を出して、

「高姫、それに及ばぬ。そんな勿體ない事は云はぬやうにして呉れ。却つて私は苦しいから」

「それなら、初稚姫さまを呼んで來ませうか。そして介抱をさせたら貴方の氣に入るでせう。到底私の様な婆アの介抱では、病氣がますます重くなりませうから

な」

と稍嫉み氣味になつて言葉を尖らし始めた。

此空助は、その實ハルナの都の大雲山に蟠居せる八岐大蛇の片腕と聞えたる肉體を有する兇靈で、獅子虎兩性の妖怪であり、其名を妖幻坊と云ふ大怪物である。妖幻坊はスマートに眉間を噛みつかれ、ここに大苦悶を續けてゐたのである。されど高姫に其正體を看破られむことを恐れて、一時も早く高姫の此處を立去らむ



事をのみ望んでゐた。されど高姫は何處までも大切の夫の介抱をせなくてはならぬと思ひつめ、少しも其處を動かうとはせない。妖幻坊の空助は、人間の形體を負傷の身を以て保持してゐるのは非常な苦痛である。ウツカリすると其正體が現はれさうになつて來たので、聲を勵まし稍尖り聲で、

「これ、高姫、何故そなたは夫の申す事を聞いてくれないのか。お前も高姫と云つて随分剛の者ぢやないか。夫の病氣に心をひかれて、肝腎の神様の御用を次ぎに致さうとするのか。そんな不心得のお前なら、もう是非がない。縁を切るから、其方へ行つてくれ」

「空助さま、お前さまは頭を打つてチツと逆上せてゐるのだらう。さうでなければ、そんな水臭いことを仰有る筈がない。ああ氣の毒な事だな。ああ惟神靈幸倍坐せ」

「こりや高姫、私は最前も云うた通り神様の戒めにあつて居るのだから、そんな事は何卒云つてくれなと云つたぢやないか。何故夫の言葉を前は用ひないのか」  
「よう、そんな事を仰有いますな。初稚姫があれだけ大切にしてみたらスマートを

私がお父さまの命令だからと云つて千言萬語を費し説きつけた處、初稚は到頭私の言ひ條についてスマートに大きな石を五つもかちつけ、頭蓋骨を割り、大變な血を出したので、スマートは、あた氣味のよい、キヤンキヤンと悲鳴をあげて逃げて了ひましたよ。大方今頃は河鹿峠の懷谷近邊で倒れて死んで了つてゐるに違ひありません」

「何、スマートに石をかちつけて初稚姫が歸なしたと云ふのか。ヤー、それは結構だ。持つべきものは子なりけりだな」

「そら、さうでせう。お前さまの目の中へ這入つても痛くないお嬢さまですから。持つべからざるは女房なりけりと云ふお前さまは水臭い了簡でせうがな」

「もう頭の痛いのにクドクドとそんな事は云つてくれな。又痛みが止まつてから不足なり、何なりと承はらう。それよりも早く宅へ歸つて初稚姫を呼んで來てくれ。そしてお前は人知れず受付の前にある大杉の木へ上つて玉茸と云ふ茸があるから、それを【むし】つて來てくれないか。それさへあれば私の病氣は一遍に治るのだ」

「それなら、ハルカイルに梯子でもかけて取らせませうかな」

「いやいや、これは秘密にせなくては效能が現はれぬのだ。假令娘の初稚姫にだ

つて覺られちや無効だぞ。兔に角、初稚姫を呼んで来るよりも、お前が早く其玉

茸をソツと取つて来てくれないか。夫が女房に手を合して頼むのだから……」

と涙を兩眼に垂らして高姫を拜み倒した。高姫はオロオロしながら兩眼に涙を浮

べ、

「これ、空助さま、夫が女房に手を合して頼む人が何處の世界にありますかいな。

それなら之から玉茸をとつて参ります。何卒暫く此處に待つて居て下さい。苦し

いでせうけれどな」

「それは御苦勞だ。何卒怪我をせない様に、そして人に見付からぬ様に採つて來

て下さい。それ迄は初稚姫にも何人にも云つてはいけませぬぞ」

「ハイ、何も彼も呑込んで居ります。それなら之から取つて来て上げませう。暫

く此處に……ネー空助さま、貴方も摩利支天様の御身魂だから、之位の傷にはメ

ツタに往生なさる事はありますまいからな」

「うん、さうだ、大丈夫だよ。お前も夫に對する初めての貞節だから、何卒怪我をせない様にして玉茸の採取を頼むよ」

「ハイ、承知致しました」

と大きな尻をプリンプリンと振りながら、空助の倒れて居る姿を見返り見返り、チヨコチヨコ走りに受付の前の大杉の木の蔭にソツと身を寄せた。空助に變化してゐた妖幻坊はヤツと一安心して元の怪物と還元し、一先づ此處を立去らねば、又も人に見付けられては堪へ難き苦痛だと、谷の流れを傳うてガサリガサリと山の尾の上を渡り、向ふ側の日當りのよき窪んだ處に横たはり、四邊に人なきを幸ひ、ウーンウーンと呻き苦しんでゐたのである。

扨て一方の高姫は、森の木蔭に身を忍び、受付の様子を考へてみると、イルとハルとが火鉢を眞中に圍み、何事か「アツハツハツハツハツハツハツハツハツ」と笑ひながら雪駄直しが大仕事を受取つた様な態度で、何時動かうともしない。高姫は氣が氣でならず、

「早く兩人何處かへ行つてくれたらよいがな。氣の利かぬ奴ばかりだ。早く玉

茸を取つて空助さまに上げなくちや、あの鹽梅では大變傷が深いから本復せぬかも知れない。でも彼奴等に見られちや藥が利かぬのだし、エーぢれつたいことだ  
なア」

と森蔭に地團駄を踏んでゐる。ハル、イルはそんな事も知らず何事か笑ひ興じてゐる。高姫も耳をすまして此話を聞くより外に取る術はなかつた。大杉の一方に姿の见えない様に身をかくして聞いて見れば、イルは、

「如何も怪しいものぢやないか。エー、空助さまだつて耳がペラペラと動くなり、又今度来た初稚姫さまは何うも一通りの人ぢやない様だし、楓姫さまが素敵な美人だと思つてゐたのに、これは又幾層倍とも知れないナイスぢやないか」

ハルは、

「ウン、さうだな、俺達も男と生れた以上は、あんなナイスと假令一夜でもいいから添うて見たいものだな。然し初稚姫さまだつて楓姫さまだつて、何れ養子を貰はねばならぬのだから、滿更目的の外れる事もあるまい。あんな人になると却つて器量を好まぬものだ。口許のしまつた色の淺黒い男らしい男を好むものだよ。」

貴様だつて、俺だつて軍人教育を受けとるのだから、何處ともなしに軍人氣質が  
残つて凜々しい處があるなり、一つ體を動かすにも廻れ右、一二三式なり、本當  
に女の好きさうな男だからな」

「うん、そらさうだ。貴様だつてあまり捨てた男前でもなし、俺だつてさう掃溜  
に捨てた様な男前でもなし、婿の候補者には最も適當だ。さうして宗教の變つた  
ものと結婚すれば互に其信仰を異にするが故に、如何しても家庭の圓滿を缺くと  
云ふ點から、三五教の信者は三五教の信者と結婚する事になつてゐる。死んでか  
らでも同じ團體の天國へ行かうと思へば、同じ思想、信仰を持つて居なくちや駄  
目だからな。それ位の事はあんな人になればよく承知してゐるよ」

「エツへへへ中々以て前途有望だ。これだから三五教は結構だと云ふのだ。  
何と云つても齋苑の館の素盞鳴尊はイドムの神といつて縁結びの神様だからな。  
そして金勝要神と云ふ頗る融通の利く粹な神様があつて「添ひたい縁なら添はし  
てやらう、切りたい縁なら切つてもやるぞよ」と、それはそれは中々話せる神さ  
まだから、俺等には持つて來いだよ」

「それはさうと、イク、サール、テル等が競争場裡に立つて中原の鹿を追ふ様な事はあるまいかな」

「そりや大丈夫だよ。あんなシャツ面した氣の利かない頓馬が、如何して二人のナイスのお氣に入るものかね。そんな事ア到底駄目だよ。マア安心したがよからう」

「さうお前の様に樂觀して自惚れてゐる譯にも行くまいぞ」

「何さ、そんな心配は要らぬ。チャーンと運命が決つてゐるのだ。初稚姫様があの凜々しい犬をつれてムつた時、僕の面をチラツと見てニタツと笑つて居られた。その時は情味津々として溢るる許りだつたよ。そしてあの涼しい目からピカピカツと電波を送られた時の美しさと云つたら、まるでエンゼルの様だつたよ。あの目付から考へても、屹度俺に思召があると云ふ事は動かぬ事實だ。アア、併しながら氣の揉める事だわい」

「こりや、貴様、そんな甘い事があるかい。俺は初稚姫さまぢやなけりや、どんな女房だつて持たないのだ。貴様は楓姫さまが合うたり叶うたりだ。楓姫さまは

何時もお前の事を「何と男らしい方だね」と云つてムつたぞ。それに決めておけ」  
「馬鹿を云ふない。先取權は俺にあるのだ。そんな蟲のいい事は云つてくれなよ」  
「馬鹿にするない。屹度俺が初稚姫さまを此方へ靡かして見せようぞ」  
「何、俺が見ん事、靡かしてお目にかけてよう」  
などと何時迄も限りなしに、こんな空想談に耽つてゐる。高姫は氣も狂亂せむばかり苛だてども、何時迄待つても動く氣遣ひはなし、二人の話は益々佳境に入り、日が暮れても夜通ししても容易に動かぬ様子である。高姫は是非なく裏口にまはり、普請に使つた梯子を引張り出し來り、大杉の受付から見えない方面に立てかけ、太い體をシワシワと梯子を弓の如くしわませながら漸く一の枝へとりつき、蜘蛛の巣にひつかかりながら、空助の云つた玉茸は何處にあるかと探しまはつた。されど茸らしいものは少しも見當らない。空助さまが確に此杉だと云つたのだから、何處かにあるだらうと可成く音のせぬやう、枝から枝へ傳ひ上つて行くと、晝目の見えない梟鳥が丸い目を剥いてとまつてゐた。高姫は餘り慌ててゐるので、視覺に變調を來して居たと見え、梟の兩眼を見て、



「ほんに玉の様に丸い茸だ。成程玉茸とはよく云つたものだ」  
と小さい聲で囁き乍ら梟の目を一寸撫でた。梟は驚いて無性矢鱈に高姫の光つた目を敵と見做し、尖つた嘴でこついたから堪らない、高姫はズズズズズ、  
「キヤツ、イイイ痛い」と小聲に叫んだ。されどイル、ハルの兩人は勝手な話に現を抜かし、女房の選擇談に火花を散らしてゐたから、杉の大木の根元に落ちて苦しんでゐる高姫の體が目につかなかつたのである。祠の森の群鳥は俄に何物に驚いたか、ガアガアと縁起の悪さうな聲をして中空を鳴きながら翱翔してゐる。

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 北村隆光録)

## 第七章 負傷負傷(一三〇一)

初稚姫は靜に歩を運びながら珍彦の館を訪ひ、門口の戸をそつと開き、  
「御免なさいまし、私は初稚姫でムいます。ハルナの都へ宣傳使として参ります

途中、大神様に参拜を致し、高姫様のお世話になりました。此處に暫く足を留めて居るものでムいますれば、何卒御入魂に願ひます。』  
と云つた。此聲に驚いて楓姫は襖をそつと開いて現はれ來り、叮嚀に辭儀をしなから桐の火鉢を据ゑ、座蒲團を敷いて、

「貴女様が驍名高き初稚姫の宣傳使さまでムいましたか。それはそれはようまあお訪ね下さいました。實の所は貴女様がお越し遊ばしたと云ふ事を、承はりました。一度拜顔を得たいと願つて居りましたが、私の兩親が申しますには「お前のやうな教育のない不法者が、エンゼルのやうな方の前に出るものぢやない、御無禮になるから控へて居れ」と申しますので、つひ失禮を致して居りました。ようまあ尊き御身をもつてお訪ね下さいましたねえ。サアどうぞ、此處へお上り下さいませ。お茶なりと汲まして頂きます。』

「ハイ、御親切に有難うムります。何彼とお世話に預かりましてなア。時に珍彦様、静子様はどちらにお出でになりましたか、お顔が見えないやうでムいますなア。』

「ハイ、一寸兩親は神様へお禮参りと云つて出て往きました。大方御神前に参つて居られませう」

「神丹のお禮を申しにお出でになつたのでせう」

楓姫は此言葉に吃驚して、初稚姫の顔を見上げながら、少しく手を慄はせ、

「貴女はまア、どうしてそんな詳しい事を御存じでムいますか」

「ハイ、御夫婦の危難を見るに見兼ねて、妾が言靈別命様のお告により、神丹と

云ふ靈藥を造り、スマートに持たせて貴女のお手に渡した筈でムいますから」

「ああ左様でムいましたか。さうすると貴女様は、文珠菩薩様でムいますか、あ

あ尊や有難やなア」

と感謝の涙に咽ぶ。いつの間にやらスマートは床の下を潜り、尾をふりながら此處に現はれて來た。

「これスマートや、うつかり出歩いちやいけませぬよ。何うして此處へお出でたの。お前は本當に靈獸だねえ、私の云ふ事をよく聞いて、御夫婦の危難をよく救うて下さつた。ほんとにスマートの名に背かぬ敏捷なものだねえ」

と讚美へて居る。スマートは嬉しさうに體や尾をふつて居る。楓は漸うに顔を上げ、スマートの姿を見て二度吃驚し、

「アー、昨夜文珠菩薩様がお連れ遊ばした犬は、これでムいますわ、この犬の口から私の手へ神丹を三粒渡して呉れました。さうして文珠菩薩様は私に神丹を授けて直様犬を引き連れ、どこかへお歸りになつたと思へば夢は醒め、堅く握つて居た手を開いて見れば、あの神丹がムいました。貴女は全く生神様、私がかうしてお側へおいて頂くのも恐れ多い事でムいます。さうして私が何うしても合點が参りませぬ事が一つムいます、貴女は何故高姫さまのやうな餘りよくないお方のお子さまになられましたのか」

初稚姫はニツコと笑ひ、

「ハイ、いづれお分りになる事がムいませう」  
と云つたきり答へなかつた。楓は疊みかけて又問うた。

「貴女様は承はれば、空助様のお娘子様でムいますさうですなえ」  
「ハイ左様でムいます。併し此處の空助さまは……」

と云つたきり、口をつぐんで仕舞つた。楓は鋭敏の頭腦の持主であるから、早くも意中を悟つた。さうして小聲になり、

「本當に何ですなえ、何も云はない方が無難でよろしいわね」  
と以心傳心的に、目と目で話の交換を簡単に済まして了つた。

かかる所へ珍彦夫婦は藜の杖をつきながら拜禮を終り、裏口から歸つて來た。其足音を早くも悟つて楓は裏口の戸をあけ、嬉しさうな聲で、

「お父さま、お母さま、お歸りなさいませ。夜前の神様がお越し遊ばしたのよ。」

あの神丹を下さつた文珠菩薩様が  
と小聲に囁いた。

珍彦「何、文珠菩薩様が此處へお出で遊ばしたの。それは直様お禮を申上げねばなるまい」

静子「餘り悪魔が蔓るので、この聖場に居ながらも、夜の目も碌に眠られなかつた。ああ有難い、文珠菩薩様がお越し下さつたか」

と早くも涙聲になつて居る。楓の後に従いて夫婦は座敷に上り、初稚姫の前に頭

を下<sup>さ</sup>げ、歔<sup>しやく</sup>泣<sup>り</sup>きしながら、一言<sup>いちごん</sup>も發<sup>はつ</sup>し得<sup>え</sup>ず感謝<sup>かんしゃ</sup>の涙<sup>なみだ</sup>に暮<sup>く</sup>れて居<sup>ゐ</sup>る。

「もし珍<sup>うづひこ</sup>彦<sup>さま</sup>様、靜<sup>しづこ</sup>子<sup>さま</sup>様、日<sup>にち</sup>々<sup>にち</sup>御<sup>ご</sup>神<sup>しん</sup>務<sup>む</sup>御<sup>ご</sup>苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>さまでム<sup>ご</sup>いますなア。妾<sup>わらは</sup>は初<sup>はつ</sup>稚<sup>わか</sup>姫<sup>ひめ</sup>の宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>でム<sup>ご</sup>います。突<sup>とつ</sup>然<sup>ぜん</sup>參<sup>ま</sup>りましてお邪<sup>じや</sup>魔<sup>ま</sup>を致<sup>いた</sup>して居<sup>を</sup>ります。楓<sup>かへ</sup>様<sup>さま</sup>が親<sup>しん</sup>切<sup>せつ</sup>に仰<sup>おつ</sup>有<sup>しや</sup>つて下<sup>くだ</sup>さるので、つひ長<sup>なが</sup>居<sup>あ</sup>を致<sup>いた</sup>しました」

と、鈴<sup>すず</sup>のやうな柔<sup>やさ</sup>しい聲<sup>こゑ</sup>で挨拶<sup>あいさつ</sup>をした。珍<sup>うづひこ</sup>彦<sup>さま</sup>はハツと頭<sup>かしら</sup>を上げ、初<sup>はつ</sup>稚<sup>わか</sup>姫<sup>ひめ</sup>の靈<sup>れい</sup>氣<sup>き</sup>に満<sup>み</sup>てる其<sup>その</sup>容<sup>よう</sup>貌<sup>ぼう</sup>に感<sup>かん</sup>じ入<sup>い</sup>り、

「貴<sup>あなた</sup>女<sup>め</sup>は文<sup>もん</sup>珠<sup>じゆ</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>の御<sup>ご</sup>化<sup>け</sup>身<sup>しん</sup>様<sup>さま</sup>、よくまアお助<sup>たす</sup>けに來<sup>き</sup>て下<sup>くだ</sup>さいました。これ靜<sup>しづこ</sup>子<sup>さま</sup>、早<sup>はや</sup>く御<sup>お</sup>禮<sup>れい</sup>を申<sup>まを</sup>さないか」

「初<sup>はつ</sup>稚<sup>わか</sup>姫<sup>ひめ</sup>様、文<sup>もん</sup>珠<sup>じゆ</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>様の御<sup>ご</sup>化<sup>け</sup>身<sup>しん</sup>様<sup>さま</sup>、よくまアお助<sup>たす</sup>け下<sup>くだ</sup>さいました。この御<sup>ご</sup>恩<sup>おん</sup>は決<sup>けつ</sup>して忘<sup>わす</sup>れは致<sup>いた</sup>しません」

とハンケチに霑<sup>うる</sup>んだ目<sup>め</sup>を拭<sup>ぬぐ</sup>ふ。

初<sup>はつ</sup>稚<sup>わか</sup>姫<sup>ひめ</sup>は迷<sup>めい</sup>惑<sup>わく</sup>な顔<sup>かほ</sup>をして細<sup>ほそ</sup>い手<sup>て</sup>を左<sup>さ</sup>右<sup>いう</sup>に振<sup>ふ</sup>りながら、

「イエイエお禮<sup>れい</sup>を云<sup>い</sup>はれては濟<sup>す</sup>みませぬ。妾<sup>わらは</sup>の立<sup>たち</sup>場<sup>ば</sup>がム<sup>ご</sup>いませぬ。實<sup>じつ</sup>は言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>別<sup>わけ</sup>の神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>が妾<sup>わらは</sup>に御<sup>ご</sup>命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>遊<sup>あそ</sup>ばしたのでム<sup>ご</sup>いますよ。どうぞ大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>にお禮<sup>れい</sup>を申<sup>まを</sup>して下<sup>くだ</sup>さい。

妾は決して貴方等をお助けするやうな力は無いませぬ」

「なんと御謙遜な貴女様、實に感じ入りました。時に初稚姫様は、昨日見えまして空助様の御令嬢と承はりましたが、左様でムいますかなア」

「イエ……ハイ」

と煮え切らぬ返事をして居る。

楓は兩親に向ひ、

「お父さま、お母さま、そんな失禮な事を仰有つてはいけませんよ。何、あなたの方が姫様のお父さまであつて耐りませう。これには深い譯がおりなされるのでムいますよ。併しながら、これきりで何も仰有らないやうにして下さい。姫様の御迷惑になつては濟みませぬからなア」

珍彦夫婦は楓の言葉に打ち首肯き、

「ウンウン、成程々々、いや解りました。御苦勞さまでムいます。どうぞ貴女の御神力で悪魔をお取り拂ひ下さるやうにお願い申します」

と夫婦は手を合せ、又もや伏し拜むのであつた。

楓かへで 餘あまり斯かやう様なお話はなしは、誰たれが聞きくか分わかりませぬから、ちつとハンナリと歌うたでも歌うた

ひませうかねえ」

「さうですね、楓かへでさま、一ひとつ歌うたつて下くださいな」

楓かへでは初はつ稚わか姫ひめの言ことば葉はをいなみ兼かね……お恥はづかしながら……と前まへ置おきして、

「人ひとの心こころの底そこ深ふかく

千ち尋ひろの浪なみを分わけ往ゆけば

見みる目めたなびく岩いは蔭かげに

醜みにくき鰐わにの住すめるかな」

初はつ稚わか姫ひめは幾いく度たびも諾うなづきながら、にやりと笑わらひ、

「成なる程ほどねえ。よく出で來きましたよ。妾わらわも腰こし折をれを讀よまして頂いたきませうかねえ。ホホホ

と笑わらひながら、



□ 木の花一度に咲き満つる

天津御國へ誘ひて

常住不斷の法樂を

與へた廻る瑞御靈

誠まことにお恥はづかしい事ことでムごいます。ホホホホ

と梅花ばいくわの露つゆに綻ほころぶ如ごとき小ちひさい唇くちびるから笑えみを漏もらして居ゐる。

此時このとき、門口かどぐちに男をとこの聲こゑとして、

□ 戀こひしや春はるの夜よの

闇やみに立たちたる面影おもかげは

消きえてあとなく吾わが聲こゑの

只木ただこだま靈たまする淋さびしさよ

と歌つて通るものがあつた。

又かはつた男の聲で、

☐ 樂しからずや戀の夢

唯力なく君が手に

抱かるる時吾涙

ほほ笑む眼をぬらすかな

神の光に包まるる

尊き君を偲びつつ

吾等の戀に幸あれと

涙流して祈るかな

悲しき夢のさめし時

涙にしめる目をあげて

ひとり寝る夜の淋しさを  
神の御前にかきくどく

と歌ひながら珍彦館の門口を通り、  
神殿の方へ足音が消えて往く。楓は、  
何とまア誰か知りませぬが、調のよい歌ですこと、ねえ、  
初稚姫さま  
「ほんにさうですなえ。私なんかの歌から見れば、  
比べものになりませぬわ。このお館には風雅人が澤山居られるとみえますなア」  
と斯く話す時、又もや聞ゆる歌の聲、

「櫻の花咲く春の野に  
君とまみゆる嬉しさよ

祠の森にます神の  
守らせ給ふ戀の幸

戀しき人を待ち暮らす

男心の淋しさを

知るや知らずや東雲の

光はさしぬほのぼのと

初稚 「何とまア情緒の深い風流な歌ですなア」

珍彦 「姫様は申すに及ばず、楓其方も氣をつけなくてはなりませんまい。きつと貴

女方二人に心を寄せて居る男があるのでせうよ。何と云つても花の苔の姫様又楓

姫、美しい花には害蟲のつき纏ふものですからなア」

「仰の通りでムいます。妾もあの歌によつて、吾身邊に容易ならざる戀の魔の付

纏うて居る事を悟りました。併しながら決して御心配下さいますな。左様な事に

心を動かすやうな私ではムいませぬ。楓さま、貴女も大丈夫でせう」

「姫様のお言葉の通り、妾は何處までも注意を致して居ります。何分お父さまや

お母さまが、若い娘をもつて居ると云うて非常に心配をして下さるのですもの、  
有難迷惑を感じます、ホホホホ

珍彦「それはさうだらうが、あの高姫さまだつて、あれだけ歳が寄つてから、コ  
テコテと白粉をつけたり白髪を染めたり、日に何度も着物を着かへた揚句、空助  
さまとやらを喰へこんで、夫婦氣取で浮かれてゐらつしやるのですもの。若い娘  
をもつた親はどれだけ氣が揉めるか知れたものぢやありません。これ楓、姫様の  
様なお方なれば大磐石だが、お前はまだ神様の事がよく分らないのだから、兩親  
が心配するのも無理ではありませぬよ、アハハハハ

「あのまアお父さまとしたことわいのう。それ程私に信用が置けませぬか。私だ  
つて道晴別の妹、祠の森の神司珍彦の娘でムいます。必ず必ずお心を惱ませ下さ  
いますな。きつと神様のお名を汚したり、親兄弟の御面を汚すやうなことは致し  
ませぬ。ねえ姫様、貴女私の心をよく御存じでせう」

「御夫婦様、必ず御心配なさいますな。楓様は、本當に見上げたお方でムいます  
よ。きつと妾が保證致します。如何なる魔がさしましても神様がお守り下さる上

は、楓様のお心が極めて堅實に居られますから、何程仇し男が云ひ寄りまして、  
楓さまに取つては鎧袖一觸の感もありませぬ。どうぞお心を惱めないやうにして  
御神務にお盡し下さいませ」

珍彦「ハイ有難う、ようまア云つて下さいました」

静子「そのお言葉を承はり、私も安心を致しました。ああ惟神靈幸倍坐世  
と合掌する。」

斯く話す折しも、又もや門口に戀の擽となりし人の歌ふ聲、隔ての戸をすかし  
て聞え來る。

「ひそびそと銀の雨

絶間もなしに降りそそぐ

うらぶれし叢のなげかひ

ああかかる日は

一入痛みも出づれ

毒どくの爪つめをもて  
永久とこしへに癒いえ難がたく  
刻ほりつけられし  
胸むねの痛いた手でよ〇

と哀あはれな聲せ調てうで聞きえて來くる。  
又また續つづいて、

静しづかに静しづかに瞳ひとみをつぶつて  
目めにも見みえない或ある物ものを  
見みるとき吾われは銀ぎん色いろの  
夢ゆめの中うちにぞ浸ひたり入いる  
素す裸だ體かの人間にんげんは  
温あたたかい暖あたたかい  
桃もも色いろの雰ふん圍あき氣きに包つつまれながら

歌うたひつつ踊をどる

心こころを蕩とろかすやうな

メロデーメロデーが流ながれ

總すべてのものが

やすらかに息いきづく

吾われは夢ゆめの爲ために働はたらき

夢ゆめによつて働はたらく

そして又また

夢ゆめによつて、はぐくまれてゆく』

斯かかる所ところへ慌あわたしくやつて來きたのは、受付うけつけのイル、ハルの兩りやうにん人であつた。遠慮會釋えんりよゑしやく

もなく門かどぐち口の戸とを押おし開ひらき、

イル『もし珍彦様うづひこさま、大變たいへんな事ことが出來できました。どうぞ來きて下ください、タタ大變たいへんでムごい

ます』



「あわただ  
慌しき其言葉、大變とは何で△るかな」

ハル「ハイ、タタタ高姫様が  
大變な事で△います。どうぞ来て下さい。到底私等の  
挺には合ひませぬから」

静子「何か高姫様が御機嫌でも損ねて御立腹して△るのかな」

初稚姫は、

「イエイエさうぢや△いませぬ。玉茸を取らむとして梟鳥に目をこつかれ、大杉  
の梢から顛落遊ばし、腰の骨を些し挫かれたのでせう。決して御心配なさいませ  
な、直に癒りませうから」

イル「もしもし初稚姫様、貴女そんな平氣な顔してよう居られますなあ。義理あ  
るお母さまぢやありませんか、サア早くお出でなさいませ。お父さまはお怪我を  
なさるなり、お母さまは木から落ちて苦しんで△るなり、何どころぢやあります  
まい」

「ハイ直に参りますから、お母さまにさう仰有つて下さい。これスマートや、早  
く何處かへお隠れ」

と云ひながら、初稚姫は倉皇として高姫の危難を救ふべく館を立ち出で、大杉の許へと歩を急いだ。高姫は苦しげな息をつきながら、

「アア、其方は初稚だつたか、よう来て下さつた。お母さまは、つひお父さまの病氣を直したいばかりに玉茸を取りに登つてこんな目に遇つたのだよ。お父さまは誰にも知れないやうにして取つて呉れと仰有つたのだが、こんな不調法をして人に見つけられたから、もう利かう筈がない。どうぞ私には構はず、あの森の木の下にゐらつしやるのだから、早く行つて介抱して上げて下さい。私は日出神の御守護があるから心配は要りませぬ。サア早く往つて上げて下さい、氣が氣ぢやありませぬから」

「さうだと云つてお母さまの危難を見捨てて、これがどうして往けませうか。一旦親子の縁を結んだ上からは、そんな水臭い事を仰有らずに、どうぞ介抱さして下さい、これが貴女に對する孝行のし初めですから」

と、高姫が妖幻坊に云つた言葉其儘を應用して居る。

「エイ、お前は親の云ふ事を聞かないのかい、さうであらう。お腹を痛めた子で

ないから恩も義理もありませぬわい。聞いて下さらないのも仕方ありません。もう諦めます」

「お母さま、それでは済みませぬが、お父さまの介抱に参ります。不孝の奴とお卑みなきやうにお願い申します。これ、ハルさま、イルさま、どうぞお母さまの介抱を頼みますよ。お母さま左様なら」

と云ひながら此場を立ち去つた。高姫は相變らず苦悶の息を漏らして居る。

(大正一二・一・二〇 舊一一・一二・四 加藤明子録)

## 第八章 常世闇(一三〇二)

大抵の人間は、高原に向つて其内分が完全に開けてゐない。それ故に大神は精霊を経て人間を統制し給ふのが普通である。何となれば、人間は自然愛と地獄愛とより生み出す所の地獄界の諸々の罪惡の間に生まれ出でて、惟神即ち神的順序

に背反せる情態に居るが故である。されど一旦人間と生れた者は、何うしても惟神の順序の内に復活歸正すべき必要がある。而して此復活歸正の道は、間接に精靈を通さなくては到底成就し難いものである。併しながら此物語の主人公たる初稚姫の如き神人ならば、最初より高天原の神的順序に依る所の諸々の善徳の中に生れ出でたるが故に、決して精靈を経て復活歸正する必要はない。神人和合の妙境に達したる場合の人間は、精靈なるものを經て大神の統制し給ふ所とならず、順序即ち惟神の攝理により、大神の直接内流に統制さるるのである。

大神より來る直接内流は、神の神的人格より發して人間の意性中に入り、之より其智性に入り、斯くて其善に入り又其善を經て眞に入る。眞に入るとは要するに愛に入るといふ事である。此愛を經て後聖き信に入る。故にこの内流の愛なき信に入り、又善のなき眞に入り、又意思よりせざる所の智性に入ることはないものである。故に初稚姫の如きは清淨無垢の神的人格者とも云ふべき者なれば、その思ふ所、云ふ所、行ふ所は、一として神の大御心に合一せないものはないのである。斯かる神人を稱して眞の生神と云ふのである。

天人及び精靈は何故に人間と和合する事斯の如く密接にして、人間に所屬せる一切のものを、彼等自身の物の如く思ふ理由は、人間なるものは靈界と現界との和合機關にして頗る密着の間に居り、殆ど兩者を一つの物と看做し得べきが故である。されど現代の人間は高天原より物欲の爲に自然に其内分を閉し、大神のまします高天原と遠く離るるに至つたが故に、大神は茲に一つの經綸を行はせ給ひ、天人と精靈とをして各個の人間と共に居らしめ給ひ、天人即ち本守護神及び精靈正守護神を経て人間を統制する方法を執らせ給ふ事となつたのである。

高姫の身體に侵入したる精靈、中にも最も兇惡なる彼兇靈は、常に高姫と言語を交換してゐるものの、その實高姫が人間なる事を實際に信じてゐないのである。高姫の身體は即ち自分の肉體と固く信じてゐるのである。故に高姫が精靈に對して色々と談判をすると雖も、其實精靈の意思では他に目には見えないけれども、高姫なる精靈があつて、外部より自分に向つて談話の交換をしてゐる様に思つて居るのである。又精靈の方に於ては、高姫の肉體は決して何も知つて居ない、知つてゐるのは只精靈自身の知識によるものと思ひ、従つて高姫が知つてゐる所の

一切の事物は、皆自分の所爲と信じ居るものである。併しながら高姫が餘りに…  
…俺の肉體にお前は巢喰つて居るのだ…と、精靈に向つて屢告ぐるによつて、  
彼に憑依せる精靈即ち兇靈は、うすうすながら自分以外に高姫といふ一種異様の  
動物の肉體に這入つて居るのではあるまいか…位に感じだしたのである。高姫  
は又精靈の言ふ所、知る所を、自分の言ふ所、知る所と思惟し、而して精靈が、  
自分の肉體は神界經綸の因縁のある機關として特別に造られたのだから、正守護  
神や副守護神が宿を借りに來て居るものと信じて居るのである。而して面白い事  
には、高姫の體内に居る精靈は、高姫の記憶と想念を基としていろいと支離滅  
裂な豫言をしたり、筆先を書いたりしながら、其不合理にして虚偽に充てる事を  
自覺せず、凡てを善と信じ、眞理と固く信じてゐるのだから、自分が惡神だと云  
つたり、或は惡を企まうなどと言つてゐながらも、決して眞の惡ではない、實は  
自分が或自己以外の何物かと擲掬つて居るやうな氣であるのだから不思議である。  
又高姫自身も、少し許り惡の行り方ではあるまいかと思つて見たり、或時は…  
イヤイヤ決して自分の思ふ事、行ふ所は微塵も惡がない、只譯の分らぬ人間の目

から、神格に充されたる吾々の言行を觀察するのだから惡に見えるだらう。眞の神は必ず自分が神の爲道の爲に千騎一騎の活動してゐる事をキツトお褒め遊ばすだらう。神に叶へるものとして、神柱とお使ひ遊ばしてゐられるのであらう。譯の分らぬ現界の人間が、假令惡魔と言はうとも、そんな事は構つてゐられない、吾がなす業は神のみぞ知り給ふ……といふ様な冷靜な態度を構へ、如何なる眞の教示も、眞理も、自己以外に説くものはない、又行ふ眞の人間もないのだから、至善至愛の標本を天下に示し、千座の置戸を負うて萬民の罪惡を救うてやらねばならぬ。自分は神の遣はし給ふ犠牲者、救世主だと信じて居るのだから始末に了へぬのである。高姫のみならず、世の中に雨後の筍の如く、ムクムクと簇生する自稱豫言者、自稱救世主なども、すべては高姫に類したものなることは言ふ迄もない事である。

又動物は、精靈界よりする所の一般の内流の統制する所となるものである、蓋し彼等動物の生涯は宇宙本來の順序中に住する者なるが故に、動物はすべて理性を有せないものである。理性なきが故に神的順序に背戻し、又之を破壊すること

をなし得ないのである。人間と動物の異なる處は此處にあるのである。併しスマー  
トの如き鋭敏なる靈獸は其精靈が殆ど人間の如く、且本來の純朴なる精神に人間  
と同様に理性をも有するが故に、よく神人の意思を洞察し、忠僕の如くに仕ふる  
事を得たのである。動物はすべて人間の有する精靈の内流を受けて活動すること  
がある。されども普通の動物は其靈魂に理性を缺くが故に、初稚姫の如き地上の  
天人の内流を受くることは出來得ないものである。併し此スマートは肉體は動物  
なれども、神より特別の方法に依つて、即ち化相の法によつて、初稚姫の身邊を  
守るに必要なべく現じ給うたからである。初稚姫も此消息をよく感知してゐる  
から、決して普通の犬として遇せないのである。只神が化相に仍つて、其神格の  
一部を現はし給ひしものなることを知るが故に、姉妹の如く下僕の如く、或時は  
朋友の如くに和睦親愛し得るのである。普通の人間が動物と和合した時は、全く  
畜生道に墮落した場合である。又人間が靈肉脱離の後、地獄界及び精靈界に在る  
時、現世に在る吾敵人に對し、危害を加へむとするの念慮強き時は、動物の精靈  
に和合して其怨恨を晴さむとするものである。故に生靈又は死靈に憑依された人



間には、必ず動物の靈が相伴うてゐるものである。是は或大病に苦しんでゐる人間を鎮魂し、又は神言を奏上して之を調べる時、必ず人間の生靈又は死靈の姓名を名乗るものである。而して熟練したる審神者が之を厳しく責立つる時は、遂に人靈と動物靈と和合して其人靈の先驅者となつたことを自白するものである。狐狸や蛇、蟻、犬、猫其他の動物の靈が人間に来る時は、人間の記憶及び想念中に入つて其肉體の口舌を使用し、或は自分が驅使され合一されてゐる人靈の想念をかつて、人間の如く言語を發するに至るものである。靈界の消息に暗き學者は、狐狸其他の動物が人間に憑つて、人語を用ふるなどはあり得べからざる事である、斯の如き事を信ずる者は太古未開の野蠻人である、斯の如く人文の發達したる現代に於て尚動物が人間に憑依して人語を發するなどの不合理を信ずるは實に癡狂癡呆の極みであると嘲笑するは、現代の半可通的學者の言説である。何ぞ知らむ、彼等こそ靈界より見て實に憐れむべき頑愚者にして、且癡狂者となつてゐるのである。自分の眼が自分で見られ又自分の頭部や頸部、背部などが自身に於て見ることが得ない人間が、何うして靈界の幽玄微妙なる眞理眞相が分るべき道理があ

らう。須らく人間は神の前に拜跪し、其迂愚と不明と驕慢とを鳴謝すべきものである。

動物例へば犬、猫、鹿、牛、馬などは、惟神即ち神的順序に従つて交尾期なども一定し、決して人間の如く、何時なしに發情をするなどの自墮落な事はないものである。又植物なども靈界と自然界の順序に順應して、惟神的に時を定めて花開き實を結び、嫩芽を生じ落葉するものであつて、實に其順序を誤らない事は吾々人間の到底足許へもよれない程、秩序整然たるものである。而して犬は犬、猫は猫、馬は馬と各天稟の特性を發揮し、よく其境遇に適應せる本性を發揮するものである。又植物などは各其特性を備へ、自己特有の甘さ、辛さ、酸さ、苦さ等の本能を發揮し、幾萬年の昔より其味を變へないのである。要するに芋は茄子の味に代る事を得ない、又唐辛は蜜柑の味に決してなるものでない。又同じ畑に植付けられ、同じ地味を吸収しながらも、依然として西瓜は西瓜の味、唐辛は唐辛の味、栗は栗、柿は柿の特有の形體及び味を有つて居るものである。而して、此特

有性はすべて靈的より來り、其成長繁茂の度合は自然界の光熱や土地の肥瘦等に依るものである。然るに人間は理性なるものを有するが故に少々土地が變つた時又は氣候の激變したる土地に移住する時は、忽ち其意思を變移し、十年も外國へ行つて來た者は、其思想全く外人と同様になつて了ふものである。これが人間と動物又は植物と異なる點である。斯の如く人間は理性によつて自由に思想竝に身體の色迄も多少變ずる便宜あると共に、又惡に移り易く墮落し易きものである。故に動物植物に對しては大神は決して教を垂れ給ふ面倒もなく、極めて安心遊ばし給へども、人間は到底動物の如く神的順序を守らない惡の性を帯びてゐるが故に、特に豫言者を下し、天的順序に従ふ事を教へ給うたのである。併しながら人間に善惡兩方面の世界が開かれてあるが故に、又一方から言へば神の機關たる事を得るのである。願はくは吾々人間は神を愛し神を信じ、而して神に愛せられ、神の生宮として大神の天地創造の御用に立ちたいものである。

却説高姫が玉茸を採らむとしてソツと大杉の枝に登り、梟にクワンクワンと鋭き嘴にて兩眼をコツかれ、アツと叫んで地上に盲猿の如く顛落し、腰骨を打つて

堪へ難き苦痛に呻吟しながら、イル、イク、サールなどに介抱され、漸くにして其居間に運ばれた。されど高姫は元來剛の者なれば少々腰骨の歪んだ位は苦にする様な女ではなかつた。そして容易に痛いとか苦しいとか云ふ様な事は、其性質上絶対に口外せない。併しながら兩眼をこつかれ、眼瞼忽ち充血して腫れ塞がり、光明を見る事を得ざるに至りしには、流石の高姫も餘程迷惑をしたのである。

イルは、

「サア、高姫さま、此處が貴女のお居間ですよ。マアゆつくり本復するまでお休みなさいませ。イル、イク、サール、ハル、テルのやうな屈強な男も居りますから、どこ迄もお世話を致します、どうぞ安心して使つて下さいや」

「お前はイルかな、イヤ御親切に有難う。モウスうなつては目が腫上つて、一寸も見えないのだから、お前達のお世話になるより仕方がない。やがて此腫が引いたら目も見えるだらうから、どうぞすまないが二三日介抱して下さい。ああ何とした不仕合せな事だらうなア。折も折とて空助さまは躓いて倒れ、眉間を破つて苦しむでゝるなり、其痛みを直したさに、玉茸を採りに上つて、又もや私は大

杉に棲んで居つた天狗の奴に兩眼をコツかれ、木からおちた猿のやうなみじめな目に遇ふとは……ああ神様も何うしてムつたのだらうかな、義理天上さまも餘りだ……」

と慨然として悲痛の涙をこぼしてゐる。

サール「高姫さま、本當に不思議な事ですな。玉國別さまも此河鹿峠で猿の奴に兩眼を破られて、永らく御難儀を遊ばしましたが、到頭御神徳を頂いて全快遊ばし、機嫌よく宣傳の旅に出られた後へ貴女がお出でになり、又もや天狗に目をこつかれて同じ眼病に悩むとは、何といふ不思議な事でムいませう。何か神様にお氣障でもあるのぢやムいますまいかな」

「ああさうだなア。玉國別さまと云ひ、高姫と云ひ、頭に夕の字のつく者は能く目に祟られるとみえる。これから神様にお詫を申して、一日も早く此目を直して頂かぬ事には、かう世の中が眞暗闇では仕方がない。一時も早く天の岩戸開きをして、元の如く明るい光明世界に捻ぢ直したいものだなア、ああ惟神靈幸はへませ」

イクは、

「高姫さま、あなた今、暗い世界と云ひましたね、ソラ貴女の目が塞がつてるからですよ。日天様が嚇々として輝いてゐらつしやるのですから、決して御心配にや及びませぬ。のうハルよ、さうぢやないか」

「ホホホホ、お前も分らぬ男だなア。此世の中が暗がりだと言つたのは人間の心が眞暗がりだと云つたのだよ。決して肉體で見える世界が暗くなつたと云ふのぢやない」

「それでも、何ですよ、肉體で見える世界でも、時々眞暗になりますからなア」

「きまつた事だよ。夜になれば眞暗になるのは當前だ、お前も割とは馬鹿だなア」  
「何とマア目も見えぬ態をして居つて、剛情な婆アさまだな。まだ悪口をついてゐる。コレ高姫さま、私は夜もある代り、又新しい日天様を毎日拜んで光明世界もありますよ。お前さまはモウ斯うなつちや、常夜行く暗の世界に彷徨うてゐるやうなものだ。夜ばかりだなア」

サールはしたり顔に、

「ソラさうだとも、ヨルの受付を邪魔物扱ひにしてムつたのぢやもの、其報いが忽ち到来して、自分が、ヨルの世界へお這入りなさつたのだ。どうも自業自得だから仕方がないワ。何程お氣の毒でも、吾々が如何ともする譯には行かないワ」

テルは、

「高姫さま、貴女は日出神の義理天上さまが御守護してゐるのだから、夜でも決して暗いこたアありますまい。何と云つても義理天上日出神様の生宮だ、つまりいへば日出神御自身だから、見えるでせうなア。今日は殊更に、トコ【ギリ】、天上の日出神さまは御機嫌よく嚇々の光明を輝かしてゐられますからなア」

「ソラさうだとも、肉の目が何程塞がつて居つたとて、日出神の生宮だもの……なん……にもかもよく見えすいてゐるのだ。本當に神様の御神力といふものは偉いものだらう」

テルは、

「高姫さま、そんなら吾々は心配する必要はありません。私は又お目が見えないと思つて、何くれとお世話を上げてねばなるまいと思つてゐたが、お目が見

えるとあらば殊更に氣をつけて、お世話をして上げる心要もムいますまい。おい、イク、イル、ハル、サール、お前等も安心せい。流石は高姫さまだ、目をふさいで居つても、よく見るといのう、イツヒヒヒヒヒ』  
と小さく笑ひ、腮をしゃくり、肩をゆすつて見せる。四人は一度にふき出し、

「プツプツク　ワツハハハハハ」

「これ、お前等は私がこれ程負傷をして困つてゐるのに、それ程面白いのかなア。不人情者奴が。待つてゐなさい、今に初稚姫が歸つて來たら、告げて上げるから

……」

テル「オイ、形勢不穩になつて來たぞ。地震雷火の雨の勃發せない間に退却々々、全體進め、一二三」

と云ひながら、ドヤドヤと長廊下を傳ひ、受付の方面を指して走り行く。

イルは只一人次の間に身をかくし、高姫の容子を考へて居た。これは決して悪意ではない。もしも高姫が一人で困つた時には助けてやらうといふ親切な考へからであつた。忽ちウーといふ唸り聲が聞えて來た。イルは何物ならむとソツと襖



を開けて高姫の居間を覗き込んだ。どこから来たか締め切つてある座敷へ、スマー  
トが又ツと現はれ、高姫の前三尺許り隔てて、チヨコナンと坐つてゐる。カラコ  
口と下駄の足音が近づいて来る。これは云ふ迄もなく初稚姫が森林内を暫く逍遙  
して歸つて来たのである。初稚姫は元より空助の妖幻坊なることを知つてゐたか  
ら、高姫の依頼によつて、正直に空助を探しに行くやうな馬鹿ではない。されど  
高姫の氣休めの爲に暫くの間、森林内を逍遙して歸つて来たのである。

(大正一二・一・二一 舊一一・一二・五 松村眞澄録)

## 第九章 眞理方便(一三〇三)

高姫は初稚姫の歸り来る足音を聞き付け、待ち遠しげに、

『初稚さま……ではないかな』

初稚姫は、

「ハイ」

と答へ、スツと障子をあげ、見れば高姫は顔面全部、干瓢の様にふくれ上り、ど  
こが目だか鼻だか判別し難き迄に相好變じ、丸つきり妖怪の如くであつた。而し  
て腫れた目は額の方に轉宅し、鼻は無遠慮に靈衣の外に突出し、恰も雲を帯にし  
た山容の正しからざる高山のやうに見えてゐる。唇は夜着の裾のやうに厚くふく  
れ上り、半ば爛熟した熟柿の様に薄つぺらい皮膚が厭らしう、赤く且紫を帯びて  
幽かに光つてゐる。初稚姫はハツと驚き、早速に言葉も出なかつた。而して心に  
思ふ様……ああ何とした恐ろしい顔だらう、丸で地獄に棲んでゐる怪物の様だ。  
高姫さまの内的生涯の發露かも分らない。否々これが事實だ、ホンに不愼なもの  
だなア。何とかして早く助けて上げねばならないが、何と云つても罪業の深い方  
だから……と心に嘯きながら、キチンと足駄を上り口に向ふむけに揃へて、ハン  
ケチにてポンポンと塵うち拂ひ、靜に高姫の側に寄り添ひながら、さも同情ある  
聲にて、

「お母さま、大變なお怪我をなさいましたね。私が力一杯介抱をさして頂きます

から、何卒御安心して下さいませ」

と云ひつつ、何時の間に來たのかと訝かりながら、スマートの頭を撫でてゐる。

スマートは嬉しげに、尾を打振り、座敷をキリキリと廻り始めた。

高姫は歪んだ口の横の方から、半ば破損した鞆のやうな鼻聲交りの聲で、

「ハイ御親切に有難うムいます。そして空助さまはまだ歸つてムらぬかな。御病

氣の具合はチツと宜しいかな。折も折とて二人の親が、一時に此通り大怪我をし

たのだから、お前もさぞ心配だらう。偉いお骨を折らします」

初稚姫は、空助が居なかつたと言へば、高姫が大變に失望落膽するだらう、目

が見えないのを幸ひ、ここは何とか氣休めを言つておかねばなるまいと決心し、

「ハイ、お父さまは谷川の側に休んでおられました、私がそこへ参りまして」

「お父さまお父さま……と聲をかけようと思つれば、ムツクと起上り、さも愉快相

な顔をして、……ああお前は初稚姫か、ようマア來てくれた。わしは思はぬ怪我

をして、こんな不細工な顔をお前に見らるるのには、親として本當に恥かしい。顔

は瓢のやうにふくれ上り、目鼻口の位置も、俄の地異轉變で生れてから行つた事

もない地方へ轉宅し、口も鼻も殆ど塞がつてかやうな鼻聲より出はせぬが、併しなからようマア來て下さつた……と親が手に手を合して拜むのですよ」

「ああさうだつたかな、それは何よりも結構なことだ。空助さまも餘り我が強いので、見せしめの爲に神界から怪我をさせなさつたのだる。これでチツとは優しうお成りなさるだらうから、夫婦が病氣全快の上は層一層御神業に、家内和合して盡すことが出来るでせう、ああ惟神靈幸倍坐世」

「お母さま、お鹽梅はどうでムいますか、御氣分に障るでせうな」

「ナアニこれしきの怪我に氣分が悪いの、何うのと云ふやうなことではないが、チツと許り目が見えにくいので、不便を感じることに一通りでムいませぬ。併しながら神様のお蔭でホンノリとそこらが見えるやうだ。此鹽梅なれば、やがて全快するでせう」

「どうぞ、何でも早く癒つて頂きたいものでムいますな、何といふ私は運の悪いものでせう。お父さまといひ、折角仁慈深きお母さまが出来て、ヤレ嬉しやと喜ぶ間もなく、かやうなキツイお怪我を遊ばし、これが何うして忍ばれませうか。

身も世もあられぬ思ひが致します

「どうもお前さまの御親切、假令死んでも忘れませぬぞや。併しながら私はかうして結構な畳の上に坐り、暖かい火鉢の前に手をあぶりもつて養生をさして戴いてゐるが、空助さまは草の上に横たはつてゐるのだから、何うしても私の心が治まりませぬ。何卒初稚さま、珍彦さまに言ひつけて空助さまをここへ擔いで来て下さいな」

「左様でゝいますな。私が何程お勧め致しましても、中々容易に歸らうとは致しません。ヤツパリ、スマートが怖いとみえます」

「空助さまは決して犬が怖いのではない、犬がお嫌ひなのだよ」  
「怖いものは、つひ嫌ひになるものですからなア、併しお母さまの仰せに従ひ、

これから珍彦さまに頼んで來ませう」

「ああ何卒さうして下さい。夫婦枕を並べて養生をさして頂けば、こんな結構な事はありませぬわ」

「それなら、頑固な父でゝいますけれど、娘の私が行つても聞きませぬから、珍

彦さまに御願申して、此處へ歸つて來るやうにして貰ひませう。さうすれば私が御兩親の眞中にすわつて、御介抱を申上げますわねえ。夜分に寝る時は、お二人さまの中に挟まつて川と云ふ字に寝ませうね。併しお母アさま、私が此處を出て行きますとお一人になりますますが、どう致しませうか」

「さうだなア、誰か呼んで貰ひたいものだ」

「へー、何ぞ御用でムいますか」

とイルは初稚姫の顔がみたさに、呼びもせぬ先に、慌てて襖をスツと開き、次の間からニユツと首をつき出した。

「アレまア、イルさま、私、餘り突然なので、ビックリしたのよ」

「ハイ、別にビックリ遊ばすには及ばぬぢやムいませぬか。目元涼しく鼻筋通り、口元の締つた軍人上りの此イルですもの。高姫さまのやうな、そんなボテ南瓜みたやうな、化物じみたお顔を御覽になるよりも、イルの顔を御覽になつた方が餘程御愉快でせう、エへへへへへ」

「陀羅尼助を嘗めた後で三盆白をなめると、いいかげんに調和の取れるものです」

からね」

「コレ、お前はイルぢやないか。わしの顔を化物と言うたな、そして大事の大事の娘に、此親の許しも受けずに、若い者が言葉をかはずといふ事があるものかいなア。未來の聖人が言はしやつただる……男女七歳にして席を同じうせず……とかや、然るに何ぞや、呼びもせないのに、又ツケリと若い者の居間へやつて來るとは、何か之には譯がなくてはならぬ。お前は大方初稚にスエートハートしてゐるのだろ。空助さまや私が病氣だと思つて、娘に無體な事でも言はうものなら、承知しませぬぞや」

「メツソーな、誰が左様な事考へて居りますものか。そんな下劣な人格者だと思つて貰ひましては、エへへへ聊か此イルも迷惑千萬でムいますよ。實の所は、イク、サール、ハル、テルの奴、餘り剛情な婆アさまだから構うてやるな、放つとけ放つとけとけと云つて、廊下を走つて表へ行つて了ひました。それにも拘らず、拙者は貴女のお目が不自由なと存じ次の間に控へて、御用があらば早速の間に合ふやうと、此處に行儀よく控へて居つたのです。お目が見えぬのでお疑ひも無理

とは申しませぬが、さう安い人間と見られちゃ、イルの男前が下りますからなア

「どないでも理屈はつくものだ。口といふものは調法なものだから、鷺を鳥と、鳥を鷺と言ひくるめるのは現代人の特色だ。お前さまのいふ事を強ち否定するのははないけれど、マア十分の一位認めておきませうかな」

「認めると仰有つても、そんな目で分りますかな」

「イルさま、お母アさまは御病氣なのだから、何卒擲掬つて、お氣を揉ませないやうにして下さいねえ」

「ハイ、承知致しました。外ならぬ貴女のお言葉でございますから、一も二もなく服従致します。併しながら初稚姫様、貴女本當に此高姫さまを、お母アさまと思つてゐるのですか」

「さうですとも、父の世話をして下さる高姫さまだもの、お母アさまに間違ひありませんね」

「へーエツ、何とマア氣のよいお方ですな。ヤツパリ、姿のいい人は心まで美しいかな。ヤもう實に感心致しました。私もこれから貴女の眞心に倣ひまして、ど



つかで親を捜して、孝行してみたいものでございます。そして天下第一の孝行者と名を揚げたいものでございます」

「貴方は孝行を世間に知られたいと思ひますか、それでは眞の孝ぢやありませんまい。自己を廣告するための手段でせう。要するに自己愛で、偽善者の好んで行ふべき手段でムいますよ。眞の孝行は決して人に知らるる事を望むものぢやありません。本當に心の底からこもつた情愛でなければ、到底行へるものぢやムいませぬ。」

「成程、イヤもうズンと合點が参りました。併し初稚姫様、貴女は空助様に對する場合と、高姫様に對する場合は、愛の情動に於て幾分かの相違があるでせうなア」

「さうでムいます。何程高姫様を本當のお母ア様だと思つても、ヤツパリ肉身の父に對する時の方が、何とはなしに愛情が深い様な心持が致します」

「成程、貴女は正直なお方だ。世間の奴は自分の親より義理の親が大切だと、心にもない詐りをいひ、又世間の繼母は、義理の子だから吾子よりも大切にしないで

てはならぬ、何だか知らぬが此子は自分の生んだ子よりも可愛で仕方がないなどと、人前で言ひながら、蔭へまはつて、抓つたり叩いたり虐待するものですが、貴女は實に天真爛漫虚偽もなく一點の陰影もなき水晶玉の大聖人でゐます。私も今日まで随分澤山の人につき合つて來ましたが、貴女のやうな方は、未だ一度も會つたことはゝいませぬ。本當に神様でゝいますなア』

と切りに感歎の聲を漏らしてゐる。

「イルさま、お母さまが大變お急になつてゐるのだから、御心の休まるやうに、早くお父さまを呼んで來て下さいませ。珍彦さまにお頼み申せば、キツと其様に取計らつて下さるでせう」

イルは、

「ハイ、承知致しました」と表へ駆け出した。

「コレ初稚さまや、何だかガサガサと騒がしい音がするぢやありませんか、誰か又貴女の美貌に心をとるか、悪性男がガサガサと、晝這にでも來てゐるのぢや

あるまいかな。偉う不思議な音が致しますぞや」

「別に何も居りませぬが、大方お母さまのお頭が痛むので、さうお感じ遊ばすのでせう」

「ああさう聞けばさうかも知れませぬ。何分頭を金槌でこつかれる程痛く感ずるのだからなア」

「お母さま、少し按摩をさして戴きませうか」

「イヤどうぞお構ひ下さいませぬ。何と云つても、血肉を分けた親の方が、愛情の程度が違ふさうですからなア」

と意地悪いことを姑流にほざき出した。

「餘り正直な事を申しまして、お氣を揉ませましたねえ。併し此初稚は、決して薄情な女でムいませぬから、さう仰有らずに按摩をさして下さいませな」

高姫は一寸すねたやうな口吻で、體の自由も利かぬ癖に、【ろく】に舌もまはらない口から、

「ハイ、有難う、何れ又お頼み申します。まだお前さまに撫でて貰ふ所まで耄碌

はしてゐないのだから、御縁があつたら頼みますワ。イ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ」

「お母アさま、どうぞ立腹して下さいませ。何分年が行かないものですか、お氣にさはる事を申しまして……どうぞ神直日大直日に見直し聞直し下さいませ」

「かくしても隠されぬのは心の色、言靈にチャンと現はれて居りますぞや。ああ、ヤツパリ自分の腹を痛めた子でなうては氣が術無うて、お世話になる譯には行かないワ、虚偽と阿諛諂佞の流行する世の中だから、何程キレイなシヤツ面をして居つても、心は豺狼に等しき人物ばかりだ」

と妙に當てこすり、焼糞になり、惡垂口を叩き始めた。初稚姫は眞心より高姫の境遇を憐れみ、何とかして靈肉共に完全に助けてやりたいものと思ふより外に何もなかつたのである。そして病氣中はなるべく氣を揉ませないやう、腹を立てさせないやう、能ふ限りの慰安を與へたいものと眞心に念じてゐたのである。されど根性のひがみ切つた高姫は、初稚姫の親切を汲み取る事は出来なかつた。初稚姫はイルに質問された時、高姫の喜ぶ様に言葉を飾つて、一時なりとも、安心させたいと、瞬間に心に閃いたけれども、見えすいた嘘を云ふことは到底初稚姫に

は出来なかつた。苟くも宣傳使たるものが、心にもなき飾り言葉を用ふる事は出来なない。それ故正直に愛の程度に關し、少しばかり差等のある事を言つて聞かしたのが、無理解な高姫に恨まるる種となつたのは是非もない事である。それだと言つて、初稚姫も高姫を改心させる爲には其時相應の方便を使つて居たことは前記の物語によつても散見する所である。併し教義を説く時に於ては、初稚姫は儼然として一步も假借せないのである。すべて眞理といふものは磐石の如く鐵棒の如く、屈曲自在ならしむるを得ざるが故である。もし宣傳使にして眞理迄も曲げて方便を亂用せむか、忽ち靈界及び現界の秩序は茲に紊亂し、神の神格を破壊する事を恐るるが故である。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・二一 舊一一・一二・五 松村眞澄録)

### 第三篇

### 神意と人情

第一〇章 据置貯金（一三〇四）

祠の森には誰云ふとなく獅子、虎兩性の怪物が現はれ、人間に化けてゐる。その人間が祠の森の主管者だから、ウツカリ詣らうものなら喰はれて了ふと云ふ評判がパツと立つた。それ故氣の弱い連中は忽ち恐怖心かられて、ここ二三日は誰も寄りつかなかつた。受付も事務室も極めて閑散である。只相變らず忙しいのは珍彦の神司のみである。珍彦は至誠神に仕へ、參拜者の有無に拘はらず、朝と晩とのお給仕を忠實に行つてゐる。イル、イク、サール、ハル、テルの五人は、受付も事務室もほつたらかしにして、瓢と鯛などを携へ、祠の森の最も風景佳き日當りのよい場所を選んで、頻りに酒を飲み始めた。

イク、「オイ、御連中、何とまア祠の森も淋しくなつたぢやないか。エー、空助さまが怪我をしたとか云つて踪跡をくらまし、あの惡たれ婆さまの義理天上さまは杉の木へ天上して顛倒し、腰骨をしたたか打ち、梟鳥の奴に兩眼をこつかれて顔面膨れ上り、丸でお化の様になつて了つたぢやないか。あんまり嫌らしくなつて

此神聖なお館も妖怪窟の様な心持になつて来て、ジツクリとして居られないぢやないか。酒でも飲んで元氣をつけなくちやアやりきれないからな。おいイル、貴様は義理天上さまのお世話をして居たぢやないか。随分氣分が悪かつただらうな。何、そんな事に屁古垂れるイルさまぢやないわ。世の中は善惡相混じ美醜互に相交はると云ふからな。一方には醜の醜、惡の惡なる義理天上さまの生宮の顔を見ながら、又一方には善の善、美の美なる天女のやうな初稚姫様の紅顔麗容を拜してゐるのだから、相當に調和がとれるよ。美しいものばかり見てゐると、何時の間にか瞳孔の奴、増長しやがつて美しいものも美しくない様になるものだが、何と云つても極端な妖怪的醜面と又極端な芙蓉の顔月の眉、雪の肌、日月の眼、花の姿の初稚姫様を見返つた時には其反動力とでも云はうか、其美は益々美に見え善は益々善と映ずるのだ。それだから辛抱が出来たものだよ。いや結句、辛抱どころか、得も云はれぬ歡喜悅樂の氣分が漂ふのだ。イツヒヒヒヒヒ

サール「おい、イル、それ程高姫さまの側が結構なら、何故朝から晩までくつついてゐないのだ。俺等の様な醜面の處へ来て、口賤しい酒を喰はなくても、初稚

姫様の顔を見て恍惚として心魂を蕩かし、酔うてゐたら宜いぢやないか」

「それもさうぢやが、初稚姫様が「あたえ、一人でお世話を致しますから、イルさまは何卒休んで頂戴ね、又御用がムりましたらお願い致しますから」と、それは同情のこもつた此イルさまに……へへへへへ、一寸細い目を向けて優しい聲で仰有るのだもの、なんぼ頑固の俺だとして、君命もだし難く退却仕ると云ふことになつて、暫く差控へてゐるのだ」

テル「ハハハハハ、馬鹿だな。本當に貴様はお目出度い奴だよ。態よい辭令で肱鐵をかまされよつたのだ。貴様の面を水鏡で一寸見て見よ、薩張顔の詰がぬけて了つてるぢやないか」

「ナーニ吐しやがるのだい。唐變木の貴様等に分つて堪るものかい。初稚姫様と俺との關係を貴様知つてるのか。以心傳心、不言不語の間に於て萬世不易の愛的連鎖が結ばれてあるのだ。誠に濟みませぬな、エツへへへへ。エー、涎の奴、イルさまの許可も無くして勝手氣儘に出ると云ふ事があるかい。何程俺がデレルと云うても、貴様までが勝手にデレルとはチツト越權だぞ。ウツフフフフ」



と云ひながら牛の様な粘液性に富んだ細い涎を手繰つてゐる。

テル「ハハハハハ、夢でも見てゐやがつたな。貴様と姫様との關係と云ふのは、只主と僕との關係だ。到底夫婦なんぞと、そんな事は柄にないわ」

イル「實の所は、初稚姫様の美貌を幻になつて眺めてゐたものだから、義理天上さまの命令も耳に這入らず、ポカンとして居つた所を、高姫の奴目も見えない癖に、ポカンとやりやがつたのだ」

「愈三段目になつて來たな。さア一杯グツと飲んで、正念場を聞かして貰はうかい」

「酒の一杯や二杯では、神祕の鍵は渡す事は出来ないわ。此上話して聞かした處で、下根のお前等、所謂八衢人間には到底解し得ないから、まア云はぬが花として筐底深く秘めて置かう。開けて口惜しき玉手箱でなくて、ぶちあけて嬉しい玉手箱、折角握つた運命の鍵を貴様等に占領されちやア、折角の苦心が水泡に歸するからな」

「おい、そんな出し惜しみをするものぢやない。其先の一寸小意氣な所を窺かし

てくれないかい。刀かたなの鑑定人めききは、チツト許ばかり砥石といしでといで窓まどをあけ、柄元つかもとの匂にほひを見れば、直すぐに其名刀そのめいたうたり或あるひは鈍刀どんたうたる事ことを知る如ごとく、此このテルさまは名なの如ごとく、

心の底こころまでよくテルさまだからな

「實じつの所ところは、其先そのさきは餘あまりで云いふに忍しのびないのだ

「忍しのびないとは何なんだ、ヤツパリやり損そこねたのだな。玉茸たまたけを採とり損そこなつて梟ふくろの宵企よひたく

みに目玉めだまをこつかれた口くちだらう。ウフフフフ

「秘密ひみつにして呉くれたら言いつてやるが、お前等まへら四人よにんは一生涯いっしやう他言いたごんはせぬと云いふ誓ちかひ

をするか。さうすれば一部分位いちぶぶんくらゐはお祝いはひに表示へうじしてやらぬ事こともない

四人聲よにんこゑを揃そろへて、

「よし誓ちかつた。誓ちかつた以上いじやうは大丈夫だいぢやうぶだからね

「それなら云いつてやらう。初稚姫はつわかひめさまが、それはそれは何なんとも知しれぬ情緒じやうちよのこも

つたお聲こゑで、柔やはらかい細ほそいお手て々々を出だして、「これイルさまえ、お前まへもお母かあさまの

お世話せわをして下くださるので、さぞお疲つかれでせう。何卒どうぞコーヒーなつと一杯いっぱいお飲あがり下くだ

さいませ」……へへへへなゝんて仰おつしや有あつて、それはそれは情じやうのこもつた笑あみを湛たた

へて注いで下さるのだ。それから頭腦鋭敏の某、チャーインと相手方の心の底まで見てとり、例の軍隊式で身體をキチンと整理し、コーヒーを左手に一寸持ち、貴様等が酒を飲む様なしだらない事はなさないな。第一姿勢を正しうし、氣を付け、「一、二、三」と、斯う空中に角度を描いて、わが口中へ徐に注入した。さア、さうすると流石の初稚姫さまも堪へきれない様な笑を洩して、「ホホホホ」と鶯のさね渡りの様な美聲妙音を放つて笑ひ遊ばしたのだ。さうすると一方に控へて居る義理天上の怪物奴、目が見えないものだから初稚姫様に喰つてかかり「これ初稚、お前は之程親が苦しんでゐるのに、何面白さうに笑ふのだい。小氣味がよいのかい」等と意地苦根の悪い、あの優しいお姫さまに毒ついてゐるのだ。憎いの何のと、此時こそは愛人の爲に敵を討つてお目にかけてむと奮然として立上り、高姫の横つ面目がけて骨も挫けよと許り「ウーン」と叩いたと思へば火鉢の角だつた、アハハハハ。よくよく見れば指から血が滲んでゐる。そこで「痛い」と云はむとせしが待て暫しだ。それはそれ、初稚姫様が監視してゐるだらう。千軍萬馬の中を命を的に勇往邁進し、砲煙彈雨を物ともしない軍人の某、マサカ弱音を

吹く譯にも行かず、痛さうな顔も出来ないのだから随分我慢したね。さうすると、  
又もや初稚姫様が梅花の唇を開いて、鶯でも囀つてゐるやうに「ホホホホ」と  
笑ひ聲をお洩し遊ばしたのだ。そこで此イルさまが「これはしたり、初稚姫殿」  
とやつたね」

テル「うーん面白いね。談益々佳境に入りけりだ。謹聴々々」

「さうすると初稚姫様が仰有るのに「あのまあイルさまの勇壯なお顔、口を【へ】  
の字に結び眉間に迄皺を寄せてゐるお姿は、ビリケンの化相した山門の仁王さま  
見た様だわ」と仰有るのだ、エへへへへ。ここに初めて某のヒーロー豪傑たる  
真相を認められたと思つた時の嬉しさ、勇ましさ、イヤ早形容すべき言語もない  
位だつた」

サール「馬鹿、貴様、馬鹿にしられ居つてそれが嬉しいのか。戀に惚けた奴の目  
には、何でもかんでも愛に映ずるのだから堪らぬのだ。本當に此奴は鞏玉を落し  
て來よつたのだよ」

「こりや、サール、黙つて聞かう。聴講者の妨害となるのを知らぬか。あまり騒

擾致すと會堂外へ退去を命ずるぞ」

「へへへへへ、あーあ、あーあ、あーあ、化物屋敷ぢやないが、【アークビ】が出るわい」  
テル「おい、イル公、サールなどに構はずドシドシと長口舌を運轉さしてくれ。  
機關の油がきれたら又このアルコールをグツと注してやるからな」

「竹林の七賢人でなくて、森林の四賢一愚人がここに集まつて林間酒を暖めながら、田原峠の實戦の状況を實地に臨んだ其勇士から聞くのだから、随分勇壯なものだぞ。謹んで聞かないと、再び斯様な面白き趣味津津々たるローマンズは一生涯聞く事は出来ないぞ」

「うん、さうだろ さうだろ。之からが正念場だ」

と捻鉢巻をしながら肱を張り、自分がやつた様な氣で二足三足前へニジリ寄り、  
咬み犬の様な顔をしてイルの顔をグツと見上げてゐる。イルは演説口調になつて、  
四邊の木の幹に片手を支へ、右の手を腰の邊りに置き、  
稍反身になつて喋々と虚實交々取りまぜて、  
講談師氣分で喋り始めた。

「切て、前席に引續きまして御靜聽を煩はします。愈祠の森、高姫の段、三五

教に其人ありと聞えたるイルの勇將に、一方は古今無雙のナイス、初稚姫との面白き物語でムります。そこへ勇猛なる義犬スマートをあしらつた物語でムりますれば、益々佳境に入り、お臍の宿替は申すに及ばず、翠玉の洋行致さない様、十二分の御注意を拂はれむ事を希望する次第であります」

ハル「おい、そんな長口上は如何でもいいわ。早く本問題に移らないか」

「お客様の仰せ、御尤もには候へど、今申したのは今夕の添物と致しまして、愈本問題に差しかかります」

テル「おい、最前の様に坐つて酒を飲みながらやつてくれないか。何だか學術講演會へ出席してる様な氣がして、酒を飲んでる氣分がせないわ」

「御注文とあれば仰せに従ひ、それでは一寸天降りを致し、光を和らげ塵に同はつて、下賤の人物と共に兄弟の如く、朋友の如く、打解けて御相談を致しませう。

八八八八八」

と云ひながらドスンと腰を卸した拍子に、細い木の角杭の削ぎ口が槍の様に劣つて居る其上に尻を下ろしたのだから堪らない。忽ちブスツと肛門に突入し、恰も

粉ひき臼の上臼の様になつて了つた。

「アイタタタ、然し丸いものと云ふものは誰でも狙ふものと見えるわい。木の株迄が俺の尻を狙つて居やがる。何程株が流行る世の中でも、此株ばかりは御免だ。然し節季になつて尻拭ひが出来ぬと困るから、今の内に儉約して此處にチヤンと据置貯金だ。イヒヒヒヒヒ」

と少し許り肛門を破り血をたらしながら、ズブ六に酔うて居るので、そんな事に頓着なく滔々として辨じ始めた。

「さて、初稚姫様のお顔が目にちらつき、日が暮れても、寝ても起きても、雪隠の中にも俺の目の前に現はれるのだ。何とまあよく初稚姫さまも惚れたものだ。何處に行つてもついて来てゐる。据膳喰はぬは男でないと思ひ、轟く胸をグツと抑へ、勇氣を鼓してその優しい手をグツと握つた途端に、「ウー、ワンワン」と云つて俺の耳たばに噛振りつき、これ、此通り傷をさせよつたのだ」

テル「何と顔にも似合はぬ恐ろしい女だな」

「何、姫様だと思つたら猛犬の手を力一杯握つたものだから、畜生吃驚して喰ひ

つきよつたのだ、アハハハハハ

サール「何だ。大方、そこらが落ちだと思つてゐたのだ。貴様は一靈四魂の活動

が不完全だから、そんな頓馬な事ばかりやりよるのだ。チツと靈學の研究でもし

たら如何だい、男爵様が氣をつけるぞや」

「ヘン、男爵、馬鹿にするない。貴様は首陀の生れぢやないか」

「男が酌をして飲むのが男爵だ。私が勝手に酌をして飲むのが私爵だ。小酌な事を申すと承知致さぬぞ」

「俺は酒を飲んで口から嘔吐と一緒に吐いたから吐く酌様だ。吐く酌として餘裕

ある一丈七尺の男子だからな」

「ヘン、一丈七尺なんて七尺にも足らぬ小男奴、偉さうに云ふない」

「八尺と九尺とよせて八九尺だ。一丈七尺と云つたのが何處が算盤が違ふのだ。

何と粗雑な頭腦の持主だな。一靈四魂が如何だのかうだのと、偉さうに云ふない。

それ程偉さうに云ふのなら、一つ解釋して見よ」

「貴様の様な木耳耳には聞かしてやるのは惜しけれど、俺が無學者と思はれちや



片腹痛い。云ひがかり上、男子として説明の勞を與へないのも、學者の估券を傷  
付くる事になるから、一つはりこんで教訓してやらう。エヘン、抑々一靈四魂と  
云ふのは、直靈、荒魂、奇魂、幸魂、和魂を云ふのだ。さうして荒魂は勇なり、  
幸魂は愛なり、奇魂は智なり、和魂は親なり、分つたか、随分よく學理に明るい  
ものだらう」

「勇とは何だ。勇の説明をせぬかい」

「マ男を即ち勇者と云ふのだ。どうだ、分つたか。それから親の講釋だ。親と云  
ふ事は親と云ふ字だ。辛い目を八度見せるのを親と云ふのだ。それから愛だ。ど  
んな事でも有利なものであつたならば喉を鳴らして受ける心、之を愛と云ふ。へ  
ン、又日々貴様のやうに口で失策する奴を智と云ふのだ。十目一様に見るのを直  
靈の直といふのだ。何といつてもサールさまだらう。俺の知識には、誰一人天下  
に手をサールものがないのだから、サールさまと申すのだ、エヘン」  
「成程、妙々、如何にもよく徹底した。文字と云ふものは感心な意味を含ん  
だものだね」

斯く話す折しも楓は森の彼方より、

「イルさま、皆さま、早う歸つて下さい」

とありきりの聲を出して呼ばはつた。

五人は取る物も取り敢へず、バタバタと事務所をさして歸り行く。

（大正一二・一・二一 舊一・一・一二・五 北村隆光録）

## 第一章 鸚鵡返（一三〇五）

祠の森の神館に 現はれ來りし空助の

其正體は月の國 大雲山に蟠まる

八岐大蛇の片腕と 妖魅の世界に名も高き

獅子と虎との中性を 備へし怪しの動物ぞ

妖幻坊と謳はれて

彼方此方に出没し

神出鬼没の妖術を

使ひて世人をなやませつ

地上の世界を魔界とし

所在善を亡ぼして

邪悪と虚偽の世にせむと

狂ひ廻るぞ由々しけれ

三五教の宣傳使

玉國別が丹精を

凝らして仕へまつりたる

嚴の御靈や瑞御靈

尊き神の御社を

蹂躪せむと出で来る

悪魔に御魂を奪はれし

高姫司を誑かし

茲に夫婦となりすまし

生地を隠して居たる折

忽ち来る三五の

道に名高き宣傳使

初稚姫の靈光と

伴ひ来る猛犬に

恐れて逃げ出すその途端

神に仕ふるスマートが

其正體を看破りて

忽ち勇氣を振り起し

幾層倍の巨體をば

有する曲津に取りついて

眉間のあたりを一嚙ぶり  
森を流るる谷水の

傍へに鎬を削りつつ  
妖魅は忽ち驚愕し

雲を霞と山の尾を  
指して一先づ逃げて行く

スマートは足を傷つけて  
チガチガしながら立歸り

初稚姫の居間に入り  
暫し痛手を舐めながら

自分療治の巧妙さ  
高姫司は空助を

兇暴不敵の曲神と  
知らぬ悲しさ吾夫と

戀ひ慕ひつつひそびそと  
よからぬ事を計畫し

まづ第一に目上の瘤と  
心にかかる珍彦や

静子の方を毒殺し  
楓の姫を吾子ぞと

偽りすまして聖場に  
いや永久に陣を取り

齋苑の館にまします  
神素盞鳴大神の

世界救治の神策を  
妨害せむと首をば

鳩めて囁く恐ろしさ。

楓かへでの姫ひめの枕邊まくらべに 現あらはれ給たまひしエンゼルは

言こと靈たま別のわけ化身けしんなる 文もん珠じゆ菩薩ぼさつと嚴いかめしく

さしも雄を々をしきスマートを 伴ともなひ來きたり兩ふた親おやの

危き難なんを救すくひ與あたへよと 百ひやく毒どく解げ散さんの神しん丹たんを

與あたへて雲くもに身みを隱かくし 何いづく處くともなく出いでましぬ

楓かへではハツと目めを醒さまし 吾わが手ての拳こぶしを調しらぶれば

夢ゆめに受うけたる靈れい藥やくを 握にぎり居あたるぞ不ふ思し議ぎなれ

妖えう幻げん坊ぼうの空もく助すけが 意い思しに從したがひスマートを

一ひと先まづここを追おひ出いだし やつと安あん心しんする間まなく

空もく助すけ司つかさの瘡さう傷しやうを 癒いさむたために大おほ杉すぎの

梢こずゑに生はえし玉たま茸たけを 密ひそかとに取とらむと高たか姫ひめは

人ひと目めをしのび梯はし子こを 大おほ木きの幹みきに立たてかけて

重い體をたわたと さしもに高き一の枝  
やつと手をかけ蜘蛛の巣に 引つかかりつつ右左  
梢を探し居たりしが 忽ち梟の兩眼を  
認めてこれぞ玉茸と 喜び勇み手を出せば  
梟は驚き高姫が 二つの眼を容赦なく  
鉤のやうなる嘴で 力限りについばめば  
不意を打たれて高姫は スツテンドウと高所より  
忽ち地上に顛落し 眼は眩み腰痛み  
息絶えだえとなりける 受付役に仕へたる  
イルは見るより仰天し 忽ち館にふれ廻る  
珍彦、静子を初めとし イル、イク、サール、ハル、テルの  
若き男は高姫を 擔いで居間に運び入れ  
初稚姫の熱心な 其介抱に高姫は  
暫し息をばつきながら 空助さまを逸早く

招き來れとせきたつる  
其心根ぞ不愼なれ

顔面忽ち腫れ上り  
二目と見られぬ醜面と

變り果てたる恐ろしさ  
祠の森の妖怪と

怖れて近づくものもなし  
さはさりながら三五の

教を守る宣傳使  
初稚姫は懇切に

高姫司をいたはりて  
介抱なせば七八日

月日を重ねて兩眼は  
忽ちパツと元の如

開けて痛みも頓にやみ  
顔の腫まで減退し

悦ぶ間もなく高姫は  
初稚姫の神力を

怖れて再び奸策を  
企み初めしぞうたてけれ。

高姫は懇切なる初稚姫の介抱に漸く腰の痛みも全快し、顔の腫も引き兩眼は元の如く隼の如く光り出した。喉元過ぎて熱さ忘るるは小人の常とかや、兇靈に憑

依されたる高姫は、前に倍して惡垂れ口をつき始め、遠の初稚姫、珍彦を手こず

らすこと一通りではなかつた。

高姫は病氣が癒つたのを幸ひ、いそいそとして珍彦の館を訪うた。

「ハイ御免なさいませ。珍彦さまは御機嫌宜敷うムいますかな。静子さまも御無事ですか。私も長らく怪我を致しまして困つて居りましたが、御親切の貴方様、あれ程私が苦しんで居るのに、只の一度もお訪ね下さいませ、眞に御親切な程、有難う存じます。遠は大神様に直々お仕へ遊ばす御夫婦の事とて、何から何迄お氣のつく事でムいますわい。この御親切をお報い申さねば濟みませぬから、御迷惑ながらちつとばかり、いな「やつと」ばかりお邪魔になるかも知れませぬよ」と門口から喋りながら「お上りなさいませ」とも云はぬに早くも座敷に上り込み、火鉢の前にどつかと坐り、柱を背に、煙草を熏らしながら、傲然と構へて居るその憎らしさ。楓姫は淑やかに襖を開けて高姫の前に現はれ、

「ヤ、お前さまは義理天上さまぢやな。此間は眞にお氣の毒さま、イヒヒヒヒ、貴女もあれでよい修業をなさつたでせうね。お父さまやお母さまに大切な毒散を振れ舞つて下さいまして、眞にお氣の「毒さま」でムいましたなア。ホホホホ」



高姫は、ぎよつとしながら左あらぬ體にて、

「これ楓さま、なんば年が若いと云つても、その悪言は聞き捨てなりませぬぞや。お前さまは此義理天上が、御兩親に毒を盛つたと云ひましたな。何を證據にそんな事を仰有る。この義理天上に、あらぬ悪名をつけ、無實の咎を負はせて追ひ出さうとの企みであらうがな。何奴も此奴も悪人ばかりで、挺にも棒にもおへた代物ぢやないわい。これ程此お館に悪魔が蔓る以上は、いつかないつかな此高姫は、お前達が追ひ出さうと云つたつて「びく」とも動きはしませぬぞえ。そして珍彦さま、静子さまは何をしてゐるのだ。「毒を吞ました」と、こんな失禮な事を現在自分の娘が云つて居るのに斷りにも來ず、揃ひも揃つた四つ足身魂ぢやな。これだからこの義理天上が骨が折れるのだ。こんな分らずやの悪人が結構な結構なお館を汚して居るものだから、神力無雙の空助さま迄、お前達の犠牲となつてあんな深傷を負ひ、今ではお姿も見えない。大方お前達が汚れて居るので、清淨無垢の空助様はお嫌ひ遊ばし、齋苑の館へお歸りなされたのだらう。工工仕方のない曲津が寄つたものだなア。變性女子のしようもない教にとぼけて居る八島主

を初め、玉國別、五十子姫などと云ふ阿婆摺女が肝腎の義理天上様に相談も致さず、許しもうけず、勝手氣儘に大神様のお鎮まり遊ばす御聖場に、鷹か鳶か狸か鼬か分りもしない御靈の宿つた珍彦夫婦を、大それた神司に任じ、其上バラモン教の落武者、箸にも棒にもかからないガラクタ人足を半ダースも引張り込み、聖場を日に月に汚すものだから、空助様の犠牲ではまだ足らぬと見え、女房の義理天上迄が長らくの苦しみ、是もやつぱりお前達親子の爲に千座の置戸を負うたのだ。あの病氣中にせめて一度位、「義理天上様、御氣分はどうですか、お薬は如何か」と義理一遍の挨拶にでも來たらよささうなものだなア。本當に恩知らずと云つても、犬畜生にも劣つた「どたほし」者だ。珍彦、静子夫婦は、私の神徳に怖れて何處へ潛伏したのだ。サア楓さま、一遍御意見をして上げねばならぬから、ここへ連れて來なさい」

「イヤですよ。お前さまは空助の妖幻坊と腹を合せて、毒散と云ふ悪い薬をお父さまやお母さまに吞ました怖ろしい大悪魔だから、何程お前さまが苦しんで居ても、よい罰だと思つて誰も訪ねに往くものがないのよ。氣の毒ですなえ。ホホホ

ホホ

「これ阿魔つちよ。何だ小ちつぺの態をして、毒散を吞ましたなぞと、何を證據にそんな事を云ふのだ。毒でない證據には、お前の兩親達は何の事もないぢやないか。熱が一つ出たと云ふのぢやなし、咳を一つしたと云ふのぢやなし、そんな無體の事を云ふと、此お館には居つて貰ひませぬぞや」

「大きに憚りさま。お前さまのやうな怖ろしい人は顔を見るのもいやだと云つて、お父さまやお母さまは、昨夜の中に齋苑の館へ、そつとお参りになりましたよ。

ここは珍彦の監督權内、お前さまが義理天上か不義理の天上か知らぬけれど、まあ二三日待つて居なされ、きつと立退き命令が、齋苑の館から下つて來るのに違ひありませんわ、エへへへ、お氣の毒さまねえ」

「ほんにほんに年齒も往かぬ阿魔つちよの癖に、何とした謀叛を企らむのだらう。毒害を致したなぞと、此生宮を大それた齋苑の館迄讒言しに往きよつたのだな。

エー、アタ小面の憎い、今に思ひ知らしてやる程に、假令立退き命令が來たとて、いつかないいつかな日出神の御命令の下らぬ以上は動きは致さぬぞや」

「オホホホホ、日出神様、嘘だよ嘘だよ、あんまりお前さまが悪事（わるごと）を企（たく）むから、お父（とう）さまとお母（かあ）さまがとてもしやり切（き）れないから、齋（い）苑（そ）の館（やかた）へ注（ちゆう）進（しん）に往（ゆ）かうかと云（い）つて居（ゐ）たのだよ。まだ行（い）つて居（ゐ）ないから、お社（やしろ）へでも御（ご）祈（ねん）念（ん）にいらしたのだらう。今（いま）の閒（うち）に改（かい）心（しん）して、お父（とう）さまやお母（かあ）さまに毒（どく）を吞（の）ましたお詫（わび）をなされれば、私（わたし）が取り持（も）つて齋（い）苑（そ）の館（やかた）往（や）つたきを留（と）めて上げませう。天（てん）上（じやう）さま、どうですな。この事（こと）を注（ちゆう）進（しん）されたら、何（なに）程（ほど）日（ひ）出（で）神（かみ）様（さま）でもちつとは困（こま）るでせう」

「無（む）實（じつ）の罪（つみ）を着（き）せられて困（こま）る者（もの）が何（ど）處（こ）にあるか。無（む）實（じつ）の咎（とが）でおめおめと親（おや）子（こ）が四（し）方（う）に流（なが）され、泣（な）いて一（いっ）生（しやう）を暮（くら）した未（み）來（らい）の菅（くわん）公（こう）見（み）たやうな人（にん）間（げん）とは、へんちつと違（ちが）ひますぞや。誣（ご）告（こく）の罪（つみ）で、此（こ）方（ち）の方（はう）から訴（う）つた。何（なん）と云（い）つても承（しやう）知（ち）はせないぞや。さあ早（はや）く兩（りやう）親（しん）をここへ引（ひ）きずり出（だ）して、義（ぎ）理（り）天（てん）上（じやう）さまに、頭（かしら）を地（ち）に摺（す）りつけ、尻（しり）を花（な）瓶（びん）にしてあやまりなさい。さうしたら都（つ）合（がふ）によつたら、蟲（むし）を押（お）さへこらへてやらぬものでもない」

「オホホホホ、オイ馬（ば）鹿（か）の天（てん）上（じやう）さま、惡（あく）の天（てん）上（じやう）さま、どつこい不（ふ）義（ぎ）理（り）の天（てん）上（じやう）さま、さうは往（ゆ）きませぬぞや。お前（まへ）さまが妖（えう）幻（げん）坊（ぼう）と相（さう）談（だん）をして、印（いん）度（ど）の國（くに）から持（も）つて來（き）

た毒散をお酒の中や御飯の中にまぜて喰はしたのだ。けれど、家のお母さまやお父さまは言靈別命様の御化身、いやお使ひ、文珠菩薩さまから、結構な結構な神丹と云ふ靈藥を頂いてゐらつしやつたのだから、其毒散が利かなかつたのよ。サアどうですか。若し楓の云ふ事が違ふなら、今文珠菩薩様を念じて此處に現はれて貰ふから、さうしたらお前さまも往生しなくちやなりませんまい」

「そんな事は知らぬわい。子供だてらツベコベ言ふものぢやない。苟くも日出神の生宮たる善一條の高姫が、夢にもそんな事を致すものか。それはお前達の僻みから、そんな夢を見たのだ。そして許し難い事は、吾夫空助様を捉まへて妖幻坊だと云つたらう。サア何を證據にそんな事を云ふのか、誹謗の罪で訴へますぞや」

「ホホホホ、未丁年者や少女の言葉は法律にはかかりませぬぞや。眞にお氣の毒さま、毒散の效能も、神力の前にはサツパリ駄目ですなア。サアサア早く歸つて頂戴」

高姫は大いに怒り、楓の胸倉をグツと取り、拳を固めて、

「エエ、ツベコベとよく轉る燕め、この榮螺の壺焼をお見舞ひ申すぞ」

と云ひながら、可憐なる少女の頭を三つ四つ続け打ちに打った。

「アレー、人殺ー」

と楓が叫ぶ聲を耳にし、バラバラと駆けつけて来たのはイル、イク、サール、ハル、テルの五人であつた。

（大正一二・一・二一 舊一一・一二・五 加藤明子録）

## 第一二章 敵愾心（一三〇六）

楓の叫び聲に取る物も取り敢へず、ツブ六連中は此場へバラバラツとやつて来た。高姫は五人の酔どれをグツと睨み、聲を荒らげて、

「コリヤ、老耄奴、騒がしい、ドヤドヤと、何しにうせたのだ。不都合な事を申すによつて、義理天上日出神が折檻を致してをるのだ。いらざるチヨツカイを出し、構ひ立てを致すと了簡ならぬぞや」

「コレ、イルさま、イクさま、早う天上さまを放して下さいなア」

イル「ハイ宜しい、お前さまを助けに来たのだ」

と座敷へかけ上る。高姫は、

「イーイ、小癩な老耄奴」

と胸倉をドンと突いた。イルはヨロヨロとヨロめき、縁側から前へ仰向けにひつ

くり返つた。此態を見て、イク、サール、ハル、テルの四人はヒヨロヒヨロしな

がらも、氣ばかりは勝つてゐるので、高姫目がけて武者振りつかうとする。高姫

は楓を放しおき、両手を擴げて、出て来る奴を力に任せ、ウンとつく。何れもへ

ベレケに酔うてゐるのだからたまらない、高姫が非力にも敵し難く、將棋倒しに

放り出されて了つた。そして五人は目がマクマクとしたと見え、泡をふいて苦し

んでゐる。高姫は座敷の中央に大の字形に立ちはだかり、大音聲、

「日出神、義理天上の生宮の神力は、マツ此通りだ。假令百人千人一萬匹たりと

も、來らば來れ、御神徳の今や現はれ時」

と圖にのつてホラを吹立てる。そして楓が後にゐることは、前に氣を取られて、

スツカリ忘れてゐた。楓はソツと後から高姫の兩足を掬つた。アツと叫んで、スツテンドウとひつくり返り、勢餘つて再び轉回し、五人の上にドスンと倒れた。其間に楓は急を兩親に報ずべく、眞跣足となつて裏口から神殿へとかけて行く。高姫は膝頭と向脛を縁板に打ちつけ、顔をしかめて、聲さへえ上げず「ウーンウン」と深き息をついてうめいてゐる。五人の酔どれは漸くにして起上り、高姫のそこに倒れたのを見て、

イル「コココリヤ、高姫、俺をどなたぢやと心得てる、イルさまだぞ。貴様は神罰が當つて、梟鳥の奴に目をコツかれ、木からバツサリと落ちて、難儀をさらしてゐたぢやないか。其時に此イルさまが介抱してやつたことを覚えてゐるか。餘り悪がすぎると、此通りだ。エエー、才俺の意中の愛人たる楓さまを、何科があつて、ぶんなぐりやがつたのだ。ササ貴様、そこに倒れてゐやがるのを幸ひ、愛人の敵をうつてやるのだ。エエー、コレ楓さま、今お前の敵をうつつから見とりなさいや」

イク「おい、イル、楓さまは逃げて行つたぢやないか」



「ウーン、肝腎の御本人がゐないと、何だか變哲がないワイ。お馬の前の功名でない、縁の下の力持ではつまらぬからのう」

「サール、此婆は、又しても又しても、亂暴な事ばかりしやがる奴だなア。木からブチャだれやがつて、大變に苦しみ、俺たちに厄介をかけておきながら、チツと病氣が癒つたと思へば、又もや發動しやがつて、あんな可愛い娘を打擲するとは怪しからぬ奴だ。大いに楓さまの肩をもつて、此婆をイヤといふ程擲りつけてやりたいものだ。コリヤ、高姫、貴様、それ程、キリキリ上つたり、おりたり、魔法を使ひよると、俺だとして一寸つかまへにくいわ。チツと靜にせぬかい。こりや、おい、イク、ハル、イル、テルの奴まで、上になつたり下になつたり、まいこんこしてゐよる、オヤ家までまはり出したぞ。コリヤ大地震だ。小さい喧嘩をやめて、皆非常組と出かけななるまい、コリヤ皆の奴、そんな所にキリキリ舞しとる時ぢやないぞよ」

高姫は打創の大痛も餘程輕減したので、ムクムクと起上り、  
「コリヤ、五人の老耄、貴様は此高姫の義理天上様を何と心得とる。許しもなし

に酒に喰ひ酔うて、其上に生宮様に刃向かふとは何の事だ、不心得にも程があるぞや」

テル「ナナナ何を吐しよるのだい、悪の張本人奴が。爺の行方が知れぬので、發狂しよつたのだな。オイ、コラ、皆の奴、こんな氣違に相手になるな」

「コーリヤ、モウ了簡せぬぞ、みせしめの爲だ。日出神の鐵拳をくらへ」と握り拳を固めて、小口から打つて行かうとする。此時後の方から、

「ウーツ　ウーツ」

と唸つてやつて來たのは例のスマートであつた。そしてスマートは高姫の怪我せないやうに裾を食はへて怪力に任せ、ドンドンと後向けに引きずつて行く。高姫は腰から下を丸出しにして、

「オーイ、イル、イク、サール、助けに來ぬか、オーイオーイ」

と云ひながら、ドンドンと森の中へと引かれて行く。五人は此恐ろしきスマートの働きに肝を潰し、酒の酔ひもさめ、ポカンと口を開けて、高姫の叫びながら引張られて行く森の方を背伸びをしながら、心地よげに見送つて居た。

かへて  
楓は慌しく走り歸り、

「ア、皆さま、よう助けて下さいました。お蔭で高姫の毒牙を逃れました。一番  
がけに駆けつけて下さいましたのは何方でございましたか？」

イル「へーエ、拙者でムいます。吾々五人は受付に於て酒の酔をさます折しも、  
（芝居口調）忽ち聞ゆる怪しの聲、しかも妙齡の美人の叫び聲……と聞くより、

氣も狂亂、救ひ……出さねばなるまいと、後鉢巻リンとしめ、襷十字にあや取り、  
袴の股立チンと上げ、此方を指して、一目散に、タツタツと一散走り、来て

見れば虎狼にも等しき、馬鹿の天上日出神の生宮、おのれ、最愛の楓姫様を打擲  
いたすとは不埒千萬、切つてすてむとかけよる折しも、敵の力やまさりけむ、グ

ツと胸をつかれ、ヨーロヨロヨロヨロと三間ばかり、たあちまち、縁側より仰向  
にスツテンドウと顛落し、頭蓋骨をシタタカ砕き、腰の骨を幾らか痛めたれど、

何を云つても最愛の楓姫の身代りと思へば、死しても冥すべし……と覺悟をきは  
めました。實に勇ましき勇士でせうがなア」

「ホホホあのマア御元氣なこと、男さまはお酒に酔ふと、それだから厭なのよ」

サール「アハハハハ、コリヤ、イル、どこに捻鉢巻をしてるのだい。襷十文字も、袴の股立も、どこにあるのだ。あまり馬鹿にするない。そんな事を云ふから、楓さまに笑はれるのだ」

イル「ナア二、一寸芝居をして見たのだよ。アツハハハハ」

「時に皆さま、高姫さまは何處へ行かれましたの」

イル「ナア二心配なさいますな。今頃にや猛犬に喰はれて居るに違ひありません。あの犬だつて、あんな大きな體をスツカリ食うて了ふ筈もありますまいから、腕の一本でも残つて居れば、其奴を葬つてやればいいのだ。マア貴女の強敵が亡びまして結構ですよ、御安心なさいませ。かくの如き萬夫不當の大丈夫が此館に立籠る以上は、如何なる敵が押しよせ來るとも、何條ひるむべき、忽ち木端微塵と踏み碎き、蹴倒し薙ぎ倒し、天晴功名手柄を現はし、勝鬨あぐるは瞬く間、姫君様、必ず必ず御煩慮なされますなや」

と芝居がかりになつてゐる。

「そんな氣樂な事云つて居らず、早く高姫さまを助けて上げて下さいな」

イル「ハイ、私にお頼みですか。但はイクにですか。又はサール、ハル、テル、何れに御指定下さいますかなア」

「エーエ、お酒に酔うて、困つた人だなア。皆さま、早う行つて助けて下さいな。マゴマゴしてゐちや、高姫さまの命がなくなりますよ」

イル「へへへ、何仰有います。あんな奴ア、犬に食はれた方が、餘程都合が宜しいよ。のう皆の連中」

サール「それでも女王様の御命令だから、ともかく、見るだけでもいいから往つて來うぢやないか」

と下らぬクダを巻いてゐる。そこへ初稚姫は珍彦夫婦を伴ひ、現はれ來り、

「あ、貴女は楓さま、お怪我はムいませんだか、危ない事だつたさうですね」  
「ハイ有難うムいます。チツとばかり頭が痛みますけれど、大した事もムいます

まい「  
珍彦「餘り楓は口がいいものですから、義理天上さまのお怒りに觸れたのでせう」

「それだつてお父さま、毒殺を企んでおいて、あべこべに私をとつちめるのですもの、私だつて、餘りで言はぬと居る譯には行きませぬワ」

静子「あの通りのお轉婆でムいますから、本當に親が困ります。初稚姫様、親の教育が悪いものですから、こんな時にアラが見えまして、お恥しうムいます」

イル「ナーニ、高姫婆奴、毒害をしようと思つたのか、其奴ア聞き捨てならぬ。オイ家來共、悪人の征伐だ、サア來イツ。腕をねぢ切り股を引きさき、首をチヨン切つてこらしめてやらう。いざ來い、來れ」

と尻ひつからげ早くも驅け出さうとする。四人も、

「ヨーシ、合點だ、突貫々々」

と云ひながら、尻ひつからげ、かけ出さうとするのを初稚姫は聲を勵まし、

「皆さま、お待ちなさい」

と制止した。

イル「それぢやと申して、斯の如き悪人を、どうノメノメと見のがす事が出來ませう。どうぞ私に天上の命をとらして下さい。日頃鍛へた武術の手前、二尺八寸

伊達にはささぬ」

と又もや驅け出さうとする。初稚姫は兩手を擴げて五人の前に立塞がり、

「待った待った、お待ちなさいませ。楓さまが夢を御覽になつたのですよ。サツ

パリ嘘ですからな、メツタな事をしては可いませぬ」

と初稚姫の早速の頓智に五人は張切つた勢も抜け、互に顔を見合せ、

「ナインダ、馬鹿らしい、夢だつたか」

と手持無沙汰に、又もやしやがんで了つた。

「それだつて、私、チツトも嘘は云はないワ」

「楓さま、夢の浮世といふ事がありますよ。お前さまは夢をみてゐたのですよ。

夢と思ひさへすりやすむ事ですからね」

「だつて頭が痛みますもの、夢になぐられても矢張こんなに痛いでせうかな」

と頭を抱へて、恨めしさうにしゃがんで了つた。

珍彦「初稚姫様、仕方のない娘でせうがな。時々大それた、あんな嘘を申しまし

てな、兩親も困りますの」

「お父さま、わたえ、嘘は嫌ひといふのに……そんな事云つて貰つちや、私の立瀬がないワ。アンアンアン」

静子「何でもいいぢやないか。おとなしくしてゐなさい」

「それでも痛くてたまらないワ」

初稚「サ、イルさま、イクさま、外三人さま、早く高姫さまを救ひ出しに行つて下さいな」

イル「ハイ、承知致しました。サ、四人の者共、天下無雙の勇士、イルに續けツ、前へ進めツ、一二三ツ」

と軍隊式にチヨクチヨクと地上を刻みながら、高姫の引きずられて行つた木の茂みを探ねて走り行く。後見送つて初稚姫は両手を合せ、神界に高姫の無事ならむ事を祈つた。

楓「姫様、本當に義理天上といふあの婆アさまは、無茶な人ですよ。思ひ出すと、餘りの業託をいふので、腹が立つてたまりませぬワ。貴女様がお助け下さらなかつたならば、モウ今頃はお父さまもお母さまも亡くなつてゐるのですもの。私は



子として、何うしてこれが黙つてゐられませうかねえ。チツと戒めておいてやらなければ、何時、お父さまやお母さまを毒害するか分つたものぢやありませんか。私、ここ一週間程といふものは、夜分も口々に寝た事はありません。兩親の身の上が氣にかかつて仕方がないのですもの」

「ああそれは御尤もでムいます。併しながら何事も神様に御任せなさいませ。三五教の宣傳歌にもムいませうがな……神が表に現はれて、善と惡とを立別ける……とお示しになつてゐますから、キツと惡人は神様が仇を討つて下さいますよ。人間は何事も神様にお任せする方が安全ですからね」

「ハイ、有難うムいます」

珍彦「姫様、よう言うて聞かして下さいました。吾々夫婦もこれでヤツと安心致しました。實の所、吾々夫婦も此間から一目も能う寝なかつたのです。何時此楓が懷劍を持つて、親の敵だと云つて、高姫様に切りかけるやら分らない形勢でムいましたので、茲七八日といふものは、夫婦の者が夜分になれば一睡もせなかつたのです。どうぞ不調法がないやうと大神様に祈つてゐました。先づ先づそのお

蔭で無事に今日迄暮れました。誠に有難うございます。高姫様の御大病中にも夫婦の者がお尋ねせなくちやなりません。娘が聞きますので、心ならずも、いかい失禮を致しました。又娘は娘として、高姫さまにお見舞にやつてくれと申しましたが、どうも懐剣を放さないの、剣呑でたまりませず、娘も見舞にやらず、吾々夫婦もお見舞にゆかず、高姫様がお不足仰有るのも無理もございませぬ。何と云つても親の敵を討つと云つて、あのイヤらしい山口の森へ丑の時参りをするといふ娘でございますからな。本當に敵愾心の強い、女子だてら仕方のない難物でございます。どうぞ貴女様のお力で、トツクリと言ひ聞かしてやつて下さいませ。又

「楓さま、お腹が立ちませうが、どうぞ私の居間迄御遊びに来て下さいませ。又面白くても歌つて遊びませう。サ、お出でなさいませ」

と優しく楓の手を曳いて、十七才の女同士が初稚姫の居間を指して進み行く。

(大正一二・一・二一 舊一一・一二・五 松村眞澄録)

第一三章 盲嫌（一三〇七）

初稚姫の居間には初稚姫、楓姫の二人が丸火鉢を中に置いて、やさしい聲で談話が始まつてゐる。

「楓さま、お腹が立つでせうけど、そこを忍ぶのが勇者と云ふものですよ。なる勘忍は誰もする、ならぬ勘忍するが勘忍と申しまして、忍耐位善徳はありませぬ。世の中の一切の事は忍耐によつて平和に治まり、又忍耐せざるによつて騒動が起るのです。忍ぶと云ふ字は刃の下に心と云ふ字を書きませうがな。胸に刃を呑む様な苦しき残念さも、之に耐へ得るのが之が忍ぶです。國祖大神様は此廣大な世界をお造り遊ばし數多の神人を安住させ、サアこれで一息と云ふ處で、金毛九尾其他の悪神の爲に、反對に國治立尊は悪神だ、崇り神だと八百萬の神様にまで罵られ、又千座の置戸を負はされて、あるにあらねぬ苦勞を遊ばし、口惜し残念を耐りつめて只の一言も御不足らしい事は仰有らなかつたのですよ。齋苑の館の生神様、素盞鳴尊様も、あるにあらねぬ無實の罪をきせられ、頭の毛を一本一本抜

きとられ、手足の爪を剥がれ、髭を切り、其上に尊き御身を漂浪人として高天原より放逐され給ひながら、少しもお恨み遊ばさず、天下萬民の罪を一身に引受けて、瑞の御靈と顯現し給ひ、今や不心得千萬な人間を善道に導き、天國の生涯をいや永久に嬉しく楽しく、一人もツツポに落さず助けてやらうとの思召で、三五教を天下にお開き遊ばし、妾も其手足となつて天下に其宣傳をしてゐるのであります。貴女も亦此尊き大神様にお仕へ遊ばす珍彦様のお娘子、そして貴女は三五教の清き尊き信者なれば、何程高姫さまが無理難題を仰有つても、一言も怨んではなりません。人間はチツとでも腹を立てたり致しますと、惡魔が其虚に乗じて其靈を亡ぼし、遂には肉體迄も亡ぼしますから、腹を立てる位恐ろしいものの、損なものはムリませぬよ」

「ハイ、有難うムります。妾も父から忍耐の最も必要なること及び忍耐は萬事成功の基であり、人格の基礎であると云ふ事を聞かされて居りますが、何分はしたくない女ですから、つひ心の海に荒波が立ちまして、柔順なるべき女の身として高姫様に對し暴言を吐きました。今になつて思へば本當に恥かしうムります。神様

は妾の我情我慢をさぞお憎しみ遊ばすでムんせうな」

「いえいえ、決してお案じなさいますな。貴女に其お氣がついて今後忍耐の徳をお養ひなさいますれば、決して神様はお咎め遊ばす所か、大變にお喜び遊ばし、貴女の靈にも肉にも愛の光明を投げ與へ給ひ、此世に於て最も清き美はしき大いなるものと成さしめ給ふものでムります」

「いろいろの御教訓、身に沁み渡つて嬉し涙が思はず零れて参ります。扨て初稚姫様、高姫様は今の悪心を改良して下さいませうか。さうでなくては吾々は父母兩親の身の上案じられてなりませぬがな」

「御尤もでムります。貴女が子として御兩親をそこ迄お思ひ遊ばすのは實に感じ入つた御心掛けでムります。然しながら高姫様には御氣の毒ながら、いろいろの悪靈が體內に群居して居りますから、到底吾々の力では及びませぬ。それだと申して高姫様を魔道へ落したくはありませぬ。飽まで仁慈と忍耐とを以て立派なお方にして上げなくては、吾々三五教に仕ふるものの神様に對する役が勤まりませぬからな」

「如何致しましたら、高姫様を救ふ事が出来ませうかな」

「この上は神様の御神力を借るより外に道は有りませぬ。そして何と仰有つても、此方は誠と親切と實意と忍耐とを以て相對する時は、神様のお恵によりまして屹度よいお方になつて下さるでせう。吾々は神様から試験問題を與へられた様なものですからな。高姫様を改心させる事が出来ない様だつたら、妾は宣傳使等と云つて歩く事は出来ませぬ」

「本當に御苦勞様でムりますな。妾もこれから忍耐を第一とし、高姫様をわが父母同様に敬ひ愛する事に致しませう」

「ああよう云うて下さいました。有難うムります。サア楓さま、お父さまやお母さまがお待ち兼ねでムりませうから、追ひ立てた様で濟みませぬが一先づお歸り下さつて、又改めて遊びにおいで下さいませ。高姫さまが今スマートに引きずられ、大變に逆上して居られますから、貴女のお顔を見られたら、何時もの病氣が又再發するかも知れませぬからな」

「左様なれば御免を蒙ります。貴女と妾と心を合せて高姫様を、ねー、……」

と言葉終らぬに、高姫は襖を蹴破り夜叉の如き勢にて、闖入し來り、怒りの面色物凄く、二人をハツタと睨めつけ、聲を震はせながら、

「隠れたるより現はるるはなしとかや。お前等兩人は何を相談してゐた。貴女と妾と心を協して高姫を、ねー……とか狙ふとか現に今云つて居ただらう。其様な悪い企みを致して居ると、天罰で忽ち現はれませうがな。誰知らぬかと思つても天知る、地知る、人も知る、吾も知る、サア二人の方、もう、了簡がなりませぬ。何を企んでゐた、サア、キツパリと白状なさいませ。これ楓、お前は大事な義理天上の生宮を騙討に致して、後から小股を攫へ、私を前裁へおつ放り出し、これ此通り向脛を擦り剥かせ、膝頭から血を出さしたぢやないか。サア如何して下さる。もう了簡はしませぬぞや」

「眞に濟まない事を致しました。何卒御了簡して下さいませ。妾が悪うりました」

「へん、よう仰有いますわい。「妾が悪うりました」とは、それは何の事だい。悪いと云つて謝つて事が濟むのなら世の中は悪の仕放題だ。賣言葉に買言葉、貰

つたものは必ず返禮せなくちやならない。お前さまも、蟻一匹とまつてもならぬと云ふ大切な向脛を擦り剥かして下さつたのだから、私も此儘で措いちや眞に義理が濟みませぬ。之から返禮に思ふ存分こついで上げるから向脛を出しなさい。世の中は義理が大切だ。此義理天上が充分にお禮を申しますぞや』  
と震ひ聲に怒りを帶び、涙交りに喚き立てる。

「もし、お母様、何卒許してあげて下さいませ。まだお年も行かぬなり、何卒神直日、大直日に見直し聞直し、以後お慎みなさるやうに妾からも御注意を申上げますから』

「ヘン、これ初稚、ようまあツベコベとそんな白々しい事が云はれますな。お前さまは今楓と二人で、現に此高姫を二人が心を協して狙うてやらうと云つて居つたぢやありませんか。そんな事に誤魔化される義理天上ぢやありませんか。お前は空助さまの命令を聞くと云つて、あの悪い犬を追ひ返したと云うたのぢやないか。それに何處かへ隠して置いて、私をあんな非道い目に遇はし、森の奥まで引張つてやらしたのも、お前さまの企みだらう。イル、イク、サールやハル、テ



ルが来て呉れなかつたら私は殺されて居る所だ。大悪人奴が、美しい顔して、心に針を包んでをるお前は悪魔だ。もう今日から暇をやりませぬ。アタ穢らはしい、お母さま等と仰有つて下さいませぬ。人殺の張本人奴が、鬼娘奴が、此義理天上はもう承知しませぬぞや」

「お母さま、さう無息に怒つて下さいませぬ。何卒一通り聞いて下さいませ」  
高姫はニユツと舌を出し、赤ベイをしながら腮を三つ四つシヤくつて見せ、冷笑を浮べて、嘲るやうな口吻で、

「へん、仰有りますわい。中々劫経た狸だな。ここへ来た時から只の狸ぢやないと思つてゐたのだ。けれど、戀しい戀しい空助さまの娘だと思つて、今まで可愛がつてやれば増長しよつて、大それた事を企むとは、言語道斷な大悪黨ではないか。それ程お前さまが親切さうに云ふのなら、何故私があのだ畜生に引張られてゐた時に助けに来なかつたのだ。お前は假令名義上から云つても私の娘ぢやないか。チツと位誠があれば義理人情も辨へて居る筈だ。イル、イク、サールのやうな譚の分らぬヤンチャでさへも、マサカの時は私を助けに来たぢやないか。それ

に何事ぢやい。又ツケリコと、現在母の私を大怪我させた楓の阿魔を自分の部屋に引張り込み、氣樂さうに私をしよう等と、大それた陰謀を企てて居つたぢやないか。エー、グツグツしておればお前達にしてやられるかも知れぬ、先んずれば人を制すだ。覺悟なされ」

と言ひながら棍棒を打振り、初稚姫を打伸めさうとする一刹那、俄に駆け込んできたスマートは「ワン」と一聲、高姫の裾を喰はへて又もや後へ引倒した。初稚姫はスマートに向ひ、

「これ、お前、何と云ふ亂暴の事をなさるのだい。早くお放しなさらぬか」とたしなめた。スマートはビリビリと腹立たしさうに震うてゐた。けれども主人の命令には背き難く、素直にパツと裾を放した。高姫はツと立上り、棕櫚箒を以てスマートの頭をガンと殴つた。スマートは怒つて飛びつかうとするのを初稚姫は「これ」と一聲かくれば、スマートは残念さうにして俯向いて了つた。

「これ、スマートや、決してお母さまに對し、嚇かしちやなりませんよ。然しお前は賢い犬だから、お母さまを引きずつて行つても、何處も咬まなかつた事だけ

は偉えらかつたね」

と頭あたまや首くびを撫なでスマートの心こころを和なごめて居ゐる。高たか姫ひめは聲こゑ荒あららげて、

「エー、汚けがらわしい初はつ、楓かへでの阿あ魔ま、ド畜ちくしやう生うをつれて、其そつち方い行いつてくれ。グツグツしてゐると義ぎりてんじやう理う天てん上じやうは死し物もの狂くるひだ。どんな事ことを致いたすか知しりませぬぞや」

と殆ほとんど發はつ狂きやうの態ていである。初はつ稚わか姫ひめは餘あまり怒おこらしては却かへつて氣きの毒どくと思おもひ言こと葉は優やさしく兩りやう手てをついて、

「お母かあさま、えらい濟すまない事ことでムりました。左さ様やうなれば仰おほせに従したがひ、彼あち方らに控ひかへてゐますから、御ご用ようがムりますれば何どう卒そお手てをお打うち下くださいませ」

「へん、そんな、諂へつらひ言こと葉はを喰くふやうな私わしぢやムりませぬわいの。さアさア早はやく珍うづ彦ひこさまの處ところへでも行いつて、シツポリと高たか姫ひめ征せい伐はつの相さう談だん會かいでも開ひらいたがよいわいの。シツッ シツッ シツッ 畜ちく生しやう」

と云いひながら齒はの脱ぬけた口くちから啖たん唾つばを吐はきかけ、箒ほうきを振ふり廻まはし、掃はき出ださうとした。初はつ稚わか姫ひめ、楓かへではスマートと共ともに、

「御ご免めんなさいませ」

と云ひ捨て、匆々に此場を辭し珍彦の館をさして出でて行く。

後に高姫は無念の齒をかみしめ、虎狼の如き蠻聲を張上げて、

「エー、ザ残念や、口惜しやな。悪神共の計略にかかり、肝腎の空助様は怪我を

遊ばし何處かへお出でになり、此義理天上は神の生宮と云ひながら、珍彦の魔法

使のために目をこつかれ、腰を挫かれ、其上あんな楓の様な阿魔ツチヨに投げつ

けられ、ドン畜生には引きずられ、實に之が黙つて辛抱が出来ようか」

と云ひながら火鉢を投げつけ、戸棚の膳椀鉢等を引つ張り出しては戸外へ投げつ

け、「ガタンビシヤン、ガチャガチャ」と神樂舞を遺憾なく演じ終り、再び座敷

の中央にドツカと坐り、首を上下左右に振り、泣きしやくつてゐる。忽ち高姫の

腹中より、

「ワツハハハハハ、俺は初稚姫の守護神だ。初稚姫に頼まれて此肉體を亡ぼすべ

く入り込んだのだぞよ。もう一人は楓の守護神だ。何と小氣味のよいことだわい

のう、ウフフフフ」

と「ひとり」でに笑ひ出した。然し此聲は決して初稚姫に頼まれて這入つた守護

神んでもない、又また楓かへでの守護神しゆごじんでもなかつた。依然いぜんとして高姫たかひめの體内たいないに潛居せんきよしてゐる。惡狐あくこの聲こゑである。されど高姫たかひめは全くまった兩人りやうにんが高姫たかひめの肉體にくたいを亡ほろぼすべく、吾肉體わがにくたいに隙すきを窺うかがうて侵入しんにふして來たものと思おもうてゐるから堪たまらない。これから兩人りやうにんを憎にくむ事こと蛇だかを窺うかがうて侵入しんにふして來たものと思おもうてゐるから堪たまらない。これから兩人りやうにんを憎にくむ事こと蛇だかの如ごとく、隙すきさへあれば兩人りやうにんを懲こらしてやらねばおかぬと決心けつしんしたのである。凡すべて惡靈あくれいが人ひとを傷きずつけ又また人ひとを苦くるしましめむとする時ときは、右みぎの如ごとき手段しゆだんを採とるものである。例たとへば大本教おほもとけうを破壞はくわいせむとする惡靈あくれいは、或ある社會的しゃくわいてきせいりよく勢力せいりよくを有いうする人間にんげんの體内たいないにソツと入いり、内部ないぶより大本教おほもとけうに對たいする惡口あくこうを囁ささやき、之等これらの手てによつて破壞はくわいせむとするものも魔まの中なかには澤山たくさんあるのである。又稍小またやせうなる魔まに至いたつては病人びやうにんの體内たいに入いり込み「此方このほうは大本おほもとから頼たのまれて其方そのほうの命いのちを取とりに來たものだ」等などと口走くちばしり、名なを悪わるくせむと企たくむものである。斯かくの如ごとき惡魔あくまは何時いつの世よにも頻々ひんびんとして現あらはれ來るものである。故ゆゑに役員やくゐんたり信者しんじやたりするものは、充分じゆうぶんに靈界れいかいの消息せうそくに通つうじ、彼等かれらの詐言さげんに迷まよはされてはならぬのである。扱さて高姫たかひめは自分じぶんの腹はらを例れいの如ごとく握にぎり拳こぶしで三みつ四よつ打叩うちたたきながら、狂亂きやうらんの如ごとく怒いかりの聲こゑを張はり上げて、

「こりや、惡神の張本、初稚姫、楓姫の生靈奴、何と心得てる。そんな事に往生致す常世姫の身魂、義理天上日出神の生宮ではないぞよ。サア其方は企みの次第を逐一白状致せばよし、致さぬに於ては此方にも了簡があるぞよ。どうだ、返答致せ」

と喚き立てる。腹中より、

「はい、眞に濟まない事を致しました。私は初稚姫の生靈でムります。そしても一人は楓姫の生靈でムります。どうかして吾々二人が力を協せ、日出神の生宮を亡ぼしてやらうと企んで這入りました。併しながら貴女の御神徳があまり強いので、如何する事も出来ませぬ。ああ苦しい苦しい許して下さいませぬ許して下さいませぬ」

と初稚姫、楓姫の聲色を使つて腹の中から詫び出した。然し其實は依然として、もとの兇靈の言葉であり、其兇靈が初稚姫の威光に畏れ、何とかして高姫の肉體と喧嘩をさせ、ここを兩人とも追ひ出し、悠悠閑々として高姫の體内に棲み、わが目的を達せむと企んだのである。高姫は之を聞くより、

「うん、よし、惡逆無道の四足身魂、了簡ならぬ」

と喚きながら棍棒を小脇に搔い込み、珍彦の館をさして阿修羅王の荒れたる如き勢凄じく、火焰の熱を吐きながら頭髪を逆立て進み行く。初稚姫、楓の二人はヒソビソと話をしてみた。そこへ高姫は現はれ来り、

「惡逆無道の四足、思ひ知れ」

と櫂の棍棒を眞向にふり翳し、今や打下さむとする一刹那、何處ともなくスマートは宙を驅りて飛んで来り、強力に任せて高姫をトンと其場に押倒した。高姫はこの猛犬を見て怖氣づき、細くなつて再びわが居間に逃げ歸り、中から戸障子に突張りをして、夜具をひつ被つて震へてみた。スマートは高姫の後を追つ驅け来り、戸の外に足搔きをしながら、

「ウーウ　ウーウ、ワウワウワウ」

と頻りに呻り立ててゐる。高姫も体内の惡靈も此聲に縮み上り、小さくなつて梢に残つた柴栗の様に固まつて震うてゐる。

(大正一二・一・二一　舊一一・一二・五　北村隆光録)

第一四章 虬の杯（一三〇八）

高姫は、それより初稚姫、楓姫、珍彦、静子を憎むこと甚だしく、如何ともし彼等を亡ぼさむと夜着を被つて怖ろしき鬼心を辿つて居る。されど何う考へても普通ではいかない。又まさかの時になれば、怖ろしいスマートが飛び出して来る。これが高姫の第一の頭痛である。もうかうなつたら、如何程スマートを歸せと云つても初稚姫は歸すまい。又母としての権利を振り、彼女を強壓し吾意に従はしむる事も到底駄目だと考へた。そこで高姫は一計を腹中の悪狐と相談の上ねり出した。外でもない、それは一種の妖術である。虬の血を絞つて百蟲を壺に封じ込み、當の四人を調伏の爲に血染の絹を拵へ、護摩の火にかけてこれを焼き盡し、壺の中に秘めて置き、和合の酒宴と稱し、ソツと四人の杯に人知れず塗りつけて置き、甘く其酒を飲ます時は、之を飲んだものは自ら神徳を失ひ、又人の心に逆らうて恨みを受け、遂には其身を亡ぼすに至るものだ……と云ふ事を教へられた。それより高姫は森の中に表面散歩の如く見せかけ、虬を探し百蟲を漁つて



この怖ろしい計畫に全力を盡した。さうして漸く註文通りの品が揃うたので自分の床下に隠し置き、時の到るを待ちつつあつた。

高姫は斯くして、何時とはなしに四人を亡ぼさむと思ひ、「ほくそ」笑みつつ、表面柔順と親切を装ひ、あまり小言も云はず、憎まれ口もたたかず、可成四人が自分を信任し且心を許すやうにと勤めて居たのである。實に女の惡靈に迷はされ、狂熱の極點に達した時位怖るべきものはない。女は最も心弱きもの、又最も強きものである。一旦決心した上は、俗にいふ女の一心岩でも突き貫くと云つて中々容易に動くものではない。高姫はかくも怖ろしき惡計を敢行すべく決心の臍を固めてしまつた。

斯る企みのありと云ふ事は、初稚姫を除く外は誰一人として悟り得るものはなかつたのである。

一切の計略の準備が調うたので、高姫は自ら珍彦館に立ち出で、叮嚀に笑顔を作り辭儀をしながら、態とに優しき聲を絞り、

「ハイ御免なさいませ。此間は病氣上りの事とて頭が變な工合になりました、つ

ひ皆さまに御無禮の事を申し上げましたさうでムいます。何分逆上致して居りましたので、如何なる不都合の事を致しましたやら皆目存じませぬ。今日義理天上日出神様が、こんこんと夢中でした事をお話し下さいましたので私も吃驚致しまして、眞に濟まない事を致したと悔やんで見ても後の祭り、初稚さまにも楓さまにも御夫婦様にもえらい失禮を致したさうでムいます。私はそれを天上様から承はり、立つても居ても居られなくなりましたので、お詫のため恥を忍んで参りました。何卒私の罪をお許し下さるやうお願い致します。

と泣き聲になつて空涙をこぼして詫び入るのであつた。初稚姫は高姫の腹のどん底までよく知つて居た。さうしてその魔術は唯兇靈の妄言にして何の寸效なき事を看破して居たのである。故に高姫の悪計を自分一人の心の中に包んで置きさへすれば、天下泰平である。併し高姫さまが悪魔に嗾されて斯様な心を起されるのは眞に御氣の毒だ。何とかして此際に改心して貰はねばならないと、堅く決心して居たのである。

珍彦「これはこれは高姫様とした事が、何と仰有います。貴女にお詫を云はれて

何うして私が耐りませう。尻こそばゆくてなりませぬ。何事も吾々がいたらぬから起つた事でムいます。何卒今後はよろしくお叱り下さいますやうに」

「イエイエ私が悪いのでムいます。つひ私には神経病がムいまして、時々脱線を致しますので、何時も人様に御迷惑をかけますので、神様に對しても貴方等に對しても濟みませぬ。のめのめ來られる筋ではムいませぬが、面を被つて怖る怖る參りました。それに就いては詫びの印及び貴方等と入魂に願ふ喜びとして、手製の御飯とお酒を上げたいのでムいますが、どうぞ餘り遠い所ではムいませぬから、來ては下さいませぬかなア。何を申しても貴方等は御親切なお方ですから、私の居間まで位は來て下さることと固く信じて參りました」

「ヘイどう致しまして、貴女に御馳走頂いては濟みませぬ。私の方から實は差上げたいのでムいます。」

「さう仰有らずに私の願を聞いて下さいませねえ。私がどうしてもお氣に召さないのでムいますか、さうすれば是非はムいませぬ。私は喉でも突いて死なうより道はムいませぬ」

と又もや巧妙に空涙を絞る。

静子「これ珍彦さま、あれだけ親切に仰有つて下さるのだもの、お世話になつたらどうでせう」

「ウンさうだな。折角の思召、無にするのも却て畏れ多いから、お言葉に甘へて伺ひませうかなア」

「お父さま、お母さま、貴方高姫さまの所へいつてお酒や御飯を頂くのなら、神丹をもつてお出でなさいませよ。又此間二度目に文珠菩薩様が下さいましたのね

え。あれさへ頂けば、どんな毒が入つて居てもすつかり消えますからねえ。高姫さま、毒散などは今度は入れてはありますまいな、假令入れてあつても、私等は

神丹を持つて居るから些も構ひませぬけれどねえ」  
と態とにあどけなき小兒の態を装ひ、高姫の荒肝を挫がうとした。

珍彦「これ、お前は何と云ふ失禮な事を云ふのだい。高姫さまが何そんな事をなさる理由があらうか、お前は夢を見たのだよ」

「何でも夢にして置けばよいのですなア、初稚姫さま、貴女もさう仰有つたでム

いませう。併し私は義理天上さまの所へ往つて、お茶一杯でもよばれるのは否で  
すわ」

静子「これ楓、お前はそれだから困ると云ふのだ。ほんにほんに仕方がないなア、  
ちつと初稚姫さまの爪の垢でも煎じて頂かして貰ひなさい」

高姫は態とニコニコしながら、何氣なき態にて心の驚きを隠しながら俄かに作  
り笑ひ、

「ホホホホ、やつぱりお若い方は夢を御覽になつても現實だと思つてみらつし  
やるのですねえ。ほんとに可愛い正直な楓さまだこと、これ楓さま、何卒皆さま  
と一緒に来て下さいな」

「それなら叔母さま、往きませう。初稚姫の姉さまも御一緒にせうねえ」  
「お前さまの好きな初稚さまも一緒にだから、何卒一緒にお膳を並べて、仲よろこ  
の婆が心を召し上つて下さい。そして私も一緒に頂きますから」

「皆さま、お母さまが必ず迄親切に仰有つて下さるのだから、サア参りませう  
と勧める。親子三人は初稚姫の言葉に確證を與へられたる如く、安心して高姫の

居間に列する事となつた。

高姫は追従たらだら、あらゆる媚を呈しながら、心の裡に、

「いよいよ願望成就の時が来た、この時を逸しては、またとよい機會はあるまい」と思ひながら他人に膳部を扱はず、今日は高姫の赤心を現はすのだからと云つて、いそいそと唯一人臺所を立ち廻つて居るのが怪しい。

高姫は漸く膳部を五人前揃へ、酒の爛迄ちやんとして虻の血を塗つた杯を四人の膳に一つづつ配り置き、

「サア皆さま、お待たせ致しました。どうぞ何もムいませぬけれど、どつさりお食り下さいませや、今日は初稚、お前もお客さまだよ」

「お母さま、本當に濟みませぬえ。子が親にお給仕をして貰つたり、御飯をたいて頂いたりするとは、ほんに世が轉倒ですわ。勿體なくて冥加に盡きるかも知れませぬが、お母さまのお言葉に従ひ、今日だけはお客さまにならして頂きます」  
「アアさうさう、さう打解けて下されば、この母もどれだけ嬉しいぢや分りませぬ」

珍彦「どうもお手間の入りました御馳走をして下さいまして、實に有難うございます」

静子「大勢が及ばれに参りまして、眞に済みませぬ」

「サア初稚姫さま、お前さまから毒試をするのだよ」

と爛徳利を差出した。初稚姫は、

「皆さま、お先に失禮致します」

と會釋し、杯を兩手の掌にきちんとのせ、

「お母さま、虻の血の色のお杯は、ほんに氣分が宜しうございますね。百蟲を

壺に封じたやうなお酒の味がするでせう」

と云ひながら高姫の顔を一寸覗いた。高姫は初稚姫の言葉に驚いて爛徳利をパタ

リと其場に落した。瀬戸物の爛徳利は忽ち切腹の刑を仰せつけられ、腹一杯呑ん

でみた酒を残らず吐き出して了つた。

「お母さまとした事が、えらい事をして見せて下さいませぬア。これは何の法式

でムいますか」

「これはなア、高姫の腹には何も無い、この通り清い清い混りのないお酒のやうなものだと云ふ赤心を示すための、昔から傳はつた一つの法式ですよ」

初稚姫は態と空惚けて、感心さうな顔をしながら、

「何とお母さまは故實に通達したお方ですねえ。何卒、このお杯に一杯注いで下さいませ」

とわざとに突き出す。高姫はヤツと初稚姫の何氣なき言葉に安心の胸を撫で下し、笑顔を作つて、

「アアよしよし、初ちやまから注いで上げませう。サア杯をお出しよ」

初稚姫は嬉しさうに杯に酒を注いで貰ひ、グウグウと飲んで見せた。それから客一同に杯を廻し、又毒の禁厭のしてある御馳走を遠慮會釋もなく、心地よく

平げてしまつた。さうして珍彦は妻子を引き連れ、厚く禮を述べて館へ歸つた。

初稚姫も高姫が「ゆつくり楓さまと遊んで来い」と云ふので、これ幸と珍彦館に至り、素知らぬ顔をしているいろいろのお道の話をして居た。

高姫は、四人の出て往つた後を篤りと見送り、再び障子襖をたて切り獨り言、



「ああ、たうとう願望成就の曙光を認めた。やつぱり常世姫の御魂は偉いものだなア、ああしておけば自然弱りに智慧は鈍り體は潰え、人望は落ちるのは目のあたりだ。ああ氣味のよい事だなア。ああ今日より此常世姫は枕を高うして寝る事が出来る。ああ惟神靈幸倍坐世。神様、あなたの御神力によつて邪魔者が亡びますれば、此高姫は千騎一騎の活動を致しまして、天晴手柄を致して御目にかけてませう。ああ何だか今日位心地のよい日はムいませぬわい」

とほくほく喜び、嫌らしき笑を漏らして居る。腹中より、

「オイ高姫の肉體、どうだ。此方の智略縦横のやり方には降参しただらうなア」

「シツ、又しても出しやばるのか。祕密は何處迄も祕密ぢやないか。肝腎の時になつて仕様もない事を口走つて見よ、この肉體が承知を致さぬから」

「イヒヒヒヒヒ、オイ黒、八、テク、蟆、大蛇、猿の連中、どうだ、この金毛丸尾のやり方は實に偉いものだらう。水も漏らさぬ此方の仕組、サアこれから瑞の御靈の教を片端から打ち碎き、俺達の世界にするのだ。何と心地よき事ではあるまいかなア、エへへへへへ」

又腹中より種々の聲が出て、

「有難う存じます有難う存じます、金毛九尾様、恐れ入つてムります。これから何事も九尾様の御命令に従ひます。此蟻公も一切萬事今後は御指揮に従ひます」と一句々々聲のいろが變つて聞えて來る。

「こりや、腹の中の我羅苦多共、何をつべこべと大事の事を吐くのか。沈黙致さぬか」

「アハハハハハ、どうもはや常世姫の肉體には、此方も恐れ入つたぞや。ほんに確りした肉體ぢや。この肉體さへあれば五六七神政を妨害し、忽ち惡魔の世と立替へるのは火を睹るよりも明かな事實だ。思へば思へば心地よやなア、エへへへへへ」

「こりや、皆の守護神共、靜にせいと申せばなぜ靜に致さぬのか。困つた奴だなア。さうして其方は今の五六七の世を妨害して闇の世界にすると申したな、何と云ふ不心得の事を申す……サアもう常世姫の肉體は貴様等には借さぬから、エー出て呉れ、シツシツシツ」

第四篇

神犬の言葉

「イヒヒヒヒヒ、何と云つても此肉宮を歸ぬ事は嫌だよ」  
「それなら早く改心を致して、五六七神政の御神業に参加致すと申すか。サア早く返答を聞かせ」

腹の中より、七八種の聲、一時に起り、

「アハハハ、イヒヒヒ、ウフフフ、エヘヘヘ、オホホホ、カカカカ、キキキキ、クククク、ケケケケ、ココココ、パパパパ、チチチチ、キヒヒヒヒヒ」

戸の外にはウーウーウーウーウーと、怖ろしきスマートの吠える聲、高姫は頭をかかへて慄ひ上る。腹の中の澤山の聲は水を打つた様に一時にピタリと止まつてしまつた。スマートは益々戸外にウーウーと唸り立てて居る。

(大正一二・一・二一 舊一一・一二・五 加藤明子録)

第一五章 妖幻坊（一三〇九）

春雨の降りしきるシンミリとした窓の中、四邊の空氣も和らいで、物に熱し易い高姫の頭はどことはなしにポカポカと助炭の上に坐つた様な心持がする。高姫は腹中に潜める澤山のお客さまと、徒然の餘り、齋苑の館を占領すべき空想を描いて、獨り笑壺に入つてゐる。腹の中から義理天上と稱する兇靈は、何とはなしに此頃は元氣がよい。それは初稚姫が高姫の命令によつて、珍彦館に籠居し、暫く神殿又は大廣前に姿を現はす事を禁じられ、且スマートを追ひ返したと云ふ喜びからである。併しながらスマートは變現出沒自由自在の靈獸なれば、決して何處へも行つては居ない。只初稚姫の身邊近く侍し、人の足音が聞えた時は、早くも悟つて床下に身を隠すことを努めてゐたのである。高姫は一絃琴を取出して歌ひ始めた。無論高姫は琴などを弾く様な藝は持つてゐない。憑依してゐる蟆先生が肉體を自由自在に使つて、琴を弾るのであつた。

□ チンチンシヤン、シヤツチンシヤツチン、シヤツチン、シヤツチン、チンチン

春雨にしつぱり濡るる露の袖  
こつちが戀ふれば空助さまも  
同じ思ひの戀心

チンチンチン、シヤン……シヤンシヤン、シヤツチン、チンチリチン、チン  
チン

すれつ、もつれつ、袖と袖

會うて嬉しき此館

玉國別の身魂をば

此高姫を守護する

義理天上日出神

深い仕組に操られ

やうやう此處に宮柱

太しき建てて神々を

齋きまつりて珍彦や

静子しづこの方かたを後あとにおき

宮みやの司つかさと相定あひさだめ

後白浪あとしらなみと道晴みちはる別わけ

其他そのたの家來けらいを引連ひきつれて

何處どこをあてとも永ながの旅たび

出いで行ゆく後あとにいり來きたる

神力しんりきむさう無雙もくすけの空助あさま

身魂みたまの合あうた高姫たかひめが

昔むかしの昔むかしの大昔おほむかし

神かみの結むすびし縁えにしにて

やうやう此處ここに巡めぐり會あひ

其神徳そのしんとくを世よの人ひとに

鼻高姫はなたかひめとホコラの森もり

二世にせも三世さんせも先さきの世よかけて

自由自在の麻邇寶珠

嚴の身魂の玉椿

八千代の春を樂しみに

二人の仲は岩と岩

堅き契を結び昆布

神樂舞をば鯛の夫婦

實にも樂しき吾身の上

空助さまも嘸や嘸

嬉しい事で……あらう程に

思へば思へば惟神

日出神の引合せ

嚴の御靈の御守り

瑞の御靈の惡神が

千々に心を配りつつ

妨さまたげなせど神力しんりきの

充みちたらひたる夫婦ふうふが企たくみ

とても破やぶれぬ悲かなしさに

今いまは火ひとなり蛇じゃとなりて

心こころをいらち胸むねこがし

騒さわぎまはるぞ……いぢらしき。

シヤツチン シヤツチン、シヤツチンチン シヤツチンチン、チーンリンチン、

チンリン チンリン チンツ、シヤーン シヤーン

と弾ひき終をはり、一いち絃げん琴きんを傍かたはらに直なほし、膝ひざの上うへに兩りやう手てをキチンとついて、床とこの間まの自じ筆ひつ

の掛かけ軸ちくを眺ながめながら、

「ホホホホ」

と嬉うれしげに笑わらひ興きようずる。妖えう幻げん坊ぼうは廁かはやから廊らう下かをドシンドシんと、きつい足あし音おとさせ

ながら襖ふすまをあけて入いり来きたり、

「高たか姫ひめ、お前まへは不ふ思し議ぎな隠かくし藝げいを持もつてゐるのだな。俺おれは又またそんな陽やう氣きな事ことはチ



ツとも知らない、信仰一途の熱狂女だと思つてゐたよ。イヤもう感心した」

「ホホホホ、能ある鷹は爪かくすと云ひましてな。今迄此高ちやまも、爪をかくして居つたのだが、今日は此通り春雨で、何とはなしに心が淋しいやうでもあり、花やかなやうでもあり、お琴をひくには大變に天地と調和が取れるやうな氣分になつたものですから、久し振で一寸爪弾きをやつてみましたのよ」

「情趣こまやかに四邊の空氣を動搖させ、次いで此空助の心臓迄が非常に動揺したよ。俺も今迄永らくの間、齋苑の館に御用をして居つたが、二絃琴の音はいつも聞いて居るけれど、一絃琴はまだ聞き始めだ。一筋の絲の方が餘程雅味があるねえ。一筋繩ではいかぬお前だと思つてゐたが、到頭正體が現はれよつたなア。

アツハハハハ」

「コレ空助さま、餘り擲掬つて下さるなや」

「カラが勝たうが日本が勝たうが、そんなこたチツとも頓着ないのだ。兔角浮世は色と酒だからなア。オイ高ちやま、一杯注いでくれないか」

「空助さま、貴郎は酒ばかり呑んで居つて、一度も神様に拜禮をなさつた事はな

いぢやありませぬか。神様にお仕へする者が、それ程無性では、皆の者の信仰をつなぐ事が出来ぬぢやありませぬか。貴郎が模範を示さなくちや、役員や信者迄が神様の御拜禮をおるそかにして困るぢやありませぬか」

「俺は齋苑の館に居つても總務をやつて居つたのだ。總務といふものは一切の事務を總理するものだ。祭典や拜禮などは、又それ相當の役員にさせばいいのだ。

ここには珍彦といふ神司が置いてあるのだから、俺はマア遠慮しておこかい。何だか神様の前へ行くと恐ろしい……イヤイヤ恐ろしく靈がかかるので、又大きな聲でも出しちや皆の者がビツクリするからなア。それで實は拜みたくつて仕方がないのだが、辛抱して御遠慮して居るのだ。吾々の身魂は靈國の天人だから、神教宣傳の天職が備はつてをるのだ。祭典や拜禮は天國天人の身魂の御用だ。神界には、お前も知つてあるだらうが、互に其範圍を犯す事は出来ない嚴しい規則が惟神的に定められてあるからな」

「成程、それでお前さまは拜禮をなさらぬのだな。さうすると私は靈國天人ですか、天國天人ですか、何方だと思ひますか」

「勿論お前だつて、ヤツパリ靈國の天人だよ。それならばこそ義理天上さまが、毎日守護神人民に教ふる爲に、神諭をお書きなさるぢやないか。其生宮たるお前はヤツパリ相應の理によつて、肉體的靈國天人だからなア」

「流石は空助さま、偉いものだなア。何だか私も此間から拜禮が厭になつて仕方がないのよ。又曲津が腹の中へ這入つて來やがつて、大神様を恐れるので、こんな氣になつたのかと心配して居りました。併し、貴郎の説明に依つて何も彼も身魂の因縁がハツキリと分りました。ヤツパリさうすると、此高姫は偉いものだなア」

「そりやさうとも、空助さまの女房になる位な神格者だからなア、お前も亦これでチツと筆先の材料が出来たらう」

「ヘン、馬鹿にして下さいますなや。人に教へて貰うて、筆先なんか書きますものか」

「それでも見てゐよ。キツとお前の筆先に現はれて來るよ。俺がこれだけお前に聞かしておく、義理天上さまが成程と合點して、キツと明日あたりから、靈國

の天人といふお筆先を御書きなさるに違ないワ。何せよ、模倣するのに長じてゐる肉宮だからなア」

「お前さまが今言つた言葉は、決してお前さまの力ぢやありませんぞや。義理天上さまがお前さまの身魂を御使つて此高姫に氣をつけなされたのだよ。これ位な道理が分らぬ様な空助さまぢやありますまい。お前さまが、こんな事を仰有るやうになつたのもヤツパリ時節だ。高姫に筆先を書かす爲に、義理天上様が、お前さまの口を借つて一寸言はせなされたのだから、これからの筆先はよつぽど奇抜なものゝが現はれますで、マア見てゐなさい。お前さまだけにはソツと見せて上げますワ」

「ハツハハハ、また出来上りましたら拜讀を願ひませうかい」

「空助さま、一寸俄に神界の御用が忙がしうなつたから、貴郎はお居間へ行つて、お酒でもあがつて休んでみて下さい。お前さまが側にゐられると、思はし筆先が書けませぬからなア」

「ハツハハハ、お筆先の偽作を遊ばすのに、私が居るとお邪魔になりますかな。」

それなら謹んで罷りさがりませう。御用がムいましたら、御遠慮なくお召し出し下さいますれば、鶴の一聲、宙を飛んで御前に伺候致しまする。ハハハハ、高ちやま、アバヨ」

と腮をしゃくり腰を振り、ピシヤツと襖を締めて、吾居間へ歸りゆく。そして中から突張りをかへ、怪物の正體を現はしてグウグウと鼾をかいて寝て了つた。

高姫は俄に墨をすり、先のちびれた筆をキシヤキシヤとしがみ、墨をダブツとつけて一生懸命に書き始めた。一時ばかりかかつて書き終り、キチンと机の上つくえに載せ獨言、

「義理天上さまも追々御出世を遊ばし、お書きなされる事が大變に變つて來た。こんな結構な教は人に見せるのも惜しいやうだ。併し之をイル、イク、サール、ハル、テルの幹部に讀ましておかぬと、高姫の肉宮を安く思つて仕方がない。又肝腎の事が分らないではお仕組の成就が遅くなつて、どもならぬから、惜しいけれど、一つ此處へ呼んで來て拜讀させてやらうかな。初稚姫にも聞かしてやれば改心するであらうか……イヤイヤ待て待てモウ暫く隠しておかう、發根と改心が出来た

ら讀むやうになるだらう。何だか初稚姫は、私の筆先を心の底から信用してゐない様な心持がするから、讀めと云つたら讀むではあらうが、身魂の性來が悪いから、充分に腹へは這入るまい。空助さまの教だと云へば、聞くかも知れぬが、さうすると日出神の神力がないやうにあつて、都合が悪いなり……困つた事だなア。待て待て、一つこれは考へねばなるまい。ウーン成程々々、イルに大きな聲で拜讀さしてやらう。そして珍彦の館へ、あの受付からならば突き抜けるやうに聞えるのだから、此結構なお筆を耳に入れたならば、イツかな分らぬ初稚姫も、成程と耳をすませ改心するに違ひない、此筆先で押へつけるに限る」

とニコニコしながら、書いた筆先二十枚綴を三冊ばかり、三寶に載せ、目八分に捧げ、襖をスツと開け、ソロリソロリと勿體らしく受付指して進み行く。受付では擔當者のイルを始め、ハル、テル、其他の連中が胡坐をかいて自慢話に耽つてゐる。

ハル「オイ、イルさま、お前一體此受付で偉さうにシヤチ張つて居るが、月給は幾ら貰つて居るのだい」

「まだ珍彦さまが、定めて下さらぬのだ。ナア二別に神様の御用するのだから、何なつとヒダルないやうにして貰へさへすりや、月給なんかいらぬよ。結構な神様の御用をするならば、獻勞の積で、無報酬で御用さして頂きたい。併しなから高姫なんかの指圖を受けねばならぬとすれば、相當の給料を貰はないと厭だなア」

「それなら幾ら欲しいと云ふのだい」

「マア一ヶ月十圓位で結構だ」

「貴様、バラモン教ではモチと澤山に貰うてみたぢやないか」

「さうだ、五十圓に一圓足らずで、四十九圓の月給だ。アハハハハ、ハル……併しお前は幾ら頂戴して居つた」

「俺かい、俺はザツと十八圓だ」

「成程、それでは毎日九圓々々の泣暮しだな、エへへへへ」

「と他愛もなく話に耽つてゐる。そこへ高姫は三寶に今書いたばかりの、まだ墨も乾いてゐないポトポトした筆先を目八分に捧げて入り来り、」

「コレ、皆さま、何を云つて居るのだい。お前さま達は、神様の御精神がチツとも分らぬ八衢人間だから困つて了ふ。受付といふものは、一番大切なお役ぢやぞえ。奥に居る大將は假令少々位天保錢でも、受付さへシツカリしてさへ居れば、立派な御神徳が現はれるのだ。ここへ立寄る人民が、受付の立派なのを見て……あああ、受付でさへもこんな立派な人間が居るのだから、この教主は偉い者だらう……と直覺する様になるのだ。をかしげな、譯の分らぬ人間が受付に居らうものなら、何程教主が立派な神徳があつてもサツパリ駄目だからな。今義理天上様から、結構な結構なお筆先が出たによつて、ここで之を拜讀いて、ギユツと腹に締め込みておきなされ。そして立寄る人民に此お筆先を讀んで聞かすのだよ。併しお直筆は勿體ないから、お前さまがここで寫して控をとり、お直筆をすぐ返して下され。結構な事が書いてあるぞや」

イル「ハイ、それは何より有難うムります。早速寫さして頂きました、拜讀さして貰ひます」

「ヨシヨシ、併しながら讀む時には、珍彦さまの館へ透き通るやうな聲で、讀ん



で下されやくだ」

「此お筆先はまだズクズクに濡れて居りますな、只今お書きになつたのですか」  
「ああさうだよ。今書いたとこだ。結構なお蔭を、ぢきぢきにお前に授けるのだから、神様に御禮を申しなさいや」

「エエ一寸高姫さまにお伺ひしておきますが、此お筆先は今書いたと仰有いましたね。それに日附は去年の八月ぢやありませんか。貴女は八月頃には此處に居られたやうに思ひませぬがなア」

「そこは神界のお仕組があつて、日日が去年にしてあるのだよ」  
「さうすると、貴女は空助さまに教へて貰つたのですな。それを教へて貰うてから書いたと云はれちや、義理天上様の御神徳が落ちると思つて、空助さまに聞くより先に知つて居つたといふお仕組ですな。成程流石は抜目のない高姫さまだワ

イ

「コレ、譯も知らずに何を言ふのだい。義理天上様が、去年からチヤンと神界で書いて置かれたのだ。肉體が忙しいものだから、肉體の方が遅れて居つたのだよ。」

お前達は靈界の事が分らぬからそんな理窟を言ふのだよ。何事も素直にいたすが結構だぞえ。それが改心と申すのだからな」

「エツへへへへ、さうでがすかなア、イヤもう恐れ入りました、感心致しました、驚きました、呆れました、愛想が……盡きませぬでした。有難うムいました」

「コレ、イルさま、ましたと、そら何を云つてるのだい」

「エーン、あの、何でムいます、ました……と云うたのです。つまり要するに、日出神様のお筆先は、嚴の御靈のお筆先よりも幾層倍マシだと思ひまして、へへへ一寸口が迂りましたしてムります。餘り立派な事が書いてあるので、呆れたのでムいます」

「コレ、まだ読みもせない癖に、どんな事が書いてある……分るかなア」

「へ、エ、そこがそれ、天眼通が利くものですから、眼光紙背に徹すと申しまして、チャンと分つて居ります」

「さう慢心するものぢやありませんぞや。サ、早く寫していただきなさい」と少しく顔面に誇りを見せて、反身になつてゾロリゾロリと天下を握つた様な態

度で、おのが居間へと歸り行くのであつた。

(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 松村眞澄録)

第一六章 鷹鷲掴 (一三一〇)

イルは冷笑を泛べながら、高姫の御機嫌取りの爲に、一間に入つて大速度にて書き寫し、直様に直筆を右の手にひん握り、左の手に三寶を掴んで高姫の居間の前まで到り、元の通りキチンと叮嚀にのせ、目八分に捧げ、襖の外から言葉もいと莊重に、

日出神の義理天上、只今御入來、アイヤ、高姫殿、此襖をあけめされよ  
と呼ばはつた。高姫は餘り莊重な言葉に、ハテ不思議と襖をサツとあけ見れば、イルは筆先を載せた三寶を恭しく捧げ立つてゐる。

何だ、お前はイルぢやないか。腹の悪い、私を吃驚させたがなア。ヘン日出神

なんて、偉さうに云ふものぢやないワ。日出神様は此高姫の體內にお鎮まり遊ばすぞや。お前さまのやうなお方に、何うしてお鎮まり遊ばすものか」

イルは立ちはだかつたまま、

「アイヤ、高姫、よつく承はれ。日出神は汝が體內に宿ることもあり、又筆先に宿る事もあるぞよ。このイルに持たせた筆先は即ち日出神の御神體であるぞよ。或時は高姫の體內に宿り、或時は筆先に宿り、イルの肉體を以て之を守らせあれば、只今のイルは即ち義理天上日出神の生宮であるぞよ。粗末に致すと罰が當るぞよ。取違ひを致すでないぞよ。アフンと致して目眩が来るぞよ。日出神に間違ひはないぞよ。おちぶれ者を侮ることはならぬぞよ。何んな御方に御用がさしてあるか分らぬぞよ」

「ああ、とうと、日出神様の御神徳に打たれて半氣違ひになりよつた。これだから猫に小判、豚に眞珠といふのだ。サ早く此方へかきなされ、日出神が二人も出來たら治まらぬからな」

と矢庭にパツと引たくらうとする。イルはワザとに三寶を握り締めた。高姫は力

をこめて、グツと引いた拍子に、三寶の表と脚とがメキメキと音を立てて二つになつた。其勢に筆先は宙を掠めて、ゴンゴンといこつてゐた炭火の中へパツと落ちた。忽ち三冊のお筆先は黒き煙りの龍となつて天に昇つて了つた。

「ああ、何の事ぢや、これ、イル、何うして下さる。折角神様がお書き遊ばしたお直筆を、サツパリ煙りにして了つたぢやないか」

「何と日出神様はえらいものですな。たうとう結構な御神體が現はれました。貴女も御存じの通り、火鉢から火が出て日出神となり、あの通り黒い龍となり、煙りに包まれて天上なされました。イヤ煙ではなからう、朝霧夕霧といふギリでせう。それだから義理天上日出神が御龍體を現はして天上なされました。何とマア貴女は御神徳が高姫さまでムいますな。エへへへ、イヤもう感じ入りましてムいます」

と口から出任せに高姫を揶揄半分に褒めそやした。高姫は怒らうと思つて居つたが、イルの頓智に巻き込まれ、嬉しいやうな腹立たしいやうな、妙な氣分になつて、胸を撫でおろし、

「お直筆は天上なさつたが、併しまアマア結構だ。お前が寫しておいてくれたから、マ一度書き直さして頂かうかな。滅多にあんな結構なお筆先は出るものぢやないからな。コレ、イルヤ、早くあのお筆先の寫しを、ここへ持つて来てくれ」

「ヘーエ、寫さして頂かうと思ひましたが、何分御神徳が高いお筆先だものですから、後光がさしまして、サツパリ目がくらみ、一字々々其文字が鎌首を立てて、龍神さまになつて動くやうに見えるものですもの、到底吾々の如き神徳のない者では、寫すことは愚か拜讀くでさへも目がマクマク致します。それでお前さまに寫して頂かうと思つて、此通り御神體をここ迄送つて來たのでムいます」

と擲揄好のイルは、其實スツクリ寫し取つて居ながら、ワザとこんな事を云ふ。

「エーエ、氣の利かぬことだなア、お前が能う寫さな、なぜ他の者に寫ささなかつたのだい」

「それでもイルに寫せよと、貴女が御命令をお下しになつたものですから、日出神様のお言葉には背かれなれないと思つて、他の者には見せませなんだのですよ」

「エーエ、氣の利かぬ男だな。あああ、どうしたらいいかしらぬて……お前さま

は暫く謹慎の爲、彼方へ控へて居りなさい。そして受付はハルに申付ける。こんな不調法を致して、よい氣で居るといふ事があるものかいな」

「ハイ、仕方がムいませぬ。併しながら私の守護神が靈界で寫したかも知れませぬから、もし出て來ましたら、勘忍して下さるでせうなア」

「馬鹿な事を言ひなさるな。お前等の守護神がそんな事が書いてたまりますか。此高姫でさへも守護神が書くといふ事は出來ぬ故に、此生宮の手を通してお書きなさるのだ。エエ氣色の悪い、彼方へ行つて下され。お前さまの面を見るのも胸クソが悪い。結構な結構なお筆先を三冊まで燃やして了うて、どうしてこれが神様に申譯が立ちますか」

「靈國の天人に會はうと思つて、義理天上さまが化相の術を以て、天上なさつたのかも知れませぬよ。さう氣投げしたものでやムいませぬワイ」

「エー喧しい、彼方へ行きなされ。グツグツ致して居ると、此筈が御見舞ひ申すぞや」

と顔を眞赤にし、捨鉢氣味になり、半狂亂になつて呶鳴り散らすのであつた。イ

ルは、

「ハイ」

と一言残し、匆々に襖を開け閉めし、首をすくめ、舌を出し、腮をしゃくりながら受付へ足音を忍ばせ歸つて来た。受付にはハル、テル、イク、サールの四人が筆先の寫しをゲラゲラ笑ひながら讀んでゐる。

「オイ、そんな大きな聲で笑つてくれな、今義理天上が大變に怒つてゐるからなハル」  
「ナア二、怒る事があらうかい。早く寫して腹へ締め込みておいて下されよ……」  
と云つて歸つたぢやないか。今一生懸命に他人の禪を締めこみてゐる所だ。

アハハハハ

「サール」これ程分りにくい文字を寫させておいて、何の爲に高姫さまが、それ程怒るのだい。怒る位ならなぜ寫せと云つたのだ。本當に譯の分らぬ事をぬかさじやないか」

「ナア二、そりやそれでいいのだが、高姫の奴、とうと、過つて三冊の筆先を火の中へおとし、焼いて了ひよつたのだ。それで大變に御機嫌が悪いのだよ」



「イヒヒヒヒ、そりやいい氣味だねえ、随分妙な面をしただらう」

「丸きり、竈の上の不動さまを焼杭でくらはした時のやうな面をしようつて、きつく睨みようつた。そして其寫しがあるだらうから、すぐ持つて来いと云ひよつたので、俺は餘り劫腹だから、あのお筆先は御威勢が高うて後光がさし、一字々々文字が活躍して、鎌首を立て龍神になつて這ひ廻るやうに見えたから、能う寫しませなんだ……とやつた所、流石の高姫も眞青の面して、其失望、落膽さ加減、實に痛快だつたよ。それだから大きな聲で讀むなと云ふのだ」

「アハハハハ、成程、其奴ア面白い。オイ皆の奴、此處で一つ大聲を張上げて讀んだるか」

「そんな事したら、高姫がガンづくぢやないか」

「なアに、俺が廊下に見張をしてゐるから、向ふへ聞えるやうに讀むのだ。そして高姫が来ようつたら、筆先を尻の下へかくし、素知らぬ顔してるのだ。今讀んで居つたぢやないかと云ひよつたら、イルの腹の中へ義理天上さまがお這入りになつて、あんな大きな聲でお筆先を讀まれた……とかませばいいぢやないか」

「なアる程、妙案だ、それでは俺が一つ読んでやらうかなア」  
とサールを廊下に立番させ、ハル、テル、イクを前に坐らせ、イルはワザと大聲を出して読み始めた。

「義理天上日出神の誠正まつ、生粹の五六七神政の筆先であるぞよ。高姫の肉宮は、昔の昔の根本の神代から、因縁ありて、神が御用に使うて居りたぞよ。この肉體は高天原の第一の靈國の天人の身魂であるぞよ。高姫の身魂と引添うて、三千世界の守護がさしてありたぞよ。それについては空助殿の身魂もヤツパリ靈國天人の生粹の身魂であるぞよ。靈國の天人の靈は結構な神の教を致す御役であるぞよ。祭典や拜禮などを致す靈は、天國天人の御用であるぞよ。併し乍ら世が曇りて、天人の靈は一人もなくなり、八衢人間が神の御用を致して居るぞよ。世界の人民は皆地獄の餓鬼の靈や畜生道の靈ばかりであるから、此世がサツパリ曇りて了うたぞよ。夜の守護であるぞよ。此暗くもの世を日の出の守護といたす爲に、義理天上が因縁のある高姫の身魂を生宮と致して、三千世界を構ふ時節が参りたぞよ。變性男子の靈は日出神が現はれるについて、神から先走りに出してあ

りたぞよ。そして變性女子の靈は此世を曇らす靈であるぞよ。此儘にしておいたなれば、此世は泥海になるより仕様がなないぞよ。三千世界の救世主は此高姫より外にないぞよ。それについては空助殿の靈は夫婦の靈であるから、高姫と引添うて御用させるやうに天の大神からの御仕組であるぞよ。初稚姫は空助の御子であるけれども、靈の親子ではないぞよ。高姫も肉體上母子となりて居るなれど、靈から申せば天地の相違があるぞよ。高姫は一番高い靈國の天人の靈であるなれど、初稚姫は八衢の靈であるから、到底、一通りでは側へも寄りつけぬなれども、肉體が何を云うても、憐れみ深い結構な人間ぢやによつて、初稚姫を吾子と致して居るぞよ。初稚姫殿も改心を致されよ。空助の子ぢやと申して慢心致すでないぞよ。それについてはイル、イク、サール、ハル、テル殿に結構な御用を致さすぞよ。此筆先は火にも焼けず水にも溺れぬ金剛不壞の如意寶珠であるから、粗末に致したら目眩が来るぞよ。珍彦の靈も静子の靈も誠に因縁の悪い靈であるぞよ。其中から生れた楓は、誠に了簡の悪い豆狸の守護神であるから、三人共に神が國替を致さして、神界でそれぞれの御用を仰せつけるぞよ。此筆先に書いた事は間

違はないぞよ。初稚姫も改心を致して下さらぬと、何時舟が覆るか分らぬぞよ。  
可哀相な者なれど、靈で御用さすより仕様がなないぞよ。虬の靈であるから、今迄  
はばりてをりたなれど、善惡の立別かる時節が参りて、高姫が此處へ現はれた以  
上は、到底叶はぬぞよ。皆の者よ、此筆先をよく腹へ締め込みておいて下されよ。  
空助殿と高姫と夫婦になりたと申して、チヨコチヨコとせせら笑ひを致して居る  
なれど、人民の知りた事でないぞよ。神は何處迄も氣を引くから、取違を致さぬ  
やうに御用心なされよ。義理天上日出神の筆先は一分一厘間違ひはないぞよ。高  
天原の靈國の天人の一番天上の身魂であるぞよ。又空助殿には大廣木正宗殿の靈  
が授けてあるぞよ。今迄は摩利支天の靈が憑りて居りたなれど、神界の都合によ  
り、義理天上の命令により、大廣木正宗の御用をさして、常世姫の肉宮と、末代  
の結構な御用を致させるから、空助殿が何事を致しても申してもゴテゴテ申すで  
ないぞよ。又初稚姫は私の強き靈なれども、日出神の神力に、トウトウ往生致し  
て、四つ足のスマートを齋苑の館へ追ひ返したのは、まだしも結構であるぞよ。  
これからスマートを一息でも、此祠の森の大門へよこしてみよれ、初稚姫の體は

ビクとも動かぬやうに致してみせるぞよ。空助殿は靈が水晶であるから、四つ足が来るのは大變御嫌ひ遊ばすぞよ。初稚姫が四つ足を連れて参りたトガメに依つて神罰を蒙り、命がなくなる所でありたなれど、神の慈悲によりて、空助殿を身代りに立て、チツと許り疵を致させ許してやりたぞよ。これをみて初稚姫殿改心致されよ。神の御恩と親の御恩とが分らぬやうな事では、誠の神の側へは寄りつけぬぞよ。餘り慢心が強いので親の側へ寄れぬぞよ。其方の改心が出来たなれば、義理天上が取持致して、空助殿に會はしてやるぞよ。早く靈を研いて下されよ、神が前つ前つに氣をつけるぞよ。義理天上日出神の申す事に間違ひはないぞよ。此筆先は義理天上の生神が高姫の生宮に這入りて書いたのであるから、日出神の御神體其儘であるから、粗末には致されぬぞよ。もし疑ふなら、火鉢にくべてみよれ、焼けは致さぬぞよ。それで誠の生神といふ事が分るぞよ。ぢやと申して、汚れた人民の手で、いらうたら、焼けぬとも限らぬから、餘程大切に清らかにして下されよ』

と讀み了り、

「ハツハハハ、甘い事仰有るワイ、火にも焼けぬ水にも溺れぬと仰有った筆先が、パツと焼けたのだからたまらぬワイ。イヒヒヒヒ、これでは日出神も、サツパリ駄目だなア」

サール「それでも……汚れた人民が觸りたら、焼けるかも知れぬぞよ……と書いてあつたぢやないか」

「ハハハ、そこが高姫の豫防線だ。引掛戻しの所謂仕組をやつてゐよるのだ。兔も角小氣味のよい事だなア」

サールは、いつの間にやら廊下の見張を忘れて、イルの前に頭を鳩め聞いて居た。そこへ高姫が筆先の聲を聞付けて、足音忍ばせ、半分餘り末の方を障子の外から聞き終り、

「コレ、お前達、今何を言つてゐたのだい」

この聲に、イルは驚いて尻の下に隠し、素知らぬ顔して其上に坐つてゐる。

「コレ、此障子一寸あけておくれ、今何を云つてゐたのだい。お筆先を拜讀いて居つたのだらう。そして大變に義理天上さまの悪口を云つて居つたぢやないか」

イルは小聲で、

「オイ、サール、貴様番をすると吐しよつて、こんな所へ這入つてけつかるものだから、これ見る、とうと見付けられたでないか」

「ウン、マア仕方がないサ、……ヤア高姫様、ようこそお出で下されました。サ、お這入り下さいませ」

と突張のかうてあつた障子をサツと開いた。高姫は受付の間へ又ツと這入つて來た。

「コレ、イルさま、お前、筆先を寫さぬと云つただないか。今讀んで居つたのは何だいなア」

「ハイ、日出神様が、お前の體内にイルと仰有いまして、暫くすると、あんな事を私の口から仰有つたのでムいます。誠に結構な御神勅でムいましたよ。そして又蟻の守護神が私の肉體に這入り、高姫様や天上様の悪い事を申しますので、イヤもう困りました。何卒一つ鎮魂をして下さいな」

「日出神さまなどと、惡神がお前を騙して眞似を致すのだらう。それだからシツ

カリ致さぬと悪魔に狙はれると、何時も申してあらうがな。エー工困つた事だ、サ、そこを一寸お立ちなされ。日出神が鎮魂をして上げるから……」

「イー、ウーン、一寸ここは退く譯には行きませぬ、尻に白根が下りましたので、痺が切れて何うする事も出来ませぬ。何卒又後から鎮魂して下さいな。ああ高姫さま、あの外を御覧なさいませ、大きな鷲が子供をくはへて、それそれ通りますと高姫の視線を外へ向け、手早く尻に敷いた寫しの筆先を懐へ捻ぢ込み、席を替へようとした。されど餘り慌てて、二冊は甘く懐へ這入つたが、まだ一冊尻の下に残つて居る。」

「コレ、イル、そんな事を申して、此高姫を外を向かせておき、其間に何だか懐へ隠したぢやらう、サ、其懐を見せて御覧」

「へー、此の懐は私の懐でムいます。何程一軒の内に住居して居つても、懐は別ですからな。珍彦様が會計して下さいるので、私の懐まで御詮議は要りません」

「一寸、お前さま、妙なものが憑つてゐるから、鎮魂して上げよう。私が坐らにやならぬから、一寸退いて下さい。お前さまが一番正座へ坐ると云ふ事は道が違



ひますぞや」

「ハイ、承知致しました。ああ空助さまが門を通らつしやるわいな」

と云ひながら、尻の下の残りの筆先をグツと取り、懐へ入れようとした。高姫は今度は其手に乗らず、イルの態度を熟視して居つたから、たまらぬ。矢庭にイルの懐へ手を入れ、三冊の寫しの筆先を掴み出し、キリキリと丸めて、イルの鼻といはず、目と云はず、滅多打に打据ゑ、

「オホホホ、悪の企みの現はれ口、日出神には叶ひますまいがな。頓て沙汰を致すから、其處に待つて居るがよからうぞ。イク、ハル、テル、サールも同類だ。今に空助さまと相談して、沙汰を致すから待つてゐなさい」

と憎々しげに睨みつけ、懐に捻ぢ込んで、サツサと吾居間に歸り行く。後見送つて五人は頭を掻き、冷汗を拭きながら、

「あああ、サーツパリ源助だ、ウンウン、イヒヒヒ」

(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 松村眞澄録)

第一七章 偽筆（一三一—）

高姫の形勢意外にも不穩の景況を呈し、何時低氣壓の襲來するやも圖り難き殺風景の場面となつて來た。イル以下四人は自棄糞になり、グイグイと又もや酒を飲み始めた。そしてイルは大きな聲で、

「義理天上日出神の生宮であるぞよ。結構な結構な筆先を生宮に書かすによつて、筆と墨と紙との用意を致されよ」

と唸鳴り出した。サールは矢庭に墨をすり、紙を綴ぢ筆を洗つて恭しくイルに渡した。イルは故意と横柄面をしながら其筆をひつたくり、木机を前に置き、何事か首をふりながら一生懸命に書きつけた。イルは高姫の作り聲をして、

「これ皆の者共、否八衢人足や、今義理天上日出神がお筆先を書いたによつて、有難く拜讀を致すがよいぞや。斯んな結構な筆先は又と見ることは出來ぬぞや。

此筆先さへ腹へ入れこめて居れば、萬劫末代人が叩き落しても落ちぬお神徳が頂けるぞや。イヒヒヒヒヒ、此筆先は誰にも讀まず筆先ではないぞや。後の證據に

書かして置いたなれど、受付に居る役員が肝腎の事を知らぬと話がないから、一寸讀ましてやるぞよ」

サール「アハハハハ、何を吐しやがるのだい。管を巻きやがつて、然し何んな事を書きよつたか。一寸讀んでやらうかい。おい、ハル、テル、イク、謹聽するのだぞ」

と云ひながら恭しく押戴き、故意と剋面な顔をして大きな聲で讀み始めた。

「伊豆の靈變性男子がイルの肉體を借りて三千世界の事を書きおくぞよ。しつかりと聞いて置かぬと後で後悔致す事が出来るぞよ。此イルは伊豆の靈と申して湯本館の安藤唯夫殿の身魂が憑りて居るぞよ。サールの身魂は杉山當一殿のラマ教の時の身魂であるぞよ。今はバラモン教をやめて三五教に這入りて居るなれど、何を申しても變性女子のヤンチャ身魂が憑りて居るから、過激な事を申して仕様がなないぞよ。此義理天上日出神の伊豆の身魂が申した位では中々聞きは致さぬぞよ。ラジオシンターでも飲まして目を覺してやらぬ事には駄目だぞよ。それでも治らねば谷口清水と申すドクトル・オブ・メヂチーネの御厄介になるが良いぞよ。

伊豆の湯ヶ島には因縁があるぞよ。湯本館と云ふ因縁の分りたものは此高姫、オツト、ドツコイ日出神の生宮のイルでないと分りは致さぬぞよ。それぢやによつて澤山の人民が水晶の温泉にイルの身魂と申すぞよ。今の内に改心を致さぬとサールもハルもテルもイクも、皆ア才彦の身魂の憑りて居る北村隆光に書きとめさして置いて、末代名を残さして置くぞよ。それでも改心を致さねば摩利支天の身魂の憑りて居る松村眞澄に細かう書き残さすぞよ。それで足らねば夕日の御影、加藤竿竹姫の身魂の手を借りて書き残さすぞよ。義理天上日出神の生宮は蟆の身魂の憑りた黒姫と因縁ありて、伊豆の御魂の御屋敷へ暫らく逗留致し、昔からの因縁を調べておいたぞよ。開いた口がすばまらぬ、牛糞が天下をとると云ふ事が出来るぞよ。あんまり聞かぬと浅田の様に首もまはらぬ様に致すぞよ。浅田殿は御苦勞な御役であるぞよ。そして其身魂はテルの身魂であるから、ラジオシンターをつけ過ぎて困りてをるぞよ。それでも此イルが申す様に致したならば、直に癒してやるかも知れぬぞよ。ハルの身魂は福井の身魂であるぞよ。何時も辛い辛い山葵ばかりを作りて居るから、顔までが辛さうにしがんで居るぞよ。チツと改心

致<sup>いた</sup>さぬと鼻<sup>はな</sup>が高<sup>たか</sup>いぞよ。イクの身<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>は誠<sup>まこと</sup>に結<sup>けつこう</sup>構<sup>こう</sup>な身<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>でありたなれど、あまり慢<sup>まん</sup>心<sup>しん</sup>を致<sup>いた</sup>したによつて守<sup>しゅご</sup>護<sup>ご</sup>神<sup>じん</sup>は現<sup>あら</sup>はしてやらぬぞよ。此<sup>この</sup>方<sup>ほう</sup>の申<sup>まを</sup>事<sup>こと</sup>を誠<sup>まこと</sup>に致<sup>いた</sup>せばよし、聞<sup>き</sup>かぬにおいては杉<sup>すぎ</sup>原<sup>はら</sup>の身<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>をひきぬいて來<sup>き</sup>て、佐<sup>さ</sup>久<sup>け</sup>に醉<sup>よ</sup>はして何<sup>なに</sup>も彼<sup>か</sup>も白<sup>はくじ</sup>状<sup>やう</sup>致<sup>いた</sup>さすぞよ。人<sup>じん</sup>民<sup>みん</sup>が何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>シヤチになりても神<sup>かみ</sup>には叶<sup>かな</sup>はぬぞよ。早<sup>はや</sup>く此<sup>この</sup>方<sup>ほう</sup>の申<sup>まを</sup>す様<sup>やう</sup>に致<sup>いた</sup>して下<sup>くだ</sup>されよ。改<sup>かい</sup>心<sup>しん</sup>致<sup>いた</sup>さぬと『靈<sup>れい</sup>界<sup>かい</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>』の種<sup>たね</sup>と致<sup>いた</sup>すぞよ。そこになりたら何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>地<sup>ぢ</sup>團<sup>だん</sup>駄<sup>だ</sup>踏<sup>たふ</sup>みて口<sup>く</sup>惜<sup>や</sup>しがりても、神<sup>かみ</sup>は許<sup>ゆる</sup>しは致<sup>いた</sup>さぬぞよ。之<sup>これ</sup>は大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>が申<sup>まを</sup>すのではないぞよ。妖<sup>えう</sup>幻<sup>げん</sup>坊<sup>ぼう</sup>の身<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>虎<sup>こ</sup>の身<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>イルの肉<sup>にく</sup>體<sup>たい</sup>を一<sup>ちよつと</sup>寸<sup>しやく</sup>借<sup>やく</sup>用<sup>よう</sup>致<sup>いた</sup>して皆<sup>みな</sup>の八<sup>やち</sup>衢<sup>また</sup>人間<sup>にんげん</sup>に氣<sup>き</sup>をつけたのであるぞよ。今<sup>いま</sup>に高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>の様<sup>やう</sup>に齋<sup>い</sup>苑<sup>そ</sup>の館<sup>やかた</sup>から立<sup>たち</sup>退<sup>の</sup>き命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>を蒙<sup>かうむ</sup>らねばならぬぞよ。改<sup>かい</sup>心<sup>しん</sup>なされよ。足<sup>あし</sup>もとから鳥<sup>とり</sup>が立<sup>た</sup>つぞよ。アハハハハ』

と笑<sup>わら</sup>ひ興<sup>きよう</sup>じてゐる。そこへ齋<sup>い</sup>苑<sup>そ</sup>の館<sup>やかた</sup>より神<sup>しん</sup>勅<sup>ちよく</sup>を帶<sup>お</sup>びて出<sup>しゅつ</sup>張<sup>ちやう</sup>した二人<sup>ふたり</sup>の役<sup>やく</sup>員<sup>ゐん</sup>があつた。一人<sup>ひとり</sup>は安<sup>やす</sup>彦<sup>ひこ</sup>、一人<sup>ひとり</sup>は國<sup>くに</sup>彦<sup>ひこ</sup>であつた。

安<sup>やす</sup>彦<sup>ひこ</sup> 『祠<sup>ほこら</sup>の森<sup>もり</sup>の受<sup>うけ</sup>付<sup>つけ</sup>の主<sup>しゅ</sup>任<sup>にん</sup>は誰<sup>ど</sup>方<sup>なた</sup>でムるかな。拙<sup>せつ</sup>者<sup>しや</sup>は齋<sup>い</sup>苑<sup>そ</sup>の館<sup>やかた</sup>より教<sup>けう</sup>主<sup>しゅ</sup>八<sup>やち</sup>島<sup>しま</sup>主<sup>ぬし</sup>命<sup>のみこと</sup>の命<sup>めい</sup>により出<sup>しゅつ</sup>張<sup>ちやう</sup>致<sup>いた</sup>したものでムる。何<sup>なに</sup>卒<sup>そ</sup>一<sup>いつ</sup>刻<sup>こく</sup>も早<sup>はや</sup>く當<sup>たう</sup>館<sup>やかた</sup>の神<sup>かむつ</sup>司<sup>しかう</sup>珍<sup>しん</sup>彦<sup>ひこ</sup>に面<sup>めん</sup>會<sup>くわい</sup>が致<sup>いた</sup>したい』

イル「ヤー、これはこれは直使のおいで、先づ先づ之にて御休息願上げ奉りまする。とり亂したる處を御覽に入れ、眞に赤面の至りでムりまする。おい、ハル、テル、サール、イク、早くお二人様のお足の湯を湧かして持つて來ぬか」

「いや、決してお構ひなさるな。珍彦の司にお目にかかりたければ、直様御案内を願ひたい。澤山に徳利が竝んでゐられますな。櫻の花の如き杯が彼方此方に散つて居る風情は何とも云へぬ風流でムる。國彦殿、實に羨望の至りではムらぬか」  
「如何にも、落花狼藉、夜半の嵐に散らされて、打落された櫻木の麓の様でムるイル」  
「いや、もう此頃はチツとシーズンは早うムりますれど、ここは日當りがよいので、早くも櫻が散りかけましてムります。さア御案内致しませう」

安彦「それは恐れ入ります」

とイルの後に従ひ珍彦の館に進み行く。後四人は顔見合せ、頭を掻きながら、テル「おい、如何だ。サツパリぢやないか。エー、こりや一通りの事ぢやないぞ。屹度俺達にキツイお目玉を頂戴するのもかも知れないぞ」

サール「何、俺達にはチツとも關係はないわ」

「貴様はラマ教だから放逐の命令に接したかも知れないぞ。あの御直使がお前の顔を非常に覗いてムつたぢやないか」

「何、そんな事があるものかい。祠の森の受付にサール者ありと聞えたる敏腕家は此男だなアと、感嘆の眼を以て御覽になつて居つたのだよ」

「さう樂觀も出来ないぞ」

「俺の考へでは、如何も高姫の身の上に關してぢやなからうかと愚考するのだ」  
イク「そら、さうだ。それに決まつてるわ。兔に角、誰の事でもよい。高姫の事としておけば安心ぢやないか。俺等には、よく勤めたによつて賞状を遣はすと云ふ恩命に預かるのかも知れないぞ、何と云つても、あれだけ八釜し家の高姫に、おとなしく仕へてゐるのだからな」

斯く話す所へ、イルはニコニコしながら歸つて來た。

サール「おい、イル、何ぞよい事があるのか。大變嬉しさうな顔ぢやないか」

「ウツフフフ（聲色）某は齋苑の館の教主八島主命の直命により、祠の森を主管する珍彦の館に神命を傳達するものなり。確に承はれ。」

一、此度、イル事、義理天上日出神の生宮と現はれし上は、汝をして齋苑の館の  
總監督に任ずべし。水晶魂の生粹の其方なれば、義理天上日出神の生宮として、  
決して恥かしくなき人格者也。神命ならば謹んでお受け致されよ。(笑聲)ウエー  
へエツへへへへ。

一、サールなる者、朝から晩まで事務を忽かに致し酒を呷り管を巻き、イルの命  
令を奉ぜず、同僚が事務の妨害をなすこと、以ての外の悪者也。故に逸早く鞭を  
加へて放逐致す可きもの也。イツヒヒヒヒ。

一、イク事、サールに次ぐ不届者にしてバラモン教を失敗り、行く所なくして已  
むを得ず祠の森に座敷乞食を勤むる段、中々以て許し難き不届者なれば、之亦鞭  
を加へて放逐す可きもの也。

一、ハル事、大膽不敵の曲者にして、頭をハル事此上なき名人なり。否佞人也。  
斯くの如きもの聖場にあつては神の名を汚し、教を傷つくる事最も大也、且酒癖  
悪く、上げも下しもならぬ動物なれば、これには箒を以て頭を百打叩き、一時も  
早く放逐す可きもの也。キユツツツツ、ウツフフフフ。



一、テル事、比較的好々爺にして、よくイルの申す事を服従するにより、之は少しく教を説き聞かした上、汝が僕に使用すべきもの也。ウエヘツヘヘヘヘ、ホホホホ、エヘヘヘヘ

テル「こりや、イル、馬鹿にするない」

「あいや、決して馬鹿には致さぬ。八島主命の御直命なれば、襟を正して行儀よく承はりなされ」

サール「おい、イル、空助、高姫は如何だ」

「やア者共、騒ぐな騒ぐな、静かに致せ。空助は誠に以て完全無缺なる悪魔なれば、一刻も早く放逐すべし。又高姫は自轉倒島の生田の森に追返すべし。珍彦は

一切の事務をイルに引継ぎ、逸早く此場を退却す可きもの也。

右の條々決して相違これあるもの也。オツホホホホ

サール「ナランダ、馬鹿にしてゐやがる。俺の胸が雨蛙の様になりよつた。のうイク、ハル、テル。イルの奴、あまり馬鹿にするぢやないか。一つここらで袋叩

きにやつてやらうぢやないか」

イク「そりや面白い、併しながらお直使の御入來だから、まアまア今日は見逃しておけ。おい、イルの奴、貴様は仕合せものだ。今日から、【しよう】もない藝當をやると叩きのばすぞ」

「叩き伸ばして太るのは鍛冶屋さまだ。然しながら貴様等も本當に形勢不穩だぞ。確り致さぬと、どんな御沙汰が下るやら分らぬから氣をつけたが宜からうぞ。本當の事は俺等には分らぬのだ。初稚姫と珍彦さまが奥の間でソツと御用を承はつてゐるのだ」

イク「成程、大方「タ」印の事だらうよ。何卒うまく行くといいがな」

イル「あんな奴がけつかりと參詣者も碌に詣つて來ないからな。然し小さい聲で襖の間から初稚姫の聲で、イルさまイルさまと仰有るのが聞えたよ。イヒヒヒヒ何か此奴ア、宜い事があるに違ひない。何せよ昨夜の夢が乙だからな。その聲を聞くと忽ち俺の胸は躍る、腕は鳴る、俺の精神は生れ變つた様になつて來た。人間は一代に一度や二度は運命の神が見舞ふものだから、此風雲に乗ぜなくちや人生は嘘だ。之からこのイルさまは立派な立派な宣傳使になつて驍名を天下に輝

かし、月の國へでも行つて大國の刹帝利になるのかも知れぬぞ。さうすれば貴様  
らを右守、左守の司に任命してやるからな」

サール「へん、梟鳥の又宵企みだらう。初稚姫様が何程イルさまと仰有つたつて、

あの男は受付にイルか、要らないものか、或は道樂者だから此處にイル事はイル  
さまと仰有つたかも分らないぞ。兔も角貴様も用心せないと駄目だ。氣をつけよ」

「へん、何と云つても一富士、二鷹、三茄子と云ふ結構な夢を見たのだからな。

こんな夢は出世する運のいいものでなければ、メツタに見られぬからのう」

「そんな夢が何いいのだ。よく考へて見る。富士の山程借金があつて、如何にも

斯うにも首が廻らず、鷹い息もようせず、高姫には喚かれ、箒で叩かれ、又その

借金は茄子（濟す）事も出来ず、高姫の壓迫に對しても如何とも茄子ことが出来

ない貴様は腰抜けだよと天教山の木花姫さまが夢のお告げだよ。アツハハハハハ、

お氣の毒様、のうイク、ハル、テル、俺の判断は當つとるだらう」

テル「そりや貴様、當るに定つてらア。當一と云ふぢやないか。ウヘツエエエエ

エ」

斯く話す所へ足音高くやつて来たのは高姫であつた。

「これ、イルさま、お前一寸此方へ来てお呉れ。御用が出来たから」

「はい、行かぬ事はムいませぬが、一體何の用でムりますかな。御用の筋を承はらねばさう軽々しく行く譯には行きませぬ。此イルさまに畏れ多くも今日只今より、齋苑の館の八島主さまより祠の森の神司と任命されたかも知れませぬぞや。

それぢやによつて、今迄のイルとはチツと位が違ひますから、御用があればお前さまの方から、言葉を低う頭を下げて尾をふつて賄賂でも喰はへて御出でなさらぬと、貴女の地位は殆ど砂上の樓閣も同様でムりますぞや」

「エーエ、辛氣なこと。早く來なさらぬかいな。誰も齋苑館から來てゐないぢやないか」

「高姫さま、貴女「エー辛氣」と仰有いましたね。そら、さうでせう。屋氣樓的空想を描いて、此館を独占せむとする泡沫の如き企みだから、屋氣樓が立つのも無理はありませぬわい。イツヒヒヒ」

「エーエ、仕方のない男だな。又酒に酔うてゐるのだな。それならイルは今日限

り此處を歸つて貰ひませう。其代りにハルや、一寸私の傍へ来ておくれ。御用を云ひ聞かしたい事があるから。お前は一寸見ても賢かりさうな、よう間に合ひさうな顔付きだ」

「はい、參る事は參りますが、何卒箒で叩かぬやうに願ひますよ。私も國には妻子が残してあり……ませぬから、箒なんかで叩かれちゃ、まだ持たぬ妻子がホーキに迷惑致し、宅の大切の夫やお父さまを虐待したと云つて悔みますからな」

「エーエ、文句を仰有らずに出て來るのだよ」

「おい、俺が行つたら屹度貴様等ア、首だからな。其用意をして居れよ。然し大抵の事なら、俺の高姫様が信認の力によつて、千言萬語を費し、辨護の結果助けてやるかも知れないから、俺の後姿を義理天上さまだと思つて、恭敬禮拜してゐるがよからうぞ。エヘン」

と肩肱怒らし、高姫の後から握り拳を固めて空を打ちながら、一寸後を振り返り、長い舌をニユツと出して四人に見せ、腮をしゃくり尻を振り従いて行く。

(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 北村隆光録)

第一八章 安國使（一三一—二）

珍彦館には、珍彦、静子、楓、初稚姫及び齋苑の館の直使なる安彦、國彦の六人がヒソビソと首を鳩めて懇談に耽つて居る。

珍彦「遙々と大神様よりの御使、御苦勞に存じます。何分至らぬ吾々、大役を仰せつけられ、力にあまり、勤めも碌に出来ませぬので、定めし八島主命様にも御迷惑の事でムいませう。定めて吾々の不都合をお叱りのためのお使でムいませうなア」

安彦「イヤイヤ決して左様ではムらぬ。貴方の赤心は誰知らぬ者もムいませぬ。教主様も大變にお喜びになつて居ますから、御安心下さいませ」

「左様でムいますか、不都合な吾々を、廣き心に見直し聞直し下さいまして誠に恐れ多い事でムいます」

静子「何分とも宜しく御願ひ致します」

「ハイ、よきに取計らひませう。先づ先づ御安心下さいませ」

初稚はつわか「安彦様やすひこさま、今度こんどお出いでになりましたのは、あの高姫さまたかひめの一件いつけんでごいませうな」

「お察さつしの通りとほ、彼高姫かれたかひめは齋苑いその館やかたに於おいて、副教主ふくけつしゆ東野あづまのわけ別に對たいして無禮ぶれいを加くはへ、其上そのうへ所在あるゆる狂態きやうたいを演えんじ、夜陰やいんに紛まぎれて館やかたを抜ぬけ出し、直様すぐさま此館このやかたに逃にげ來きたり、又またもや惡靈あくれいに左右さいうされて、神業しんげふの妨害ぼうがいを致いたすこと最もつとも甚はなはだしければ、一時いちじも早はやく此館このやかたを放逐はうちくし、自轉倒島おのころしまへ追おつ歸かへせとの御命令ごめいれいでごいませう」

「それは嘸高姫様さそたかひめさまがお驚おどろき遊あそばす事ことでごいませう。何なんとか穩便をんびんに高姫様たかひめさまに改心かいしんして貰もらひ、此處ここに暫しばしく御用ごようをさしてあげる事ことは出來できますまいかなア」

「貴女あなたのお言葉ことばならば、決けつして違背あはいはごいませうまい。併しかしながら吾々われわれは教主けうしゆのお使つかひにて參まゐりしものなれば、獨斷どくだんにて如何いかんともする事ことは出來できませぬ」

「成程なるほどそれは御尤ごもつともでごいませう。教主けうしゆさまの御命令ごめいれいとあらば致いたし方かたりませぬ。併しかしながら茲暫こゝしばしくの閒私あひだわたしにお任せまかせ下くださるまいか。何なんとか致いたして高姫さまたかひめの身魂みたまを救すくひたいものでごいませう。今放逐いまはうちくすれば益々ますます心荒こころあみ、上あげも下おろしもする事ことが出來できないやうになるかも知しれませぬ。何卒どうぞ八島主様やしまぬしさまにお會あひでしたら、茲暫こゝしばしく初稚はつわか姫ひめに

お任せ下さるやうお願い下さいませぬか

「ハイ承知致しました。直様立ち歸り御猶豫を願つて見ませう」

「早速の御承知、有難う存じます」

國彦「イヤ珍彦殿、高姫殿は何か怪しき男を引き入れて居られるとか聞きました

たが、それは何者でムいますか」

「ハイ、眞偽の程は吾々には分りませぬが、どうも怪しいものでムいます。齋苑

の館から參つた、空助だと云つて居られますが、どうしても初稚姫様にお會ひな

さらぬのでムいます。それが第一私の不思議とする所、一度初稚姫様にお尋ねし

て見たいと思つて居ますが、餘り失禮だと思ひ、お尋ねも致さず控へて居りまし

た」

「ハテナ、空助總務は日々齋苑の館へ御出勤になつてゐます。彌もつて不思議の

至りでムる。何か怪しい點はお認めになりませぬかな」

「ハイ、何だか存じませぬが、大變に犬がお嫌ひださうでムいます。此間も森を

散歩して躓き眉間を石で打つたと仰せられました、一寸私が窺ひますのに、顔



倒て打つた傷ではなく、犬に噛まれたやうな深い齒形が附いて居りました」

成程、そいつは益々怪しうムる。安彦殿、如何思召されますか。こりや聞き捨てにはなりませんまい。一つ正體を調べたいものですなア」

「サア、吾々はお使に参つたのは、何も彼も一切を調べて来いとこの事なれば、高姫は申すに及ばず、空助と名乗る人物を能く調べて報告を致さねばなりませんまい」  
國彦「左様でムる、直様着手致しませう」

珍彦「一寸お待ち下さいませ。餘程考へなくては、先方に悟られては又逃げ出すかも知れませぬから、一寸私が様子を伺つて参りませう」

楓「あのお直使様、高姫さまと夫婦だと云つて、それはそれは朝から晩迄、酒ばかり呑んで一寸も事務は見ないのでですよ。そしてお父さまやお母さまを毒散と云ふ薬で殺さうとしたのですよ。けれども文殊菩薩様が夢に現はれて神丹を下さいましたので、お蔭で毒が利かなかつたのです。さうでなければ、私の両親はどうの昔になくなつて居るのです。彼んな奴は早くどうかして貰はなくは、本當の事、一目も寝られないのです。初稚姫のお父さまだなんて云ひながら、正體が現

はれるのが怖ろしさに一度も姫様に會はず、此頃は初稚姫様を此館に閉ぢ込めて了ひ、自分の居間には高姫と二人で誰も通さないのです。きつとあいつは妖怪に違ひありません。そして高姫さまは、妖怪を空助さまと思つて居るのです。齋苑の館の空助さまが彼方にもあり、此方にもある道理がないぢやありませんか」  
安彦「ハテ、聞けば聞く程不思議千萬でゐる。これはテツキリ妖怪に間違ひありません。初稚姫殿、貴女のお考へは如何でゐます」  
「私の考へでは空助と名乗る怪物は、大雲山に居る妖幻坊と云ふ悪魔に違ひないと考へます。何と云つても妾の愛犬スマートが怖くて仕様がなないのでゐますも

の」

安彦は二歩三步ニジリ寄り、目を見張り、口を尖らしながら、  
「姫様、それがお分りになつて居るのに、何故今まで放任しておかれたのですか。早くスマートを使喚かけて亡ぼしてやつたらどうですか。さうしたら高姫も目が醒めるではゐいませんか」  
「さうして見ようかとも思ひましたが、俄に左様な事を致せば、高姫様が大變な

恥をお搔き遊ばすなり、又失望落膽の程が計り知られないと思ひまして、ボツボツと氣のつくやうと、忙がしい體をここに留めて、時機を待つて居るのでムいませす」

「姫様、そんな、グツグツして居る場合ではムいませぬぞ。吾々兩人が承はりました以上、此儘歸る譯には参りませぬ、サア是から妖怪征伐に着手致しますから、何卒拙者等兩人にお任せを願ひます」

「あれしきの妖怪を倒す位は朝飯前の仕事でムいます。スマートだけでも立派に追ひ散らすでせう。併しながら彼を追ひ散らしてみた所で、又他の地方へ往つて悪事をなすに違ひありません。それ故に暫く此處に留め置き、心の底から彼の妖怪を改心させようと存じ、光を和らげて時機を待つて居るのですよ」

國彦「どうも腕が鳴つて仕方がないぢやないか。もし初稚姫様、そんな氣の永い事を云はずに、私にお任せ下さいませ。きつと私が退治てお目にかかせよう」

「短氣は損氣、まア待つて下さいませ。お直使様のお言葉を背いては濟みませぬが、何と云つても妾の父と云つて現はれたのでムいますから、假令怪物と雖も吾

父と名のついたものを、さう無闇に苦しめる事は情に於てすみませぬ。假令贗者にもせよ、父の名に於てどうして敵對へませうか。假令貴方が退治なさつても、この初稚の耳に入つた以上は何處迄もお止め致します。妾が知らぬ間に退治遊ばすのなら已むを得ませぬが、もう只今となつては、貴方も妾に對し左様な慘酷な事は出来ずまい」

安彦「何と親と云ふものは偉いものだな。假令如何なる惡魔でも親の名を名乗つて居るものを苦しめる事は出来ないとは、實に人情の深いお方だ。いや孝行の御精神だ。いやもう感じ入りました」

「それ故何處迄も赤心を盡して其妖怪を改心させ、救うてやりたいものです。妾もあの妖怪から吾娘と云はれたのですから、娘としての赤心を盡したいと存じます。斯様な妖怪に、假令言葉の上でも娘と云はれるのは何か因縁があるのでせう。どうか愛善の徳を以て彼を救ふべく、試験問題をお與へ下さつたのだらうと存じます」

「然らば是非に及びませぬ。イヤ國彦殿、これにてお別れ致さうぢやないか」

「何うも遠方を御苦勞様でムいました。高姫さまの件については今一應妾の意見を申し上げ、御詮議の上暫しの御猶豫あらむ事をお願い申します。そして否やの御返事は、無線靈話をもつて妾の耳迄お達し下さいますれば、結構でムいます」

「イヤ委細承知致しました。珍彦殿、然らばこれにて御免蒙りませう。随分貴方も御苦勞でムいます。初稚姫様に御返事のあり次第、貴方は祠の森の神司の職權を以て高姫に申渡しをなさるやうに、呉れ呉れも申渡しますぞや。決して遠慮はいりませぬから、どしどしおやりなさいませ」

「ハイ委細承知致しました。それを承はらば、拙者も職權を以て御命令通り、何の憚る所なく斷行致しますから、何卒御安心下さいませ。此珍彦も何分神様のお道が充分に分つてゐないものですから、つひ高姫さまの口先に操られ、いつも屁古まされ通しですが、お直使を通しての教主様のお言葉、決して背きは致しませぬ」

「イヤそれ聞いて安心致しました」  
國彦「イヤ安彦殿、折角出張致したのだから、御本殿は申すに及ばず、此館は一

間も残らず見分致し、境内を一巡致して歸らうではムらぬか

珍彦「然らば幹部の役員に申付けて御案内を致させませう」

安彦「イヤそれは有難い。然らば二人許り案内を願ひませうかなア」

「承知致しました」

と云ひながら、磬板をカンカンと打つた。イル、サールの兩人は暫くして装束を

つけ珍彦が館に入り来り、

「今二人来い」と云ふお報せでムいましたので、直様装束を調べ罷り出ました。

お直使様に對し何か御用がムいますれば、承はりませう」

珍彦「いや、イル、サール兩人様、御苦勞でムいました。外でもありませんが、

お直使様お二人を一度御本殿に御案内申上げて下さい。そして境内を叮嚀に御案内

内申上げ、最後に空助様の御居間や、高姫様のお居間へ御案内なさるが宜しいぞ

や」

イル「ハイ承知致しました。サア御直使様、吾々兩人が御案内致させませう」

安彦、國彦兩人は軽く目禮しながら、イル、サールの後に従ひ御本殿に案内さ

れた。

茲に兩人は恭しく神言を奏上し、終つて宣傳歌を手向けた。安彦は歌ふ。

嚴の御靈や瑞御靈  
清き尊き大御稜威

現はれまして今此處に  
河鹿峠に名も高き

祠の森の眞秀良場に  
千木高知りて現れませる

國治立の大御神  
月の大神日の御神

バラモン教の司神  
大國彦を初めとし

盤古神王鹽長の  
彦の命や其外の

百の神等齋かひて  
常世の暗を晴らさむと

顯れませるこそ尊けれ  
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも

曲津は如何に荒ぶとも  
皇大神の御稜威もて

此世の曲を悉く  
伊吹拂ひに拂ひのけ

浦安國の浦安く 守らせ給へ惟神

神の詔を畏みて 産土山の聖場より

参り來ませる安彦や 國彦司と諸共に

御前に畏み願ぎまつる ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

國彦は又歌ふ。

吾は國彦宣傳使 高取村の與太彦と

名を知られたる與太男 彌次彦さまと諸共に

コーカス参りの其途中 お竹の宿に泊る折

日出の別の宣傳使 部下に仕へる神司

此處に現はれましまして 駒に跨がりいそいそと

小鹿峠の麓まで 來る折しも音彦の



神かみの司つかさと諸もろ共ともに 吾等われら二人ふたりは残のこされて

ウラルの道みちの目付めつけ等に 取圍とりかこまれて逃にぐる折をり

小鹿峠こしかたうげの峻坂しゅんぱんに 前後ぜんごに敵てきを受けうけしより

千尋ちひろの谷間たにまに落おち込んで 忽たちまち幽冥いうめいの人ひととなり

三途せうづの川かはまで到着たつちやくし 脱衣だつい婆ばさまにいろいと

小言こごとは八百竝つひやくならべられ 河かはを渡わたりて銅木像どうもくざう

其外そのほか怪あやしき者もの共どもに 二度ふたたび三度みたび出會しゆつくわいし

茲ここに漸やうやく身魂みたまをば 研みがきすまして宣傳せんでん使

仕つかへまつりし國彦くにひこぞ ああ惟かむながら神かみ々々

神かみの恵めぐみを身みに浴あびて 今いまは尊たふとき齋苑館いそやかた

司つかさの群むれに加くははりて 教をしへの道みちを宣傳せんでんし

歸かへりて見みれば此度このたびの 祠ほこらの森もりの直使ちよくしをば

云いひつけられし尊たふとさよ 此この御社みやしろに現あれませる

皇大神すめおほかみよ百神ももがみよ 何卒なにとぞ吾身わがみの使命しめいをば

完全つまらに委曲つばらに復かへり命ごと 申まをさせたまへ惟神かむながら

尊たふとき神かみの御前おんまへに 安彦やすひこ國彦くにひこ兩人にひこりやうにんが

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる ああ惟神かむながらかむながら々々

神かみのみたまの幸さちはひて これの館やかたに住すまひたる

妖幻えうげん坊ぼうの醜靈しこたまや 金毛きんまう九尾きうびの醜狐しこぎつね

一日ひとひも早はやく大神おほかみの 誠まことの道みちに目めを醒さまし

惡逆あくぎやく無道むだうをひるがへし 世界せかいに曲まがを行おこなはず

世人よびとを救すくふ御柱みはしらと ならさせたまへ惟神かむながら

神かみかけ念ねんじ奉たてまつる

と歌うたひ終をはり、恭うやうやしく拜禮はいれいをして階段かいだんを下くだり、又またもやイル、サールの案内あんないに連つれて

廣ひろき森林しんりん内ないを隈くまなく巡視じゆんしし、妖幻えうげん坊ぼうが遭難さうなん場ばをも詳くはしく實見じつけんし、落おちこぼれたる

血糊ちのりの、人間にんげんの血ちにあらざる事こと迄までよく確たしかめ、終をはつて八尋やひろ殿どのに上あがり、暫しばし休憩きうけいの後のち、

空助もくすけ、高姫たかひめの居間ゐまを臨檢りんけんせむと相談さうだんしながら茶ちやを啜すすつて居ゐた。

空助、高姫は安彦、國彦が今や吾居間に臨檢に来るとは、神ならぬ身の知る由もなく、ハルを相手にいろいと訊問を始めて居た。  
(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 加藤明子録)

## 第十九章 逆語(一三一一三)

高姫の居間には妖幻坊の空助、高姫兩人、六ヶしい顔をして上座に坐り、ハルをつかまへて油をとつてゐる。

妖幻「オイ、ハル、今表口に參つて何かゴテゴテ申して居つたのは何者だなア」

「ハイ、何でもムいませぬ。只道通が一寸受付へ立寄つたのでムいます」

「馬鹿を申せ。其方は吾々に隠し立てをするのだなア。齋苑の館から直使が来たのであらうがな」

「ハイ、エエ、それは、みえました。併しながら決して吾々に對して、御用もな

ければ何とも仰せられませぬ」

「珍彦館へ其方は案内をしたであらうがなア。様子は太抵知つて居るだらう」

「へーエ、イルに……イン、承はりますれば、此館の總取締にイルを致す……」

とか云ふお使いださうでムいます」

「高姫や此空助を放逐すると申して居らうがな」

「エー、そんなこた、一寸も存じませぬ。併しながら朝晩の御給仕もせず、酒ばかり呑んでる人物に對しては、どういふ御沙汰が下つたやら分りませぬな。直接

私は何にも聞かないものですから、かう申したと云つて、決して之が事實だか事

實でないか、保證の限りでムいませぬ。併し何だか妙な空気が漂うてゐますで。

何と云つても空助さまともあらうものが、スマート如きが怖いと仰有るものだけ

ら、へへへへへ、皆の連中がチヨコチヨコと噂を致して居ります。それより外は

何もムいませぬ。これは一文生中の掛値もない、ハルの眞心を吐露したのでムい

ますから、此上の祕密は何も存じませぬ」

「馬鹿を申せ。まだ外に何か祕密があるだらう。今の言葉から考へてみれば、貴

様等は申合せ、此方や高姫の悪口を申して、齋苑の館へ手紙をやつたのであらうがなア。それでなければ直使が出て来る筈がないぢやないか。なに頭を掻いて居るのだ、ヤツパリ都合が悪いとみえるな。コリヤ白状致さぬか」

とハルの襟首をグツと取り、剛力に任せて、座敷の中央に突き倒し、一方の手でグツと押へ、一方の荒い毛だらけの手に拳骨を固めて振上げながら、

「コリヤ、白状致せばよし、隠し立てを致すと、此鐵拳が其方の眉間へ觸るや否や、其方の脳天は木端微塵になるが、それでも白状致さぬか」

「イイ痛い痛い、アア誰か来てくれぬかいな、お直使様、早く、来て下さるといにな、イイ痛い痛い」

「サ、痛くば早く申せ。白状さへすれば許してやらう」  
「ハハ白状せと云つたつて、種のない事が白状出来ますか」

高姫「コレ、ハルさま、お前は五人の中でも一番利巧な男だ。それだから私がお前をイルの野郎の代りに受付頭にして上げたぢやないか。これ程私がお前をヒイキにして居るのに、なぜ隠し立てをなさるのだい。サ、早く言つてみなさい。決

してお前さまの爲に悪いやうにはせないからな

高姫さま、そんな無茶な事、あなた迄が言つて貰つちや、此ハルが何うして立ちますか。よい加減に疑を晴らして下さいな

妖幻 此奴は何處までもドシブとい、まてツ、今に思ひ知らしてやらう、サどうぢや

と又もや拳骨を固めて、力限りに打下さうとする一刹那 ウーウー、ワツウワツウワツウとスマートの聲、妖幻坊は體がすくみ、色青ざめ、其儘ツイと立つて自分の居間に逃げ歸り、蒲團を被つて慄うてゐる。スマートの聲は益々烈しくなつて來た。

高姫は少々慄ひながら、

コレ、ハルさま、お前はいい子だ。本當に様子を知つて居るだらう。サ、チャツと言うてくれ、其代り、お前をここの神司にして上げるからなア

ハイ、お前さま、用心しなされ。どうやら立退き命令が來たやうな按配ですよ  
ナア二、立退き命令が、そりや誰に、大方珍彦にだらう

「冗談云つちやいけませぬよ。珍彦さまはこの御主人です。お前さまは勝手に義理天上だとか云つて坐り込み、自分免許で日出神の生宮と威張つてゐるのでせう。それだからお前さまに立退き命令が来るのは當然ですワ」

「エーエ、まさかの時になつて、空助さまも空助さまだ。スマート位な畜生が、何程厭だと云つても、こんな正念場になつてから、自分の居間へ這入つて寝て了ふといふ事があるものかいなア」

「ヘン、誠にお氣の毒様、すんまへんな。何れ、悪は永うは續きませぬぞや」

「エーエ、お前迄が、【しよう】もない事を云ふぢやないか。サ、とつとと出ていつて下さい。この館は假令直使が來うが何が來うが、日出神の生宮が守護して居れば、誰一人居らんでもよいのだから、何奴も此奴も放イ出して【こまそ】。グヅグヅしてると先方の方から立退き命令なんて吐しやがるから、先んずれば人を制すだから此方の方から立退かしてくれろツ」

と珍彦館をさして行かむと立ち上る。そこへ安彦、國彦はイル、サールに案内され、襖をサツと開いて這入つて來た。

イル「エ、もし直使様、ここが所謂義理天上の居間でムいます。何卒早く立退き命令を申し渡して下さい。コリヤ高姫、ザマア見やがれ、イヒヒヒヒ、誠に以てお氣の毒千萬なれど、今日限りだと思つて、諦めて歸んだがよいぞや。油揚の一枚も餞別にやりたいけれど、生憎今日は油揚も小豆もないワ。サツパリ、コーンと諦めて、ササ、歸つたり歸つたり」

「エー喧しい、スツ込んでゐなさい。ここは義理天上日出神の神界から命令を受けて守護致す大門ぢやぞえ。そして直使といふのは誰だなア」

安彦「ヤア高姫殿、久しうムる」

「拙者は國彦でムる。此度、齋苑の館より一寸様子あつて参拜致した者でムる。境内の様子を見む爲、此處まで調査に來たのですよ。そして直使の趣は珍彦に申渡しあれば、やがて其方に對し、何とか沙汰があるであらう」

「ヘン、阿呆らしい、人民の命令位、聞くやうな生神ぢやありません。勿體なくも高天原の靈國の天人、義理天上日出神の生宮ぢやぞえ。此肉體は常世姫命の再來で、變性男子の御系統だ。何と心得てござる。……ヤアお前は北山村の本



山へやつて来て、トロロの井鉢を座敷中にブツつけた、國公ぢやないか。そしてお前は安だらう。へん、阿呆らしい、直使なんて、笑はせやがるワイ、イツヒヒヒ、大きに憚りさま。これなつと、お喰へ」

と焼糞になつて、大きなだん尻を引きまくり、ポンポンと二つ三つ叩き、體を三つ四つゆすり、腮をしゃくり、舌をニユツと出し、兩手を鳶が羽ばたきしたやうにしてみせた。

安彦「假令、拙者は神力足らぬ者にもせよ。天晴三五教の宣傳使、今日は又八島主命様より直使として参つた者でゐる。粗略な扱をなさると、齋苑の館へ一伍一什を申し上げますぞ」

「へん、仰有いますわい。八島主の教主が何だ。青い青い瘦せた顔しやがつて、まるで肺病の親方みたやうな面をして、此方に立退き命令、へん、尻が呆れて雪隠が躍りますワイ。お茶の一杯も上げたいは山々なれど、左様な分らぬ事を云ふ奴さまには、番茶一つ汲む譯には行きませぬワ。サア、トツトとお歸りなさい。高姫は斯う見えても、齋苑館の總務空助の妻でゐるぞや。何程安や國が立派な宣

傳使だと云つても、吾夫空助の家來ぢやないか。今こそ空助様は様子あつて役を引いてゐるが、ヤツパリ御神徳は三五教切つての偉者だ。どうだ兩人、義理天上の申す事を聞いて改心を致し、此方の部下となつて、此處で御用を致す氣はないかな」

國彦「安彦殿、困つた者でゐるな。論にも杭にもかからぬではゐらぬか」

「コリヤ與太、ソリヤ何を云ふのだ。勿體なくも日出神の生宮を目下に見下し、直使面をさげて、馬鹿らしい、何を云ふのだい。彌次彦、與太彦の兩人奴、又一途の川の出刃庖丁を、土手つ腹へつつ込んでやらうかな。あの時は黒姫と二人だつたが、モウ、今日は神力無雙の勇士、空助さまの女房ぢやぞ。何だ、糊つけものやうに、しやちこ張つて、其面は、マアそこに坐つたが宜からう」

隣の間にウンウンと唸る妖幻坊の聲、耳をさす如くに聞えて來る。

イル「モシお直使様、こんな氣違ひは後まはしと致しまして、空助の居間を取調べませう、何だか唸つて居るやうですよ」

安彦「ヤ、國彦殿、エー、サール殿とハル殿と三人、此發狂者を監督してゐて下

さい。拙者は空助と稱する人物の正體を見届けて参りますから」

と行かうとする。高姫は両手を擴げて、

「コリヤコリヤ安、イヤ彌次彦、イル、メツタに義理天上さまの許しもなしに、行くことはならぬぞや。さやうな事を致すと、忽ち手足も動かぬやうに致すから、

それでもよければ、行つたが宜からう」

イル「モシ直使様、行きますせう。此婆は何時もあんなこと言つて嚇しが上手です

からなア」

安彦「なる程、参りませう」

と次の間の空助の居間をパツとあげた。空助は櫛の棒を頭上高くふりかざし、力をこめてウンと一打、今や安彦の頭は二つに割れたと思ふ一刹那、床下より響き

来るスマートの聲、

「ウーッ、ワアウ　ワアウ　ワアウ」

空助は忽ち手痺れ、棍棒をふり上げた儘、一目散に裏の森林指して、雲を霞と逃げて行く。高姫は矢庭に空助の居間に入つて見れば藻抜けの殻。

「コレ空助さま、何處へ行つたのだい。卑怯未練にも程があるぢやないか、サ早く歸つて下さいな。エーエ、何と云ふ氣の弱い人だらう、本當に優しい人は、こんな時になると仕方がないワ。併し無抵抗主義の三五教だから、相手になつてはならない。こんな奴に掛り合つて居つたら、カツタイと棒打ちするやうなものだと思つて、逃げなかつたのかな。兵法三十六計の奥の手は、逃げるが一番ぢやといふ事だ。ヤツパリ空助さまは、どこともなしに賢明な方だなア。到底ここに居るガラクタには比べものにはなりません。日出神も空助さまには感心致したぞや。コレ彌次彦、與太彦、どうだい。感心したかい。チツトお筆先を頂いたらどうだい。結構なお筆先が出てゐるぞや。此イルも知つて居る通り、一字々々文字が動くのだから、そして正體を現はして龍となり、天上をするといふ生きたお筆先ぢやぞえ。どうだ、折角此處まで來たのだから、頂いて歸る氣はないか。頂くとんでも筆先は直筆でも寫してもやりませぬぞや。お前の耳の中へ容れて歸ればいいのだから……」

安彦 「ああ困つたものだなア、上げも下しもならぬ奴だ。阿呆と氣違ひにかかつ

たら、どうも手のつけやうのないものだ

「ヘン、お前もお筆先をチツとは頂いてをるだらう。變性男子様が……阿呆にな

りてをりて下されよ。此方は三千世界の大气違ひであるぞよ。氣違ひになりて居

らねば此大望は成就致さぬぞよ。此方は誰の手にも合はぬ身魂であるぞよ。鬼門

の金神でさへも往生致すぞよ。中にも義理天上日出神の神力は良の金神も側へも

よれぬぞよ。結構の身魂が世におとしてありたぞよ。餘り神を侮りて居りたら、

赤恥をかいて、大きな聲で物も言へぬぞよ。日出神を地に致して三千世界の御用

をさしてあるぞよ。何も知らぬ人民が、ゴテゴテ申せど、何も心配致さいでもよ

いぞよ。譯の分らぬ人民からいろいろと申されるぞよ。それを構うて居つたら御

用が勤まらぬぞよ。神はいろいろと氣をひくぞよ。トコトン氣を引いて、これな

ら動かぬ身魂と知りぬいた上、誠の御用に使ふぞよ……といふ事をお前達は知つ

て居るか。知らな言うてやる、そこに坐りなさい。あああ一人の靈を改心ささ

うと思へば、随分骨の折れた事だわい。誠を聞かしてやれば面をふくらすなり、

ぢやと申してお氣に合ふやうなことを申せば、すぐに慢心を致すなり、今の人民

は手のつけやうがないぞよ。神も誠に聲をあげて苦しみて居るぞよ。中にも與彦、彌次彦のやうな八衢人間が、善の面をかぶりて、宣傳使などと申して歩く世の中だから、困つたものであるぞよ。八島主命も言依別命も、學で智慧の出來た途中の鼻高であるから、靈國の天人の靈の申すことはチツとも耳へ入らず、誠に神も迷惑致すぞよ。これから義理天上の肉宮が、齋苑の館へ参りて、何も彼も根本から立替を致してやるぞよ。そこになりたら、今まで偉さうに申してをりた御方、首尾惡き事が出來るぞよ。神の申す中に聞かねば、後になりて何程苦しみ悶えたとて神は聞き濟みはないぞよ。改心が一等ぞよ。神は人民が助けたさに夜の目もロクによう寢ずに、苦勞艱難を致して居るぞよ。神の事は人民等の分ることでないぞよ。早く歸つて下されよ。四つ足靈がウロウロ致すと、神の氣障が出來るぞよ。早く歸つて下されよ』

とのべつ幕なしに大聲で呶鳴り立て、安彦、國彦の直使を煙にまいて了つた。

(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 松村眞澄録)

第二〇章 悪魔拂「一三一四」

初稚姫、珍彦は楓とともに高姫の居間の騒々しきに、何事かと走り来り見れば、右の體裁である。

初稚「もし、お母さま、お直使様に對して、あまり御無禮ぢやムりませぬか。もう少し御叮嚀に優しく仰有つて下さいましな」

「エーエ、お前の飛び出す所ぢやない程にすつ込みなさい。何度云うても云うてもスマートを俺の目を忍んで簀の子の下に隠して置くものだから、到頭空助さまは何處かへ行つてしまつたぢやないか。本當に不孝な阿魔ツちよだな。今に神罰が當つて國替をせにやならぬぞや。義理天上さまのお筆先を拜讀いて見なされ。珍彦さまも静子さまも楓もお前も、都合によつたら御神罰が當つて命がなくなるぞや。チャンと御筆に出て居るぞえ」

「そらさうでせう。何れ虬の血を塗つた杯を頂いたものばかりですから。併しなからお母さま、安心して下さいませ。お蔭で吾々は御神徳を頂いて居りますから、

何程惡神や蟻が毒を盛りまして、チツとも利きは致しませぬから大丈夫で△います  
ます』

「エーエ、こましやくれた、何も知らずに……すつ込んで居なさい。此義理天上  
さまは何んな事でも皆御存じだぞえ。無形の神界の現象にも明かなれば、形體的  
の原理にも達してゐる。宗教、宗派は申すに及ばず、秩序標準の大本から改心の  
道、春夏秋冬四季運行の道、神國の大道、善惡正邪の道から守護神の因縁、無量  
長壽の神法から五倫五常のお道、向上發展の基、誠の大本、言靈の原理、日月の  
御因縁、火と水とお土の御神力は申すに及ばず、彌勒の教の大本に一靈四魂の原  
理、宇宙の眞理、文字の起源から忠孝の道、平和の大本、四海兄弟の教から因縁  
因果の有様、何から何まで知らぬ事はないぞえ。況して大先祖の因縁から此世の  
泥海を固めしめた神の因縁、身魂の性來竝に齋苑館の上から下までの役員の惡の  
身魂の性來、何から何まで鏡にかけた如く知つてるのぢやぞえ。何程泣く子と地  
頭には勝てぬと云つても、彌次彦、與太彦等の直使に屁古まされて「はい、左様  
で△いますか。へい、それなら仕方がありません。直に立退き申します」と云ふ



様なへドロイ身魂ではありませぬぞや。貴女も何時まで居つても詰りませぬから早く歸つて下さい。此處は義理天上日出神が一方で立てる仕組ぢやぞえ。さア皆さま、早く歸つて下さい。構ひ立てには來て下さるなや。もしも素盞鳴尊がゴテゴテ申したら、靈國の天人、變性男子の系統、義理天上の身魂が事の道理を説き聞かして改心させてやるから、お前等はよい加減に歸んだがよいぞや。ここは金毛九尾さまや、オツトドツコイ……金勝要神の教と龍宮の乙姫の守護とで變性男子の御教を立てて行く義理天上の射場ぢやぞえ。さアさア歸んだり歸んだり。あああ、こんな没分曉漢に相手になつて居つては日が暮れますわい。一寸失禮ながら便所へ行つて來ます。そしてユツクリとお話をして上げませうから、そこらで待つて居て下さい。ああ困つた代物ばかりだな。神様も大抵ぢやないわい。こんな盲聾を誠の道にひき入れてやらうとすれば骨の折れる事だ。此肉體もホーツと疲れた。肩も腕も腰もメキメキ出したワ。アーア

と云ひながら便所に一人立つて行つた。

向ふの林を見渡せば妖幻坊の空助が、早く來れと一生懸命手招きしながらトン

トン走り出す。高姫も空助に手招きされては最早堪らない。そこにあつた上草履を足にかけるや否や、一生懸命に空助の後を追ひ驅け出して了つた。そして、それつきり祠の森へは姿を見せなかつたのである。

スマートは二人の逃げ行く後を眺めて追ひ驅けようともせず「ワウツ　ワウツ　ワウツ」となき立ててゐる。

初稚姫、安彦、國彦、一同は高姫の逃走したのを目送しながら、追ひ驅けようともしなかつた。何れも悪魔拂ひをしたやうの心持になつたからである。高姫が祠の森に腰を据ゑようものなら、到底普通の手段ではビクとも動く氣配はない。されど妖幻坊の空助に心魂を蕩かし、其引力によつて、頑張つてゐたこの館を逃げ出したのは、實に珍彦にとつては無上の幸福であつた。スマートが後を追はなかつたのも初稚姫が直使に對し暫く待つて貰ひたいと云つたのも皆、かかる出来事を豫期しての事であつた。妖幻坊もこんな時には、實に三五教のためによい御用をしてくれた様なものである。

妖幻坊と高姫はトントントンと坂を下つて行く。其距離は殆ど二三丁ばかり隔

たつてゐた。されど高姫は執念深くも後を追つ駆け、漸くに山口の森にて追ひ付き、二人はここに一夜を明かすこととなつた。

安彦、國彦は珍彦に別れを告げ、委細の様子を齋苑の館へ復命すべく河鹿峠に登り行く。慌て者のイク、サール兩人は、何時の間にか高姫の後を追つ駆けて館を飛び出して了つた。初稚姫は懇々と後の行方を珍彦に教へ置き、ハル、テル、イルの三人に別れを告げ、神殿に拜禮を終り、高姫の一日も早く改心致しますやうと祈願を籠め、それより二三日をここに暮して又もや征途につく事となつた。勿論スマートは影の如く姫に従つてゐる。

イル、ハル、テルの三人は悪神の逃げ去つたのを感謝すべく神殿に参拜し、天津祝詞を奏上し、歌を歌つて感謝の意を表した。

イル「祠の森の受付に 仕へまつれるイル司

皇大神の御前に 慎み敬ひ高姫や

妖幻坊の曲津奴が 神の威徳に怖ぢ畏れ

一目散に逃げ出し 此聖場はもとの如

塵もとどめず清らけく いと穩かに治まりし

其御恵を御前に 慎み感謝し奉る

空助司と名乗りたる 妖幻坊の悪神は

其正體は吾々の 眼に確と見えねども

竝大抵の奴ならず 虎、狼か獅子、熊か

但は鬼の化物か 得體の知れぬ枉津神

これの館にノコノコと 現はれ來り朝夕に

酒飲み喰ひ管を巻き 只一言も神言を

唱へた事もあらばこそ 金毛九尾の憑るてふ

日出神の生宮の 高姫司と意茶ついて

此聖場を亂したる 實にも憎つくき曲者よ

如何にもなして災を 拂はむものと朝夕に

心ひそかに祈りしが 皇大神はわが祈願

いと平たひらけく聞きし召めし  
教をしへを亂みだす曲まが神かみを

拂はらひ給たまひし嬉うれしさよ  
いざ之これよりは吾われ々は

珍うづひこ彦ひこさまの命めい令れいを  
神かみの言こと葉はと慎つつしみて

朝あさな夕ゆふなに眞ま心こころを  
盡つくして仕つかへ奉まつらなむ

かくも曲まが津つの心こ地ちよく  
逃にげたる上うへは信まめ徒ひとも

喜よろこび勇いさみもとの如ごと  
參まゐ來き集つどひて神しん德とくを

再ふたび受うくる事ことならむ  
ああ惟かむ神な々が々ら

神かみの御み稜いづ威づも灼い然ちに  
守まもらせ給たまへ此この館やかた

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる  
朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも  
假たとへ令だい大だい地ちは沈しづむとも

皇すめ大神おほの御おん教をしへ  
如い何かでか違たがひ奉まつらむや

吾われ等ら三み人たりは村むら肝きもの  
心こころを合あはせ奉たてまつり

齋い苑その館やかたに現あれませる  
神かむ素す盞さ鳴の大おほ御み神かみ

守まもらせ給たまふ三あ五なの  
清きよき大おほ道ぢに仕つかへつつ

埴安彦や埴安の 姫の尊の御守りを  
頸に受けて四方の國 百八十島の果までも  
開きて行かむ惟神 尊き神の御守りを  
畏み畏み願ぎまつる

ハルは又歌ふ。

バラモン教の軍人 其門番と仕へたる  
吾は卑しきハル司 三五教の大神の  
尊き恵を蒙りて 心機俄に一轉し  
浮木の森の陣營を ヨル、テル二人と諸共に  
脱營なして齋苑館 詣でむものと來て見れば  
祠の森に三五の 玉國別の宣傳使  
留まりいますと聞きしより 其御教を仰ぎつつ

珍うづの御舍みあらかつか仕つかへます

漸やうやく宮みやは建たて上あがり

喜よろこぶ間まもなく玉國たまくにの

重おもき使命しめいを授さづけつ

其妻そのつまがみ神かみと現あれませる

今いまこ子の姫ひめは潔いさぎよく

珍彦うづひこ親おやこ子を止とどめおき

吾等われらは館やかたの諸々もろもろの

心こころを清きよめ身みを淨きよめ

金毛きんまう九尾きうびの宿やどりたる

突とつ然ぜんここに現あらはれて

義理ぎりてんじやう天てん上じやうの生宮いきみやと

大おほきな尻しりをすゑ長ながく

醜しこの教をしへを傳でん播ばんし

其神業そのしんげふに参さん加かして

遷宮せんぐう式しきも相濟あひすみて

別わけの命みことは吾々われわれに

惡魔あくまの征途せいとに上のぼりまし

五十子いそこの姫ひめを初はじめとし

齋苑いその館やかたに歸かへりまし

宮みやの司つかさと任まけ給たまひ

事務じむをそれぞれ命めいぜられ

仕つかへ奉まつれる折をりもあれ

心こころ拗ねぢけた高姫たかひめが

吾われは日ひ出で神柱かむばしら

其鼻息そのはないきもいと荒あらく

祠ほの森もりを占領せんりやうし

齋苑いその館やかたの神業しんげふを

妨害せむと企むこそ 困り果てたる奴なりと

心祕に案じつつ 皇大神に祈る折

又もや来る妖幻坊 空助司と名乗りつつ

高姫司と諸共に 館の奥に頑張りて

さしも尊き聖場を 攪亂せむと企むこそ

實にも忌々しき次第なり 如何はせむと思ふ間

初稚姫の神司 猛犬スマート引きつれて

ここに現はれ来りまし 神變不思議の神力を

隠し給ひて高姫や 妖幻坊が自ら

逃げ行く時を待ち給ふ 其沈着な行ひに

今更吾等も驚きて 感じ入りたる次第なり

ああ皇神よ皇神よ 吾等は愚なものなれど

心を清め身を浄め 朝な夕なに大前に

誠一つに仕へなば 何卒吾等を憐れみて



初はつ稚わか姫ひめの神しん力りきの  
 萬まん分ぶん一いちをも授さづけませせ  
 偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる  
 朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも  
 月つきは盈みつとも虧かくるとも  
 假たとへ令だ地いちは沈しづむとも  
 神かみに誓ちかひしわが言こと葉は  
 如い何かで違たがへむ神かみの前まへ  
 珍うづひこ彦かき司かきに從したがひて  
 皇すめ大おほ神かみの御み教をしへを  
 參ま來あき集つどへる人ひと々びとに  
 完う全まらに委つ曲ばらに宣のり傳つたへ  
 大おほ御み惠めぐみの萬まん分ぶん一いち  
 報むくはせ給たまへ惟かむ神ながら  
 御み前まへに謹つつしみ願ねぎ奉まつる  
 』

と歌うたひ終をはり、階か段いだんを下くだつて、もとの受うけ付つけに歸かへり行ゆく。

(大正一二・一・二三 舊一・一・一二・七 北村隆光録)

第二章

犬けん譚くわ〔一三一五〕

イク、サールの兩人は、高姫の逃ぐるを追うて、河鹿峠の急坂を下りながら歌ひゆく。

イク『大雲山に蟠まる 八岐大蛇のドッコイシヨ

其眷屬と現はれし 妖幻坊の曲津神

ウントコドッコイきつい坂 オイオイ サール氣をつけよ

義理天上の肉宮と 伴る高姫婆の奴

彼方此方の木の株に 蔓を引っかけ吾々を

すつてんころりとドッコイシヨ ひつくりかへそと企らみて

ウントコドッコイ行きやがった アイタタツタ、アイタタタ

矢張此奴は石だつた 何程高姫司でも

そんな事する間がなかる さうぢやと云つてドッコイシヨ

サールの司油断すな 敵は名に負ふ妖幻坊

金毛九尾の肉の宮 一すぢ繩ではゆかぬ奴

又もや此處を飛び出して どのかの聖場に巢を構へ  
 鐵面皮にも しゃあ しゃあと 日出神を振りまはし  
 納まりかへつて居るだらう かうなる上は何處迄も  
 後追つかけて彼奴等をば 面ひん剥いてやらなけりや  
 世界の害は何れ程か 分つたものぢやない程に  
 アイタタツタ躓いた 餘り先に氣を取られ  
 足許お留守になつたのか 尊い神の祀りたる  
 祠の森へぬつけりと 神さま面を提げよつて  
 やつて來るとは太い奴 挺でも棒でも動かない  
 強か者をスマートが 嚴の雄健び踏み健び  
 ウウウワンと吠え猛る 其猛聲に肝つぶし  
 驅け出すやうな弱い奴 何程口が達者でも  
 直接行動にや叶ふまい サアサア急げ早急げ  
 グツグツしとると日が暮れる もしも夜分になつたなら

彼奴等二人を見失ひ

残念至極口惜しと

臍を噛むとも及ぶまい

急げよ急げ、いざ急げ

神の御爲道のため

假令吾等は曲神に

命を取らるる事あるも

何かは惜しまむドッコイシヨ

ウントコドッコイアイタツタ

ほんとに危ない坂道だ

女の癖に高姫は

大きな尻を振りながら

中々足の早い奴

これも矢張り空助を

思ひつめたる一心が

戀の矢玉となり果てて

宙をば飛んで往くのだる

何程俺が走つても

向ふも矢張り走る故

ドッコイドッコイ コンパスに

よつぽど燃をかけなくちや

追ひつく事は難しい

こりやこりやサール何しとる

もちつと早う走らぬか

ウントコドッコイドッコイシヨ

谷の流れが囁々と

伊猛り狂ふ其音に

紛れて俺の云ふ事が

お前の耳に入らぬのか

思へば思へばジレツたい

いざいざ來れいざ來れ

敵は早くも逃げ失せた

こいつ遁しちや一大事

又もや小北の神殿で

主人面をば晒しつつ

何を致すか分らない

俺等は早く追つ付いて

途中で二人を引摺み

河鹿の流れに打ち込んで

三五教の妨害を

根絶しなくちや濟むまいぞ

お前も俺もバラモンの

神の教に仕へつつ

悪い事をば遺憾なく

今迄やつて來たものだ

ウントコドツコイ其深き

罪を贖ひ天國の

死後の生涯送るべく

改心したる其上は

何か一つの功名を

神の御前に立てなくちや

齋苑の館の神様に

一つも土産がなからうぞ

後ふり返り眺むれば

サールの奴は何うしてる

來れば來る程後れよる

ほんにお前はヤツトコシヨ ドツコイドツコイ辛氣臭い

なぜ又足が遅いのか アイタタタツタ パツタリコ

とうとう向脛打ちました これを思へば神様が

後を追ふなと云ふ事か いやいやさうではあるまいぞ

一旦思ひ立つた上は どこどこ迄も後を追ひ

彼が先途を見届けて 喉首グツとひん握り

もう是からは高姫は 改心致して自轉倒の

生田の森に歸りますと 云はさにやおかぬ俺の胸

心は千々にはやれども 肝腎要の向脛

強か打つた其爲に 心ばかりは急げども

何だか體が動かない アイタタタツタ アイタタツタ

サールの奴は何してる もうそろそろと追付いて

現はれ來さうなものぢやなア ああ惟神々々

肝腎要の正念場 何卒足の痛みをば

止めさせ給へ逸早く  
偏に願ひ奉る

両手を合せ此イクが

斯く坂道に倒れながら、尚も歌を續けて居る。此處へトントントンと足許覺束なげにやつて來たのはサールであつた。サールはイクの足から血を出して倒れて居るのに吃驚し、頓狂な聲を出して、

「ヤア、お前はイクぢやないか。どうした どうした」

「何うも斯うもあつたものかい。あまり貴様がグツグツして居るものだから、早う來ぬか早う來ぬかと、後を見もつて走つたものだから、大きな石に躓いて倒れたのだ。オイ、サール、俺には構はずに早く走つて呉れ。グツグツして居ると二人の奴、日が暮れたら分らぬやうになつて仕舞ふぞ。俺は後から足が直り次第追驅けて往くからなア」

「さうだといつて、お前がこんな怪我をして居るのに、これが何うして見捨てて行かりようか。此處は狼が澤山出る所だから、日が暮れるのに間がないから、劍

呑で耐らないわ。そんな事云はずに俺に介抱さして呉れ。何とまアえらい怪我だのう」

「俺は何うでもよいから、早く往かないと取り逃すぢやないか。俺が大事か、お道が大事か、よく考へて見よ。俺の足が一本位なくなつたつて構ふものか、なくなつたら義足でもつけたらいいぢやないか。さア早く往つて呉れ往つて呉れ」

「何ぼなんでも友人として俺は此處を見捨てて去るには忍びない。どうも貴様の顔色が悪いぞ」

「ああ貴様も臆病だなア。そんな事云つて彼奴等兩人が怖ろしいのぢやないか」  
「そりやさうだ。貴様と二人行くのなら力強いが、あんな化物や婆アの後を追つて俺が應援にいく積だつた。肝心のイクが倒れて俺だけ行つても、完全なイクサールは出来ぬからのう。負けるのは定つて居るから、そんな敗戦なら、行かない方が餘程利口だぞ」  
「貴様は人を當にするからいかぬのだ。人間の五人や十人居つたつて何にならう。」



神力無邊の神様に頼んで行けば、きつと彼奴等の鼻柱を挫き、きつと御用が出来  
るのだ。さア、行つて呉れ行つて呉れ。アイタタタ、どうも俺は息が切れさう  
だ。到底回復は覺束ないかも知れないぞ」

「氣の弱い奴だなア、貴様こそ、なぜ神様を祈らぬのだ」

イクは細い聲で、

「ああ惟神靈幸倍坐世。誠に無調法致しました。併し私はどんなになつても構ひ  
ませぬ。何卒サールに神力を與へて下さいまして、臆病風を追ひ拂ひ、勇氣を出  
して猪突猛進するやうにお願ひ致します。ああ惟神靈幸倍坐世 惟神靈幸倍坐世  
と祈る折しも、間近の木の茂みから破鐘のやうな聲で、

「アハハハハ、態を見よ。空助の計略にかり其有様は何の事、ても扱ても心地  
よやなア、アハハハハ」

「ヤ、居よつた居よつた。オイ、サール、取摺まへて呉れ、俺は此通り足が痛い  
のだから動けないわ」

「俺も何だか體が鯨こ張つて動けないのだ。アアアアどうしようかなア、アイタ

タタタタ何だか腰までが變になつて來たぞ」

林の中から、

「ウアハハハハ、こりやイク、サールの兩人、今空助が其方兩人を荒料理して喰つてやらう。てもさても不愼なものだなア。オイ高姫、彼奴等兩人を此榎の棒をもつて、頭をまつ二つに割つて參れ」

この聲の下より又ツと現はれた高姫は二人の前に立ち現はれ、榎の棒を打ち振りながら、

「こりや兩人、此高姫は其方を決して打ち叩きたくも、殺したくもなければ、わが夫空助殿のお言葉には背かれぬから、これまでの命と諦めて觀念致したがよからうぞ。ても扨ても飛んで火に入る夏の蟲、いらざる殺生をしなくてはならないやうになつたわいなア」

「こりや高姫、俺が足を傷付いたのを付け込んで殺さうと致すのか。ようし、面白い。殺されてやらう。オイ、サール、貴様も一つ殺して貰へ、吾々は尊き大神様の御守護があるから、滅多に惡魔のために命を捨てるやうな馬鹿ではないぞよ。」

さア高姫、イヤ妖幻坊、どうなつと致せ」

「それ程殺して欲しければ殺してやらう。併し、イク、サールの兩人、一つ改心の生宮は、貴様たちの様な蠅蟲を二人位殺したつて仕方がないのだから、何うだ、改心してお供致す氣はないか。此神は敵でも助ける神だぞや」

「ゴテゴテ云はずに早く殺さぬかい。オイ、サール、貴様は卑怯者だから、妖幻坊や金毛丸尾に降参して命だけ助けて貰へ、困つた奴だなア」

「イヤ俺も男だ。こりや高姫、妖幻坊の空助、どうなりと致せ。貴様の喉首にでも齧りついて反對に命を取つてやらう。覺悟を致せ」

「どうも、阿呆になつたら仕方がないものぢや。さう殺して欲しけりや、無益の殺生だが仕方がない。どうだ、覺悟はよいかな」

と櫂の棒を振り上げる。

イク「そりや何さらしてけつかるのぢや。蠅螂が藁すべを擔いだやうなスタイルをしよつて、さア早くすつぽりとやつて見い」

斯かる所へガサガサと大きな音をさせながら、妖幻坊の空助は巨岩を兩手に頭上高く差し上げ、今や二人に向つて投げつけむとする勢である。如何に勇猛な二人も、この岩石をくらつては、忽ち身體は木端微塵になるより仕方がなかつた。二人は進退これ谷まり、觀念の眼をつぶつて、一生懸命に大神を念じて居た。忽ち足許から「ウーウー、ウーウー、ワウワウ」とスマートの聲、妖幻坊竝に高姫は石を振り上げたまま、棒を振り翳したまま、強直して一生懸命に驅け出し、岩石に躓いて妖幻坊はバタリと轉けた。高姫は又もや躓いて棍棒を振り上げた儘、ウンと轉げた拍子に、棍棒で妖幻坊の後頭部をパチンと打つた。妖幻坊は「キャンキャン」と怪しき聲を立てて二聲ないた。何うしても人間の聲とは聞えなかつた。四邊に暗の幕はおりて咫尺暗澹、唯谷川の水のみ涼々と聞えて居る。

因にイクの瘡傷はスマートの聲と共に一時に全快した。

(大正一二・一・二三 舊一一・一二・七 加藤明子録)

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第五〇卷 眞善美愛 丑の卷

終り